

家族だから

カフェいろ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あなたにとつて、家族とは何ですか？

目

次

番外編

一から五

本編

だつて

今度こそ

そうだよね

分かつてる

どうして

知つている

それなら

143 96 79 69 50 42 21 1

## 番外編

### 一から五

いらっしゃい。この場は番外編の舞台。案内を務めるはこの私、中野七海。

ここでは、物語やキャラクター達の設定に関する<sup>スケジュール</sup>ことを公開したり、本編の回想、短編などが主な内容となつております。今回は、本編五話『どうして』まで読了された方のみ、ご覧ください。

一粒<sup>楽</sup>で二度おいしい。とまではいきませんが、副菜程度には味わつて頂けたら嬉しく思います。

それでは、もう一つの幕を上げるとしましょうか。始まり始まり。

最初は、私に関することですか。興味がある人なんて大していないでしょ<sup>う</sup>うに。

とはい<sup>え</sup>、この段階では私のことなどよく分からない。そういうた人が多いのも事実。そんな現状、少しでも<sup>皆</sup>読者<sup>が</sup>想像<sup>しま</sup>すには、良い試みかもしだせんね。

今、私の手元にはイメージを加速させるのに大いに役立つという資料があります。中身には、まだ目通してはいないので一緒に拝見しましょうか。

これは、私の絵ですね……。他人に描かれたのは初めての経験なので、恥ずかしい。皆さんにも見られてることを考えると、顔を正面に向けておくのは難しそうです。

……四葉姉、どうかしました?……何でしよう、紙だけ押し付けて走りさるなんて、らしくない行動ですね。

まあ、読めということで間違いないでしよう。何々……?

先程、私は羞恥の感情を顕わにしましたが、どうやら、すぐに慣れ

る必要がありそうです。というのも、提示した資料を参考とした、<sup>イラスト</sup>絵を募集するからです。

貰えたイラストは、番外編で紹介したり、場面に合うものは、本編の挿絵として活用する予定。

募集する場面は……たくさんありますね。一気に記載しちゃいましょう。

一話『だつて』から。

冒頭、母親と姉達に幼い七海が手を伸ばそうとして、遮られるシーン。

早朝、四葉が七海を驚かすシーン。

帰宅後、薬がなくなっていることに気づき、血の気が引く七海。食後、水面を見つめる七海。

二話『今度こそ』から。

冒頭、幼い四葉が同じく幼い二つの手を離してしまったシーン。

脱衣中、先輩呼びされて脳内電球が眩く光る、もしくは点滅する四葉。

ラスト、四葉が七海の手を強く握るシーン。

三話『そうだよね』から。

昼休み、保健室で七海が起きて握られた手の先を見ると、一花が寝ているシーン。

放課後、中野家で風太郎が七海にテスト問題を出す直前で、合格ラインを下げるで苦笑する七海。

四話『分かつて』から。

ラストシーン、らいはの様子を想像しながら苦笑して、優しく「分かつて」いう風太郎。

五話『どうして』から。

夜分、自室で露出した谷間を見ながら過去に怯えていたことを思い出すシーン。

同じく夜分、三玖の自室で眠るお姫様を抱っこするシーン。

ラスト、屋上で二乃と七海が向かい合うシーン。

上記以外にも、気に入ったシーンがあれば気軽にお送りください。

その他、フリーイイラスト自由な題材の絵や登場キャラクターの関係性を表した一枚、制服以外の七海の格好も募集しています。今のところ思い当たるのは、寝巻き、普段着、学校の制服でブレザー着用時、バイト先での制服などでしょうか。

複数色、白黒は指定しません。絵柄も資料に似せる必要もないです。様々な人が表現する私達を見れたらなと思います。あ、でも年齢制限に引っかかる絵は送られてきても載せられないで悪しからず。

……何だか舞台袖が騒がしいですね。

「どうしました？」

「上杉君が一枚もこないんじやないか、なんて意地悪を言つたので裁判にかけていました」

「そ、そうですか……」

私も同様のことと思つていましたが、胸に納めておいてよかつた。ああ、判決が下されたようです。彼、四話の回想までに戻つてこれるでしょうか。

次は、本編の回想です。

まずは、一話『だつて』から振り返つていきましょう。呼ばれた人トは、この人。

「一花お姉さんだ！」

「……中野一花さんです」

「あ、あれ？なんか七海、冷たくない？」

「そんなことありませんよ。ただ気分上々だなあと、引いていただけです」

「やつぱり冷たい！」

「どうせ、一話の回想だから一花でいいだろ。みたいな、安直な発想で呼ばれただけでしようし、そこまでのテンションで臨まなくてもいいと思いますが」

「それは無理そうだなあ。だつて……」

「だつて？」

「ううん、何でもない。後がつかえてるし、始めよう？」

特に否定する理由も見当たらぬので、頷くことした。

「一花姉は、どこか気になつたシーンはありましたか？」

「うーん、いくつあるけど、四葉が七海を驚かしたところを実際に見たかつたなあ」

からかう様な表情でこちらに視線を送つてくるが、望み通りの反応などする気はない。

「そこは募集しているイラストにもありましたね。なら、私が一花姉を驚かしたところも絵にならぬかと期待しよう」

「そ、それは五話の内容でしょ！今は、一話を振り返る時間だから禁止！」

「ふふ、そうでしたね。この話は終わりにしても？」

先程の私同様、否定できまい。激しく首を縦に振つたのを確認してから進行する。

「他に気になるところは？」

「なんか、丸投げしてる感じが……」

「そんなことありませんよ。この話の語り部は私なので、気になるところと言われても思いつかないだけです」

お得意の嘘である。しかも、丸投げという部分は一切否定できていない。でも、誤魔化せればいいのだ。

「そつか、じゃあ私がドンドンあげていかないとね」

「ええ、頼りにしています」

「一花お姉さんに任せなさい！」  
姉としての自覚回路お姉ちゃんスイッチがオンになつた様子。

「ピッククリしたのは、先輩呼びだつたなあ」

「あれですか。適当な思いつきによるものでしたが、みんなは何が気にいったのでしょうか？」

「気にいるな、というほうが無理あるよ」

答えになつていながら、私としては利用価値があるとわかっているのでいいか。

「あとは、Oh! バレテーラ。かな? 七海つてたまに古臭い表現するよね? 昔のテレビとか見てるの?」

「正確には、見てたですね。これについては、そのうち語る機会があるので今は置いておきましょうか」

「……そっか、待ってるね」

「ええ、待っていてください。いつか、必ず……。」

「うーん、他には何があるかなあ……」

「一つのシーンに注目する以外にも、この話全体に関してはどう感じましたか?」

「全体……一話は、七海とみんなの関係が描かれてるね」

「そうですね。特に、困った人姉達との関係性は、大方察せられる内容に思えます」

「あはは、特に二乃は……ね」

「さも、自分はそうではないかのように言っているが、私からすれば姉達全員大差はない。」

けれど、最も困ったちやんなのは、きっと私自身。

「私達の関係性が、後にどう変わっていくか楽しみですね」

関係性だけでなく、考え方や皆さんの印象、そして私達自身が、「さて、そろそろ次話の回想に移るとなりますか。お疲れ様でした、一花姉」

「え、もう出番終わり!?」

「五話分の回想があるんです、早く退場してください」

「そんなあ!」

ゲストの中野一花さんでした。はい、拍手!。

次は、二話『今度こそ』の回想になります。ゲストはこの人!

「な、中野四葉です……」

「どうしました? 元氣がありませんね」

「そ、その。二話なのに二乃じやないから、私に厳しい視線が……」

「語り部は四葉姉なので、文句を言われても困ります」

「きつと二乃も分かつてゐるから、文句の代わりに視線を飛ばしてきて  
いるんだと思う……」

このままでは、進行するのにも支障がでかねない。助け舟を出す  
か。

「ぶつちやけ、二話が最も少ない文字数なので、出番も必然的に……」  
この先は言わなくともわかるだろう。ただの脅しだが。

「ええー！そんなあ！一花よりも少静かなないの？！」

耳元で叫ぶな叫ぶな。でも、らしくない彼女よりはまだ良マシいか。  
「その代わり、丸投げしていた一花姉の時と違つて、私が気になる点を  
言つていきますね」

四葉姉に突き刺さる視線は消えたが、今度は舞台袖が煩い。  
「ほら、ぐずぐずしてると時間なくなっちゃいますよ？」

「それはヤダ！」

「では、始めますね。まずは、四葉姉が私を驚かしたシーンから」

「あれ……？さつきも同じところを話してなかつた？」

「よく氣づきましたね。使いまわしです」

「え」

「冗談ですよ」

本当は冗談でもなんでもないただの事実だ。だが、話相手が変われば内容も変化する可能性がある。また違った角度からの回想が期待できるのだ。

「一花姉だけじゃなくて、四葉姉とも話したかつたんですよ。今回は当事者一人での会話トーグなので、より深く話せるかなと」

「そつかあ。あの時は浮き足だつて、七海には申し訳ないことしちやつたな」

「それだけ楽しみにしてくれていた、ということは嬉しく思います。自分の通つてゐる学校での生活を楽しみにしてくれる人がいる。それが身内となれば尚更ね」

「学校もそうだけど、やつぱり一番は七海と一緒に通えることだつた

よ」

「五話時現点では、一回しか一緒に登校していませんが……回数、増やせ

るよう配慮しますね」

「う、うん！やつたあ！」

「登校といえば、先輩呼びの時はすぐ喜んでいましたね」

「あ、あれ？それも一花の時に——」

「——気のせい氣のせい」

語り部が違うだけで前半は一話と似た内容なのだから、仕方ない。「一花姉からは、要領を得ない回答しか貰えなかつたので気になりますね」

「え？えーっと、とにかく嬉しかつたとしか……」

素敵なハニカミ笑いは見ていて気持ちが豊かになるが、結局理由は分からずじまい——で済ませるような私ではない。一番相手だと追及しても望む結果が得られるかはわからないが、四番ならいけると判断した。

「納得できません、なので質問していきますね」

尋問<sup>ターキング</sup>のお時間。

「な、なんか七海、怖いよ？」

「そんなことありませんよ。もしかすると四葉姉は、普段の私に何らかの不満があつたりしませんか？」

嬉々の感情を抱いたということは、感じるまでの気持ちと比べて落差——とまではいかないまでも、差があつたのは確実だ。

「不満なんて……ただ、もうちょっとお姉ちゃんを頼つて欲しいなあ……つて思つてたり」

それは彼女の自己満足でしかない。そう簡単に処理してしまうには、躊躇われる何かが私の中で燐つていた。

「なるほど。私は末っ子なのでそれに共感はできませんが、頭の片隅には入れておきます」

彼女が隠したがつていた胸の内を吐かせたのは私だ。なら、これぐらいのことはしておこう。

「そういえば七海、上杉さんが来る日が早くなつたつて言つてたよね？」

私が話題を振る流れのはずなのだが……まあ、この形が私達の普段

通りに近いからいいか。

「ええ、パパに放つた余計な一言が原因のあれですね」

「あの時はスルーしちゃつたけど、一体何を言つたの?」

「落第しかけて転校するのに、悠長に構えている時間なんてあるんですかねえ。そう言いました」

一日早めたところでどうこうなる問題でもない。だが、私の言葉はあくまでも切つ掛けでしかない。あの日の父は、普段と様子が違つたのだ。

「あはは……うん、そうだよね。頑張らなくちゃ、私」

それについては言及しない。もし、本編で語った言葉に何かを付け加えるとするならば、誰かの力を借りることだ。その『誰か』は分からぬが、一応私だつた時の為に準備はしておこう。

そこまで考えて、先程彼女の気持ちに共感できないと返したことを思い出す。あれは撤回するか。

「そんな意気込みを見せてくれたところで、二話の回想は終わりです。お疲れ様でした、四葉姉」

「え、もう終わり!?」

「そのくだりやつたので、他のリアクションでお願いしますね?後続の方々」

「最後は私に話しかけてすらいないー!」

ゲストの中野四葉さんでした。はい、拍手ー。

三話『そだよね』の回想に登場するゲストは、この人!  
「…………ん」

「中野三玖さんです!」

「マイペースに」と歩いてきては、碌な挨拶もないという他の姉達なら小言を零す登場の仕方だったが、この人相手なら特に思うこともあるまい。

「オツケー」

「はい?」

「オッケー」

急に表情を変化させて謎の承認を連呼する奇行には、困惑する選択肢しか持ち合わせてない。

「……ああ！一花姉の真似ですね」

「うん、どうだつた？」

必死に考えてなんとか搾り出した正解だつたが、返ってきた言葉は想定外のもの。

「どうだつたつて……似てましたよ？」

「それだけ？」

「え？」

それ以外に何か求めている言葉があると。

「……可愛らしいですよ。元気がでてきました」

一番の物真似でも間違つてはいないが、正確には五番が一番を真似したのだ。それを見て、当時の私は可愛らしく感じて、少し気分が晴れたのを思い出した。

「……ん。そっか」

物真似なんかより、今のほうがよっぽど可愛らしい。そう感じるほどに素敵な笑顔。

「それじゃ」

「なに満足して帰ろうとしてるんですか？」

「でも、回想したよ？」

「ワンシーンだけです。最低三箇所はお願ひします」

「わかつた。任せて」

言えば素直に頷いてくれる。これは事前に伝えてなかつた私の落ち度だ。

「二つ目は、朝食の時が凄かつた」

任せての言葉に偽りなし。登場の時と真逆のペースで進行してくれる。

「ソースアートのことですね。あれは自信作でした」

「私と四葉以外に、五月は星、二乃是黒リボンだつたけど、一花はどうする予定だつたの？」

「ああ、一花姉は寝坊してきたせいで作らなかつたのでしたね、そういう  
えば。一応、何種類かピアスでも描こうかなと、それで反応のよかつ  
た絵に似た物を次の他人の誕生日の誕生日の最も楽しみな要素とする算段でした」

「な、なんて計画的な」

「二乃姉も耳に穴開けでもしようか、見たいな事を言つてましたし、まとめて反応を伺うつもりでしたが、まあいいでしょう。別の機会はいくらでもあります」

それに最も悩むことになるのは、多分三番へのプレゼントだ。

「……プレゼント」

「あの、物のついででの調査みたいなものですから、あまり気にしないでくださいね？」

駄目だ聞こえちゃいない。これ以上何かを言つても無駄だろう。私に出来ることといえば、プレゼントを貰えるであろう、その日を楽しみにしておくことぐらいか。

「他には何かありますか？」

今は回想の時間。プレゼントを考えるのは後回しにしてもらわねば。

「他……もう無理しないで」

やだ。そう返したくなつたが、それよりも優先すべき言い分があつた。

「そもそも無理をしていた自覚がなかつたんです」

「言い訳しないの」

「ごもつともで。

「なら、約束でもしますか？」

「一話の時みたいに。

「ううん、必要ない。約束しても守りそうにないから、七海」  
よくわかつてらつしやる。

「次、七海が無理してゐる時は、もつと早くに気づくから大丈夫」

「その自信は、一体どこから出てくるんですかねえ」

「だつて、私達はお姉ちやんで先輩だから」

目上にいるからこそその自信。私も一度ぐらいは感じてみたいものだ。

「今度こそ、絶対に無理させない」

ん?

「そうだよね？みんな」

『勿論！』

「……あの、そんな無理して今までのタイトル回収しなくていいんですよ？」

「あつ、ばれた」

この人なりに、ゲストとしての役割を果たそうしてくれたのだろう。

「ふふ、見てくれているというのなら、自分のことを心配する必要もありませんね」

私のやりたいようにやらせてもらうとしよう。その先に、求める光景があると信じて。

「つて、もういないし」

中野三玖はクールに去つたとさ。はい、拍手ー。

四話『分かつてる』の回想まで来ましたが……語り部は不在のままでですか。取り敢えずゲストに登場してもらいましょう。

「…………」

「あの、二乃姉？なんで黙り？」  
だんま

三番ですら『ん』ぐらいは発していったというのに。

「だつて、今はちょっと気まずいし……」

「ああ、五話ラストのことを言つてるんですか？気にしなくてもいいのに」

静い事に発展するのではと危惧してゐるわけか。

「そう……？」

「まあ、あの後喧嘩に発展するなら、それはそれで楽しみだつたり。喧嘩つて、したことないんですよ」

仮想敵を殴る動作を繰り返す私を見て、二番の表情が変化する。

「どうしました？顔色悪いですよ？」

「いや、なんでもないわ。この話は終わりにしますよ？」

「そうですね。今は、四話の回想をする時間でした」

今度は安堵のため息。それほどまでに、不仲になる未来を想像するのが嫌だつたということかな。

「それでは始めていきましょうか。二乃姉、どこか気になる点は？」

「七海、あんた態々あいつのこと、入り口まで迎えに行つてたのね、そんなことする必要もないでしょうに」

「一応お客様なわけですし、出迎えたほうがいいかなと」

「お客様つて、ただの家庭教師でしょ」

「あれ？家庭教師つて認めているんですか？」

「認めてない！家庭教師なんていらないのよ」

「そうですねえ。話が急でしたから、そういう意見が出るのも無理ないかと」

それ以上に生徒のほうに問題があつたから、急な話でも押し通されたわけだが。

「でしょ？パパもパパよ。いきなり、あんな奴を私たちの家に入れるなんて」

おつと、矛先が父のほうへと向いてしまつた。そちらに衝突されても困る。今は、上杉先輩との接触時間を延ばす方針に誘導せねば。

「パパに突つかつても変化は望めないかと」

「分かつてる。どうやつて追い出してやろうか、あいつ……」

勉強のほうもこれぐらいの意欲で取り組めば、家庭教師の話もでなかつただろうに。

「その方法は後で考えてもらうとして、次はテストの場面を振り返つていきましょうか」

「あー、あれ結構自信あつたんだけどなあ」

「みんなの中でも、一乃姉の一喜一憂つぶりが見ていて楽しかつたです」

後ろから眺めていた私だが、それぞれのテストに挑む様を見てるだ

けで以外にも楽しんでいたのだ。

「見せ物じゃないのよ」

「あまり無遠慮に見るつもりはなかつたんですが、二乃姉が物事に取り組む時の真剣な表情、好きなんでつい」

実際、当時は角度の都合上、表情など分かりやしなかつたが、普段の様子からどんなだつたかは想像がつく。

「ウソ！ どんな、 表情だつたの?!」

「ふふ、秘密です」

「ナマイキ！ 教えなさい！」

こちらに伸びてくる手を捕まるかどうかのところで躊躇続ける。

……爪長いなあ。

「くつ、 素早い。 なら、 これでつ——」

「——あつ」

二番が勢いをつけて飛び掛ろうとして足をほつれさせた。本人よりも早くそれに気づいた私は、すぐ様受け止める態勢を整える。

「わふっ」

「大丈夫ですか？」

「…………」

衝撃はしつかりと吸収したはずだが、反応がない。

「ひやうっ！」

「つーかまーえたー！」

不意に擦<sup>くすぐ</sup>つたさが私を襲い、思わず変な声が出てしまった。

「にやつ、 につ、 ねあつ、 なんでつ」

「ははあ、 これがいいのね」

普段は肌を刺激されても、こんな敏感に感じることはない。誰かと体を洗いつこをした時だつて大丈夫なのに何故。

「つえ、 つめ？」

「ピンポーン」

知らなかつた、肌を爪で撫でられるだけでここまで感じる体だつたとは。

「しゅつ、 すとつぶ」

「放すと思つてゐるの? 普段から、私のスキンシップをひよいひよい躰す悪い子には、こゝでお仕置きしてあげないと」

「みや、みやつて、しょ、だめつ!」

強く抵抗すればこの拘束は解けるだろうが、今は加減ができそうにない。怪我をさせる可能性もある以上、この状況から脱する手段を見出せないでいた。

「ほ、ほんとにつ、これいじょうは!」

「……はつ!」

必死の声を上げると、やつとのことで開放される。

「はあ……はあ……。あの、どうしました?」

「……エツロ」

「はい?」

「なんでもないわ。私、もう戻るわね」

「え、ちよつと! まだ二箇所しか回想してないんですけど」

「服、乱れてるから直しどきなさい」

「あ、はい……つて行つちやつた」

ゲストの中野二乃さんでした。えつと、拍手ー。

……ほとんどじやれ合つていただけ終わつてしまつた。どうしよう、次に行つていいものか。

「ぜえ……ぜえ……」

「あれ、戻つてきたんですね」

さつきの私以上に呼吸を乱れさせて登場したのは、上杉先輩だ。

「汗、すごいですよ? これ使つてください」

小さな手ふき布では、額ぐらいしか拭えないだろうが、ないよりはマシだろう。

「いや、必要ない」

「そうですか」

「つて、おい」

相手が遠慮したからといつて、こちらが合わせる理由はない。素早く距離を詰めて、玉の汗を拭く作業を開始する。

「拭きにくいので動かないでくださいね」

抵抗される前に釘を刺したが固定できず、首が横に向いてしまう。

「つて、動かないでって言いましたよね」

「近いんだって、自分で拭けるからいい。やっぱり借りるぞ」

強引にハンカチを奪われてしまつた。

「なんかお前、普段より……」

「普段よりなんですか？」

「いや、なんでもない。ハンカチは、後日洗つて返す」

私はそのまま返されても気にしなかつたが、他人に自身の汗が大量に付着したものを持渡すのには抵抗があるのだろう。ここは頷いておく。

「さつきまで二乃姉が居たんですが、先輩と交代する形になりましたね」

「そうだつたのか。確かに回想をしているんだつたよな」

「その通りです。姉達のテストが終わつたところまで回想しました。それ以降でどこか印象に残つている箇所はありますか？」

この話の語り部は彼だ。私と違つてすぐに思いつくといいが。

「それ以降と言われても、後はお前のテストぐらいしか話はなかつた気がする」

「何か感想は？」

「俺が言うべきことではないのだが、何でお前が教えないんだ？」

「妹に？勉強を？」

「あー、いや、もういい分かつた」

例え一歳差しかなかつたとしても、彼女らにも姉としての矜持があるだろう。

「その反応で思い出しましたが、先輩は妹さんがいますよね？名前は——」

「——ラストは見るな。そう遠くない未来で会えるから、その時を楽しみにしておけ」

「そこまで言うなら、いい妹さんなんでしょうね」

「あー、最高の妹だ」

「あー、その台詞、私の姉からも偶に聞きます」

「なら、気が合うかもな」

「へえ、それは楽しみです」

「これで三箇所は達成した。このままでは、本編の文字数平均より多くなりそうなので退場してください」

「理由がひどいな。まあいい、それじゃあな」

ゲストの上杉風太郎さんでした。はい、拍手ー。

ついにラスト。五話『どうして』の回想です。ゲストはこの人！

「……中野五月です」

「あれ、またですか？元気なく登場する人が多いですねえ」

結局、一番だけが登場から花が咲くような笑顔を見せてくれたのか、辛辣な態度をとつたのは今更ながら申し訳なく思つた。

「どうして……」

「え？」

「どうして私の出番がないんですかあ！」

「あー……」

至極真っ当な文句だった。

「一花も！一乃も！三玖も！四葉も！それどころか上杉君ですら出番があつたのに、私だけ……」

「確かに台詞はなかつた。しかし、実は描写されていないだけで登場はしていたんですね！」

「え……？」

描写されてないのは、登場していると言えるかは怪しいが、流れで押し切る。……一話でも似たような感じだつたなあ。

「それは食堂でのこと、三玖姉を呼びに行つたはずが、何の収穫もなかつた一人にも負けないぐらい、五月姉は目立つていました！」

「そ、それって」

「私の隣に座つていた五月姉は、正直身内だと思われたくないぐらい

に大量のご飯を食べていたのです！」

「そんなことだろうと思いました！しかも、フォローになつてません  
あ、あれ？」

「間違えました。素敵な笑顔で食事をする五月姉は、食堂にいる生徒  
みんなの視線を集めていましたよって話で」

「今更訂正しても遅いです。というより、食べる姿をみんなに見ら  
れてるなんて、恥ずかしいじゃないですか……」

「それだけ美味しそうに食べるつてことですよ。見習いたいぐらいに  
ね」

食堂という場でも、生徒が学べるものはたくさんある。様々な人間  
が見せる姿を見て、聞いて、感じることもその一つ。

「さて、時間も余り残されていません。テキパキと効率良く進めていきましょう。  
ほら、元気出してください。今度、新しく出来た凄いサンドイツチ屋  
を案内しますから」

「ハンバーガー？」

「ええ、お肉いっぱいらしいです」

「……行きましょう。どこですか？」

「いやいや、今じゃなくてね」

「ならいつですか！」

「」、この舞台が終わったらみんなでいきましょうか」

首がもげないかと、心配になる勢いで首を縦に振る五番。

「そ、そんなに行きたいんですね。なら、早く終わらせちゃいましょう  
？」

「ええ、任せてください」

三番と同じ『任せて』のはずだが、不安しかるのは私だけか。

「回想すればいいんですね。なら、まずは七海の寝起きシーンから」

「そこからですか、何か気になるところありました？」

「ええ、七海が怯えていたところです」

「その節は心配をかけました」

「ほんとうに心配したんですよ？」

「でも、私としては五月姉の事が心配です」

「はい？ 私ですか？」

「ええ、もう少しうまく物事を進めてくれれば、この気持ちを抱くこと  
もないのですが」

「ど、努力します」

それはすでに行っていること、でもうまくいかない。彼女がそう  
いった現状を変えるのに必要なものが何なのかを私も探してはいる  
のだが、答えは見つけられずにいる。

「次は、一花との夜食です……羨ましい」

垂れてる垂れてる。何がとは言わないうが。

「これどうぞ」

今日は、ハンカチをよく貸す日だ。

「ん、ん、見苦しいところをお見せしました」

「次、いきましょうか」

これ以上続けても、互いの空腹度が増すだけだ。

「今度は三玖ですね……こ、これは、伝説のお姫様抱っこ！」

「そこですか。重さとかは問題なかつたんですが、髪を傷めないよう  
に持つのに苦労してたり」

「私でも大丈夫でしょうか……」

「大した差もないでしようし、余裕かと」

「うう、そう言つてくれるのは七海だけです」

そう、私にとつては差がないように感じるだけだ。他者の意見は考  
慮していない。

「次のシーンは——

「——待つ<sup>ストップ</sup>待つ<sup>ストップ</sup>て！ もしかして、一つ一つ全部のシーンを振り返る  
つもりですか？」

「はい、そうですが？」

こういうところだ。あれだけハンバーガーを食べにいきたい意志  
を見せていて、早く終わらせようという私の言葉も聞こえていたはず  
なのに、眞面目な部分が邪魔して物事をうまく進められずにいる。

「私、実はお腹が空いているので、幾つか飛ばして欲しいです」

今は、私が軌道修正することにした。だが、いつか彼女が歩みたい

道を見つけた時、私は力になることはできないと考えている。

その時、五番に寄り添ってくれる人があるか、一人でも歩んでいけることを望んではいるが、先行きは不透明だ。

「そういうことなら……わかりました。では、次はラストのシーンですね」

極端だなあ。まあ、空腹だというのも嘘ではない。せつせと終わらせよう。

「ど、どうなるんでしょうか。大事にならなければいいのですが」  
気持ちを表すかのように唾を飲み込むを見て、苦笑しながら言葉を返す。

「大事つて、ただの詰合いなんですから、そんな心配しなくても」  
もしかすると、私が五番のことを心配する以上に、逆の形で心配されているのかもしれない。

「で、でも——」

「——大丈夫」

昔、毎日のように呟いて、それと同じぐらいに掛けてもらつた言葉。  
根拠などないが、安心を伝播させる功能があると信じている。

「うまくりますよ。五月姉と違つてね」

「……やっぱり、生意気になりました。七海」

「そうですか？」

「ええ、生意気で……ちゃんと生きてます。うん、大丈夫……」

「さつきから大げさなんですよ。さて、そろそろ空腹もつらくなつてきました。早くハンバーガー食べにいきましょう?」

促すと同時に五番の腹が獣のように鳴る。私のと全然違う音だなあ。

「そ、そうしましようか」

よし、回想終わり!ゲストの中野五月さんでした!はい、拍手ー。

……第一回番外編は、これにて終了。と行きたいところですが、皆さんには最後に問題<sup>クイズ</sup>を出題します!

問題。本日登場したゲスト六人の内、登場した回想のタイトルを  
発言<sup>回</sup><sub>収</sub>していないのは誰でしょう。

複数回答有り。答え合わせは次回の番外編になります。

「七海？早く行きましょう。みんなも待っていますよ？」

「はいはい、今行きます」

それでは、またの機会に。司会はこの私、中野七海でお送りしました。

## 本編

だつて

「お母さん！」

私の大好きな人達へと手を伸ばす。

「お姉ちゃん！」

後少しで届きそうな手は、横から伸びてきた腕に阻まれた。

「行つてはダメだ。言うことは聞けるよね？だつて——」

目を開く。目覚めの気分は最悪で、寝巻きが肌に引っ付くほどに汗をかいていることが要因の一つだつた。

ベッドから降りて、カーテンを開けると朝日が私を照らした。気分も明るくなるかと思ったが、ただただ鬱陶しく感じるだけに終わつてしまふ。

「まあ、いいか」

気分を上向きにさせることは諦めて、考えを改める。これだけ嫌な気分なのだから、そうそうにはこれより下振れになることはないだろうと前と後、どっちを向いているのかすらわからない思考を帰結させて自室を出る。

「お父さんは、もう出ましたか」

早めの起床ではあつたけれども、目覚めの挨拶もお出かけの挨拶も送るには遅かつたらしい。

階段を降りて、誰もいないリビングもスルーして目的地へ一直線。戸の前に到達したところで水の流れる音を拾う。どうやら、先客がいたようだ。

扉の向こうで流れている水量には当然劣るが、多量の発汗をした私も一刻も早く中に入りたかった、が……。

「……はあ」

取っ手まで伸ばそうとした腕は、まるで静電気に弾かれるのを恐れ

ているかのように触れることなく、最後には重りでも付いているかのごとく、だらけた。

そもそも、壁を一枚抜けたところであるのは脱衣所であり、もう一枚の壁を突破しなければ先客とも鉢合わせることはないのだが、入ったことに気づかれて中に引きずり込まれでもしたら面倒だ。

結局、一刻も早くこの汗を流したい気持ちはあつたが、それ以上に面倒を嫌つて先客に催促することもなく、順番待ちの為に並ぶようない形で、扉の前から一步横にずれて突つ立つていてる私がいた。

「…………」

微かに聞こえる水の流れる音と普段は気にしないような、水槽に設置されたエアーポンプが発する音だけがやけに大きく聞こえる。

自身の呼吸音さえ抑えるように努めていることを自覚し、そんなことをしたところで大した意味などないと頭を振つては、また溜息が零れる。

このまま無為な時間を過ごすのもどうかと思つてきたので、先客の正体が誰なのか推理してみることにした。

容疑者は五名。ご丁寧に容疑者の名前には一から五の漢数字が振り分けられているのでまとめやすく助かる。

まずは容疑者一番から考察していこう。一番は、私生活ではズボラで起床順もドベなことが多い上、昨日も帰つてくるのが遅かつたので可能性は最も低いだろう。

次は容疑者二番。二番は、料理が得意でその日の気分にもよるが、朝食やお弁当を作る為に早起きすることもある。それに、今日は容疑者達にとつて少々特別な日でもあるから、身嗜みを気にして朝早くからシャワーを浴びている可能性も十分にある。特に身嗜みに気を使うことの多い二番は、やはり有力候補か。

さて、次は――。

「どうしたの？」

「わっぴやひゅい！」

「わおっ！」

いつの間に近づいてきたのか、俯きがちに思考の海に潜つていた私

に声を掛けてきたのは、容疑者三番……ではなく四番だつた。

「ごめんなさい。驚かせてしまいました」

「わ、私こそごめんね。何だか気分が悪そうに見えたから、心配で声掛けたんだけど」

的を射た発言ではあつたけれども、驚いたのは声を掛けられたからではなくて顔を上げたら眼前に他人の顔があつたせいだ。つまるところ――。

「近いです。四葉姉

よつばねえ  
ななみ

「うん！おはよう七海」

「……おはようございます」

言外に離れると込めてみたが、まるで届いちやいない。

「大丈夫？やつぱり体調が悪いんじや――」

「いえ、大丈夫です。少し汗をかいたせいで不快な気分だつただけです」

アプローチの角度を変えて、この距離間からの離脱を試みる。

「そうなんだ。それじやあ、一緒にシャワー浴びよう！」

「……え」

そう言つて、四番は私の腕を掴んで扉の向こうへ。

おかしい、ただ距離を取りたかつただけなのに、気づけば布一枚すら離れてることができない状況にまで追い込まれていた。

衣服すらなくなつたとあれば、残るは皮膚のみ。ニックネーム愛称でもつけて頑張つてもらうことにしてようか。命名、ひふみん。私の最後の砦として頑張つてくれたまえ。

「あの」

「ん？どうかした？」

「……いえ、なんでもないです」

私にとつては、朝日よりも眩しい笑顔で振り返られては、抵抗する気力も削がれた。

だが、不意に拘束は解かれ、距離が空いた。何故？

「脱がないの？」

至極真っ当な理由でした。さすがに脱衣する時まで引っ付きなが

らとはいかない。

言葉では返さず、行動で答えることにする。

隣で上機嫌にアニメの主題歌を口ずさんでいる姉を横目に、私も寝巻きのボタンを外してゆく。

四番は、普段から他人との距離が近いのだが、今日はいつにも増してその特性が濃くなっている気がする。私のような親しい間柄の相手ならともかく、この調子では初対面の相手にすらこの対応をしてしまいそうで心配だ。

一枚目の衣服を剥いだところで、不意にハーモニーが止まつた。  
「ふふ、今日から一緒の学校だね」

そう、それこそが四番が上機嫌かつ、その持ち前の特性が強化されている源。さつきのくだらない推理パートでも出てきた『少々特別な日』というのは、私の通っている学校に彼女達が編入していく日のことである。

「そうですね。四葉先輩……とでも呼べばいいですか？」  
「先輩……それいい！」

適当に口から出た呼称だったが、どうやらお気に召した様子。これなら、皮膚のひふみんも受け入れられるだろうか。などと、くだらない思考をしている間に目的の風呂場に行くにあたつて、不要な物はすべて取り除けた。

お隣も同じ格好になつていたのを確認して、戸に向かおうとした時、その奥から水の滴る音が響いてきた。

「あ」

四番の襲撃ハイドアタックによつて、記憶領域から弾き飛ばされた情報を思い出した。中には先客がいることを。いつの間にかシャワーは止まつていたようで、拾つた音から察するにお湯に浸かっていたところを今上がつたといったところか。

そして、案の定ドアが開いてご邂逅。せんきやくだーれだ。

「おはよ」

「おはようござります。三玖姉みくねえ」

「おはよう三玖！」

正解は三番でした。正解者には、私に対して文句ありげに頬を膨らましている姉への対処をお願いしたい。

「え、えつと？」

「…………」

普段は表情の変化に貧しい三番が、こんなにも露骨な反応を見せるのは珍しい。だが、そんなレアケースの対処法を私に求められても困る。

風呂場こそ広めの我が家だが、さすがにその入り口までは何人も通れるほど大きくはない。まったく動く気配のない、この難敵をなんとかして退かさなければならなかつた。

とはいえる、私には到底無理そうだと判断。アイコンタクトを送信だ。へるぶみい四番。

「ほら、三玖が待つてるよ」

待つていてる？ 一体何を？ 皮膚のひふみんの紹介を？ まさか、私が諦めるのを待つていてるとでもいうのか。

「四葉だけ、ずるい」

何が狡いというのか。氣だるげな脳の稼働率を上げて答えを探つてはみたが、収穫はない。

これ以上は不快な感覚だけに留まらず、汗が冷えて体調を崩す虞もあつた為、何でもいいから退いてくれという気持ちを込めて言葉を発した。

「今じゃなくて学校で、というのはどうでしょう？」

「もう……。わかつた、約束」

そう言つて三番は、小指を私に向けてきた。反射的に私も長さに大差ない指を絡ませて、腕を軽く上下に降つた。

朝つぱらから何をやつてているのだろうか、私は。こんな場所、格好である事が普通ではないことだけは確かだ。

自らの現状を客観的に見て溜め息が出そうになつたが、日本ではお決まりの恐ろしい契約は結ばれなかつた為、心中安堵した。これで内容もわからぬこの約束を違えようとも、見るも無惨な姿になる心配はしなくて済む。

まあ何にせよ、この場を凌ぐ為だけの適当な発言ではあつたものの、無事に障害を取り除くことには成功した。

大半の人が無表情に捉えるであろう三番の微笑みを横目に、やつとのことで目的地への入場を果たしたのだつた。

案の定、過度なスキンシップを迫られて、気分をリフレッシュする為の朝のひと時は、心労を蓄積させるに終わつた。あんなくだらない推理ゲームなんてしていなければ、四番の接近にも気づけてこのイベントも回避できたかも知れないのに。

脱衣所に戻つてきた直後には、乱暴に体を拭いてバスタオル一枚を身に纏い、脱兎のごとく自室へ避難。道中、四番からの静止の声と寝ぼけ眼の二番が挨拶をしてきたが、どちらも無視した。前者は、体を拭き終わつてないので無理に追いかけてはこないだろうし、後者はどうせコンタクトレンズをつけていなくて、挨拶した相手が誰かも識別できていなかろうから、問題ない。何にしても朝っぱらから、これ以上面倒事に巻き込まれるのはごめんだつたのだ。

登校する為に身だしなみを整え、鞄を手に持つて自室の扉を極力音を立てないように開けて、顔だけ出す。周囲に誰もいないことを確認して、差し足で玄関までの道のりを進んでいった。無事、誰とも遭遇することなく玄関まで到達。靴を履いたところで朝日が私を照らした。その理由は――。

「おはよ。七海」

「おはようござります。一花姉」

——一番が帰宅したからだつた。てっきり、寝てるものだとばかり思つていたが、珍しいこともあるものだ。四番と同様に新しい学校への期待などによる影響か。

「ジョギングですか？」

「うん、早くに目が覚めちゃつて。時間を持て余しててね」

まだ、登校するには早い時間帯。分泌された汗の具合から察するに結構な距離を走つてきたのだろう。相当早くに起床したらしい。

「そうなんですね。では私はこれで、いつてきます」

早口で言い切った私は、一番の横を通り過ぎて家を出る。

「えーー！もう行っちゃうの?!一緒に登校できるつて楽しみにしてたのに」

三番と違つて通してはくれたが、文句を言われてしまつた。

「ごめんなさい。今日は先生方が忙しいらしく花壇への水遣りを頼ま  
れているんです」

「あ、それつてもしかして私達のせいだつたり」

勿論嘘だつたが、この理由なら相手が勝手に想像を膨らませては、  
勝手に遠慮する。

とはいえ、楽しみにしていたというのならば、こちらも嘘だけつい  
て煙に巻くのも気が引けた。私が登校時に一緒にいない分の楽しみ  
を埋めることができると想える言葉でも贈ろうか。エレベーターが来るまで  
の時間で少しだけ考えて、ふと思いついたのは四番が大層気に入つ  
てた呼称だった。

「また、学校で。一花先輩」

「え」

驚愕の表情で固まる一番を置いて丁度開いたエレベーターへ乗り  
込む。一度も地上まで止まりそうにない閉鎖空間の中で大なり小な  
り、今日を楽しみにしていたであろう彼女達の学校生活が明るいもの  
であることを願つた。

「焼肉定食、焼肉抜きで」

「はいよ」

間髪入れずに差し出されたトレーを受け取つて、空席を探す。早  
速、二席ワンセットの場所を見つけたがスルーした。あの席は、いつ  
も使つている人がいるので、他に座る席がないならともかく授業が終  
わつすぐ、まだ席の数には余裕があるであろうこの時間においては  
遠慮した形だ。

予想通りすぐに他の空席は見つかつた。朝食は抜いてきたので空

腹感は強く感じてい為、早々に手と手を合わせて食事開始の挨拶を行  
い、口に物を入れる作業を始める。

普段は弁当を自分で作るか一番に渡されるかして学食は利用しないが、今朝のように億劫な気分の時や時間に余裕がなかつた日は学食を利用している。メニューはいつもこの『焼肉定食、焼肉抜き』での学校に入学して以来、他のメニューは頼んだことはない。

このメニューは、ここでの最安値のメニューになつており、ライス単品と同じ二百円にプラスして味噌汁とお新香が付く。私が始めてここの中食を利用した際、前に並んでいた先輩が頼んでいたメニューだつた。密かに貯金をしている身としては、ありがたい裏メニュー？だ。きっと、苦学生から苦学生へと伝統的に受け継がれてきたメニューなのだろう。いや、知らないけど。

大した量があるわけでもないので、周りの生徒と比べて早く食事が終わる。食べる前と同様に挨拶を済ませて立ち上がるこうとした時、聞き覚えのある声が食堂に響いた。この声は五番だ。食堂の生徒、その大半が彼女の方へと視線が向いていた。

どう見ても、悪目立ちしている。今は絶対に関わりたくないなかつた。少し立ち上がるタイミングをずらして、他の生徒に紛れるような形で食堂を後にした。

お手洗いを済ませて、後は教室に戻るだけ——だつたのだが。

「おはよう。七海」

階段にて二番が立ちはだかる。

「今は、こんにちは、ですよ。二乃姉にのねえ」

「いいえ、先におはようを済ませるべきだわ。今朝、私の挨拶を無視したわよね。その挨拶を終わらせてからよ」

Oh! バレテーラ。何故。

「四葉があんたのこと呼んでたのが聞こえていたわよ」

口にも表情にも出してもらひないのにご丁寧お答えいただき、どーも。

「おはよううござります。二乃姉」

「ええ、おはよう」

にこり顔の二番の横を通りすぎようとしたが、手で制された。

「ここにちは。二乃姉」

「ええ、ここにちは」

再度、表情を確認する。よし、さつきより深い笑みになつた。今度こそ――。

「まだよ」

――はい?

「挨拶は終わつたわ。でも、一花と四葉に言つて、私には言つてないことがあるんじやない?」

「あ」

ここに来てようやく私は今朝、三番が待ち望んでいた答えを理解した。

「今日からよろしくお願ひします。二乃先輩」

「ん、よろしく七海」

再三の笑顔になるが、それは確かにさつきまでとは比べ物にならない素敵な笑顔だった。なるほど、これが『合格』の笑顔か。覚えた。「もー、困っちゃうわよ。朝から一花と四葉つたら七海に先輩つて呼ばれただつてうるさくてうるさくて、それに三玖も――」

こちらに背を向け階段を上がつて行つた二番だが、そつちは二学年の教室がある階だ。付いて行く事はせず、自分の一学年の教室へと向かう。なにやら喋つてたような気もするが、ただの独り言だろう。そういうことにしておく。

本日のカリキュラムを終えた私は、早々に帰宅した。

少し急ぎ足だつた為、私以外に家に人はおらず、今朝と同じ静寂な空間だつたが、エアーポンプの発する音は気にならなかつた。

手洗いとうがいを済ませて、動きやすい私服へと着替える。身だしなみを整え直し、コップ一杯の水を飲み干しては再び家を出た。

向かう先は、勤めているケーキ屋『REVIVAL』だ。

「おはようございます。店長」

「おはよう、中野さん。今日もよろしく」

「よろしくお願ひします」

「中野さんに出でもらうようになつてから、ウチも随分楽になつたよ。結構な日数出でてくれるが、学業のほうは大丈夫かい？」

バイト先に着いたのはいいが、まだ時間には余裕があつた。店長も休憩中なようで、一人時間を持て余してたところに、はなしあいて私がこのことやつてきた、といったところだろうか。

「ええ、問題ありません。すべてのテストは三桁でした」

「解答こそ完璧だが、その返答に百点はあげられないね。君ぐらいの年頃は、もつと素直な笑みで『満点です』と言えばいいんだよ」

「ふふ、店長の返し方こそ満点には程遠いように感じるのですが」

最も私が点数などつけなくとも、ハンググリー精神旺盛なこの人であれば、自己採点で満点をつけることもないだろう。

「そう、その笑みで今日も頼むよ」

……どうやらこの会話も、私という素材の長所を最大限に生かす為のものだつたらしい。なら、返し方は一つだ。

「任せてください！」

きつと、今度は満点を貰えただろう。

「ただいま」

『おかげり』

返ってきた声は三人分。一、二、三番か。

「バイトお疲れ様。ご飯作つてあるけどすぐ食べれる？」

「……いえ、先にお風呂を済ませてからにします」

一番に昼間、勝手にいなくなつたことを咎められるかと警戒もしたが、その素振りは見えなかつた。それを忘れるだけの出来事があつたということか。私の自意識過剰なだけの可能性もあるが。

一度、自室に戻ろうとしたところを一番に引き止められる。

「聞いてよ、七海。今日来た家庭教師の人、同学年の男の子だつたんだよ」

「それは驚きですね、お名前は？」

「上杉風太郎君」

その名前は知つてゐる。私と同じ、学年主席の人だ。そして、私にとつては――。

「それで、肝心の教師としてはどうだつたのでしょうか？」

「それが、碌に教えることもせずに寝ちゃつたんで送り返してやつたわ」

一番を遮るように二番が答えてくれた。

「ね、寝た？」

「うん」

一番と三番にも視線で確認を取るが、どうやら事実のよう。二人共に頷いたが、一番の表情がなにやら……。

「あはは……」

何かを隠すような苦笑い。この反応にはどんな意味がある？

そもそも、教え子と同学年の家庭教師とはいえ、教えることもせずに寝るなんてありえるのか？彼が学食で私と同じメニューを頼むことは知つていてる。苦学生であつても、貯金をしている人であつても、お金を欲していることには間違いないだろう。そんな人間が引き受けた家庭教師という職務を半ば放棄するような行為をするか？まずないだろう。なら、何故途中で寝たのか。本人が寝ようと思つて寝たわけではないとすれば。

「あれ？お風呂入るんじやなかつたのー？」

「き、着替えを先に用意しようと思つて」

三人に背を向けながら答えた私の表情は、どうなつていただろうか。

自室のドアノブに手をかけ、押す。……開いた。当然だ、内側から鍵をかけるが、外からは不可能な設計なのだから。

LED照明のスイッチをオンにして室内を照らす。一直線に向かつたのは、ベットから手が届く壁に取り付けた小さめの戸棚。

中を確認する為に戸を開く。摩擦によつて発生した音がいやに大きく聞こえた。

「……ある」

ちゃんと、そこにあるはずの物があつた。念のため袋の中身も確認する。

「え」

再三確認する。だが、何度見ても数え間違いなんてことはなかつた。

減つてゐるのだ。薬が。私の使つてゐる睡眠薬が。

自室にある鏡など見なくとも、私の顔から血の気が引くのがわかつた。

すぐ近くにあつたポーチを驚掴んで、自室を飛び出す。

「ひやあ！な、なに？」

大きな音を経てた為に、二番を驚かせてしまつたが気遣う余裕はなかつた。

「あ、七海。今日、学校で会えなかつたから明日はお昼に学食で……あれ？いない」

当然、三番に対しても構つてる暇はない。

「ちよつと、お風呂入るんじやなかつたの？」

玄関まで追いかけてきた二番に声を掛けられる。

「ごめんなさい。先に入つてもらつて結構です。ちよつと外に出てきます！」

靴を履くわずかな時間で、顔も見ることなく返答する。

「え。……行つちやつた」

エレベーターの停まつてゐる階層を確認して、すぐにボタンを押すのを止め、代わりに階段への扉を開けた。

平均より一段が低めに設計されているそれを六段飛ばして降りてゆく。

手すりをうまく利用して、踊り場のコーナーリングも素早く行う。三十階建てのタワーマンションの階段を使う人などごく少数な上に、他の利用者が居ても音が響くのですぐにわかる。対向者にぶつかる心

配はない。

何にせよ一刻も早く、上杉先輩のところへと向かわなければならなかつた、のだが……。

「上杉先輩の家、知らないじやん私」

自分が間抜けであると気づいたのは、地上まで下り終えた時でした。

一度立ち止まると、急速に冷静さを取り戻して、思考の大部分を占めていた焦燥感は消えていました。

「七海。どうしたんですか？こんな時間に」

「五月姉」

マンションのロビーに現れたのは、五番。

「この時間に帰つてくるのは珍しいですね」

「今日来た家庭教師の人を家まで送つていたんですね」

確かに誰が送り返したかは言つていなかつたが、さも自分が撃退したかのように話す二番のせいで勘違いしていた。

「へえ、家まで」

「ええ、カレーを『ちそうになりました』

食事に関しては、ちゃつかりしすぎだこの人。

「そうですか。では、教えてください」

「え？ 何をですか？」

「上杉先輩の住所」

「はい？」

頭頂部から生えたアホ毛が動いた。

「教えてください」

「え、ちょっと待つてください。どうしていきなり、そんな『教えてください』

「え、ええ？」

外はすっかり暗くなっている。急がねば。

「お願ひします。教えてください。今、ここで！」

「あの、理由を」

「お願ひします！」

気迫でゴリ押す。実際、人命に関わるかもしれない問題でもあるのだ。必死さは籠められているだろう。

「わ、わかりました。教えますから」  
ちょろい。

「ありがとう五月先輩！」

「先輩!？」

「あ、でも——」

「——うん、大丈夫。住所の覚えている部分と、近くにあつた建物とか教えてくれればいいから」

早口で先回りすることで、必要な情報以外を喋らせずに迅速に目的地へのピースを入手した。

「それじゃ、いつてきます」

「はい、いつてらっしゃい。って、え？こんな時間に……もう見えない。それにしても、碎けた口調の後輩七海ですか。いいですね……」

夜の闇に紛れた私に、彼女の咳きは聞こえていなかつた。

「夜分遅くにごめんください。中野という者ですが」

チャイムを鳴らして、声量を抑えつつ呼びかける。

「五月か？何か忘れ物でも——」

開かれたドアから出てきたのは目的の人物。

「——初めまして、中野七海です。一から五の姉がお世話になつております」

「は？」

思考停止したかのように一瞬固まる上杉先輩。

「な、七海だと……？五つ子じやなかつたのか？」

「五つ子で合っていますよ。私は、一つ年下の妹です。そして、貴方と同じ学校に通う後輩にあたります」

「後輩ね……。姉達と一緒に転入してきたということか？」

澄んだ瞳で射抜かれる。

「いえ、四月から入学します」

「まさか、お前も教え子なのか」

「それも違います」

「それじゃあ、なんだ？五月の代わりに忘れ物でも取りにきたのか？」

回答文ばかりで会話するのも味がないので、話を進める意味も込めて言葉を返す。

「今日は、謝罪にきました」

「謝罪？」

訳がわからないといった様子の上杉先輩をよそに、私は両膝を地面に着けた。

「は？一体何を——」

「——この度は！」

手を地面に着き、頭を垂れて。

「誠に申し訳ございません！」

土下座である。

「なつ……」

地面と接吻できそうな距離で見詰め合っている為、彼がどんな表情をしているかはわからないが、きっと畠然としているだろう。

すぐに頭を上げることはせず、相手の反応リアクションを待つ。しかし、止まつた私達の時が動く気配は一向になかった。

そろそろ頭を上げようかと思つた時、静寂を破つたのは別の人物だつた。

「風太郎。女の子を家の前で土下座させるつて……」

「お、親父！これは、こいつが勝手に——」

「——お父さん？お兄ちゃん？誰か来たの？」

「ら、らいは？おい、話は別の場所でするぞ！」

なにやら私の頭上では、慌しいことになつてゐなあと他人事のように考えていたら、強引に腕を掴まれた。特に抵抗する理由もないので、されるがままに引っ張られる。

人気のない夜道に男女が一組。逢引とも取れるシチュエーションだが、生憎そんな雰囲気は微塵もない。

「ここら辺でいいだろ」

連れて来られた先は、公園だった。

腕の拘束は解かれ、上杉先輩がベンチに座った。こちらに視線を向け、お前も座れと促してくる。……ふむ。

「つてなんで砂場に正座するんだよ！ そんなに俺の隣が嫌だつたのか？」

「いえ、目上の人相対するわけですし、より低い位置にと……」「いいから、そういうの。お願ひだからまともなところに座つてくれ」溜息を吐いてまで懇願されても、従わないわけにもいかない。ブランコにでも座るか。

「そんなに俺の隣が嫌なんだな、よくわかつた」

そうではない。けれど、口にすることはしなかつた。より正確に表すなら、そういうことに気を回すだけの精神的な余裕がなかつた。ベンチとブランコの距離は、話をするには遠すぎるので上杉先輩は、私の乗っている二つ隣のブランコに座つて漕ぎ始めた。

「やつと話が進められる。それで？ どうしていきなり土下座なんかし

たんだ？」

少し大きめに声を張り。世間話でもするかのように緩く語りかけてくれる。正直、そういうたたき遣いはありがたかつた。

漕いでいるブランコを目で追いながら話すのも億劫で、前を向いて話す気分でもなかつたから下を向いて語る。

「今日の家庭教師業務の最中に寝てしまつたそうですね」

「あ、ああ。だが、それはお前の姉が——」

「——そうです。私の姉が先輩に睡眠薬を盛りました」

「なんだ、知つているのか。姉の代わりにわざわざ謝罪に来たのか？ 隨分と——」

「——あの薬は！」

思わず語調が強くなる。それに一番驚いていたのは、私自身だった。

「……あの薬は、重度の入眠障害である私に処方された特別強力な効果のある物なんです。健常者が服用したらどんな異常ができるかわからぬ！ しかも、なくなつていたのは二回分でした。もし、先輩の身

に何かあつて姉が犯罪者にでもなつたら……っ！元はといえば、私の管理不十分が原因です。お願ひします。私が何でも言うことを聞きますからどうか——」

唐突にチエーンがぶつかりあつた、大きな音が鳴る。

「——落ち着け。体に異常もなければ、誰かに言いふらすつもりもないから安心しろ」

気がつけば上杉先輩が目の前にいて、私の頭に手を置かれていた。撫でられているわけではないが、その動作には慣れが感じられた。

そういえば、先程の土下座の最中に『お兄ちゃん』なんて声も聞こえたので年下の扱いに慣れているのだろうか。なら、このまま年下の弱いところをアピールすればこの後の交渉もうまくいくかな。なんて、我ながら下衆なことを考え始めたあたり、冷静さを取り戻していいだろう。

しかし、思考が冷えると今度は体が熱くなつてきた。異性に手が頭に乗つているという慣れない現状に対する羞恥でだ。

「の、飲み物買つてきます」

「ああ」

手を振り払うように立ち上がり。駆け足で近くの自動販売機に向かう。

ポケットから携帯電話を取り出し、買うのはミネラルウォーターと麦茶。好みを知らない相手に対するチョイスとしては、こういうつた味の薄い物が無難だろうと思つての判断だ。

公園に戻ると上杉先輩はベンチに移つていた。一人分の距離を空けて、私も腰掛ける。

「お好きなほう、どうぞ」

選ばれたのは麦茶でした。その選択に迷いがなかつたあたり、麦茶が好きなのだろうか。

「これ、少し苦いな」

「市販の麦茶は、それぐらいが普通ですよ。安価なパックの麦茶とかだと苦味が薄いことが多いので、それと比べてませんか？」

単純に飲み慣れてない味ということもありますけどね。そう付け

加えると納得したような仕草を見せた後、顎に手を置き私を見つめてきた。

「こつちの水、飲みますか？」

また羞恥心が込み上げてこないように、視線から逃げるような形で話題を広げる。

「さつき、何でもするつて言つたよな？」

会話の流れを無視した言葉に、無意識に肩が跳ねた。

「そんなに怯えるな。五月にも言つてあるんだが、明日の放課後にお前の姉達を集めておいてくれないか？五月だけに任せてちや、全員集まるか不安でな」

「明日は特に予定もないのに大丈夫ですけど。何かするんですか？」

「ああ。せつかくだから、お前も参加しろ。サービスだ」

そう言つて、得意氣な表情をするのを見て『あ、これダメなパターンだ』と悟りました。

「ただいま」

そう呟いて自宅の玄関にて靴を脱ぐ。姉達はこの時間では寝ているか、自宅に籠っていることがほとんどだ。

だからこそ、返事があつたことに小さく驚く。

「おかえり、七海君」

「パパ。今日は早いお帰りですね」

私が帰るには遅い時間だが、多忙な父親が帰つてくるには早い。

「七海君の方は、遅い帰宅だね」

「ええ、少し野暮用で。普段はもつと早いので心配はなさらずに」

そう言うとそれ以上の追求はなく、こちらとしてはありがたい限りだ。状況によつては、平然と嘘を付く人間な自覚はあるが、嘘を吐かなくていいならそれに越したことはない。最も、誤魔化しや隠蔽の類も嘘を吐くことと大差はないかも知れないが。

「晩御飯はもう摂りました？」

「いいや、まだだよ」

「二乃姉が作ってくれているので、今暖めますね」  
慣れた手つきで作業をこなしていく。

「お待たせしました」

「ああ」

『いただきます』

口数が多い相手ではないので食事に集中する。

お互に食事のマナーも心得ている為、食器同士の接触音すら耳に付くことが少ない。

そんな静寂の食卓は、どちらかが食事を終えるまで続くかと思われたが、意外なことに父親のほうから話しかけてきた。

「今日は、君の姉達の家庭教師が来る日だつたが、何か聞き及んでいるかい？」

「はい。家庭教師の業務中に直接あつた訳ではありませんが、名前は聞きました。学校でも数回ですが話したことのある先輩です」

嘘と真実を織り交ぜて会話を組み立てていく。

「君から見て、信用に値する人物かい？」

「さすがにそこまでの判断はできませんが、家庭教師としてのやる気は十分だと思います」

ですが、と付け加えて続ける。

「教わる側とのモチベーションのギャップに苦労はしそうですが」

そこは、お手並み拝見ということで。そう言って締めた私に感心するような声音が返ってくる。

「ありがとうございます。参考にするよ」

娘を任せるばかりか我が家の大居を跨ぐ相手のことも、碌に知らなかつたのか。と、思いはしたが口には出さない。人それぞれの事情があるし、思うだけなら不和が生じることもないだろう。

この会話が切っ掛けとなり、近況報告を主とした話題が広がっていく。私のことだけではなく、姉達のことも含めてだ。

一通りの雑談を終えた辺りで席を立つ。食器を洗い始めた私に対して、要領の得ない評価が送られる。

「七海君は、人のことをよく見ているね」

「はい？」

「こうして会話をするとよくわかるよ」

「興味のある人にだけですよ。普通のこととかと」

視線は手元に向けたまま、思つた通りの言葉を返す。

「当然、パパのことを見ていますよ」

「そうかい？」

「ですが、興味があるだけです」

仮面を被つて人と接することの多い私にしては、不思議とこの時は本音が溢れ出た。まるで閉まりきつていない、蛇口から漏れる水のように。

「パパは、少し面倒な性格をしています」

「…………」

「一花姉は、大事なことを隠すことが多くて」

「…………」

「二乃姉は、勝手に人の物を使っちゃうし」

「…………」

「三玖姉は、やたら私との間が悪いことばかり」

「…………」

「四葉姉は、距離が近すぎで」

「…………」

「五月姉は、空回りしすぎて見てているだけでも辛いです」

「…………」

「正直言つて、みんなのことは苦手なんですよ」

「……その評価の割りには、よくみんなに尽くしているように見えるがね、僕は」

蛇口から垂れた水滴が、食器に溜まつた水面に落ちて、そこに映る私の顔が歪む。

輪郭のぼやけた私の分身が一瞬、前の父親に視えた。

「それは……だつて——」

『行つてはダメだ。言うことは聞けるよね？だつて——』

「——私達は」

『  
家族だから  
』  
僕達は

今度こそ

「しつかり握っているのよ。四葉」

「うん！」

幼き日の光景。お母さんからの言葉に頷く私。  
繫いだ先には、愛おしい妹の手。私より、一回り小さいその手を優しく握る。

「おねえちゃん！ フウセンがあるよ！」

そう言つて妹が空いた腕を伸ばして指差した先には、確かに風船が木の枝に引っかかっていた。

「わたしがとつてきてあげる……でまつてて」

いいところを見せたくて、そんな理由で言い付けを破つてしまう。  
それが、妹達との別れになるとも知らずに。

「眩しい」

カーテンを開け放しにして寝たから、朝日が差し込んでくると同時に目覚めた。

少し汗を搔いていることに気がついて、シャワーでも浴びようかと自室を出た。

道中、階段を降りる足取りがいつもと違う気がした。きつと浮き足立っているのだろう。そういうふた気分をリフレッシュする意味でもシャワーを浴びるのは、今の私にいいことかもしれない。

目的地へと歩みを進めていると、下を向きながら突っ立っている妹をミッケ！

「どうしたの？」

「わっひやひゅい!?」

「わおっ！」

奇天烈なリアクションに思わず今まで驚いてしまった。

「ごめんなさい。驚かせてしまいました」

「わ、私こそごめんね。何だか気分が悪そうに見えたから、心配で声掛

けたんだけど

先に謝られて、驚かせてしまつたこと以上に申し訳ない気持ちになつた。

「近いです。四葉姉」

「うん！おはよう七海」

「……おはようございます」

元気付かせるように挨拶をしたけど、返つて来たのは弱めの挨拶。

「大丈夫？やっぱり体調が悪いんじや——」

「いえ、大丈夫です。少し汗を搔いたせいで不快な気分だつただけです」

その言葉を聞いた瞬間、私の脳内電球が光つた。

「そうなんだ。それじゃあ、一緒にシャワー浴びよう！」

「……え」

何かを言おうとしてたのには気がついたけど、多少強引でもとにかくシャワーを浴びるのが先決だと思つて、腕を引っ張る。

「あの」

「ん？どうかした？」

「……いえ、なんでもないです」

やたらと眩しそうな顔をして、そんなことを言う七海。さつきの私のように、朝日が目にしみたのかな。

脱衣所の戸を開けて、中に入つたところで腕を放す。

「脱がないの？」

今度は、不思議そうな顔をしながら突つ立つていたから疑問を口にする。

返事はこなかつたけど、すぐに脱ぎ始めたのを確認してから、私も寝巻きのボタンを外していく。

まだシャワーは浴びていなけれど、隣に七海がいるだけで気分が上向く。自然と私は、好きな曲を口ずさんでいた。

サビに入ろうか、というところで歌を中断して話しかける。

「ふふ、今日から一緒の学校だね」

七海は、私達と同じ学校に進学するとなかり思つていたので、違う

学校に行くと聞いた時はショックだつた。

理由を聞くと将来のことを考えた、しつかりとした答えが返つてきたので文句を言うこともできずに諦めたのだけれども、まさか私達が編入することになろうとは。

何にせよ、今日から妹と一緒に学校に行けることこそが、私が浮き足立つてゐる一番の理由。

そんな落ち着きのない私に、更に燃料を投下する言葉が投げられた。

「そうですね。四葉先輩……とでも呼べばいいですか？」

「先輩……それいい！」

脳内電球はさつきよりも眩く光つて、ついには点滅し始めた。

「あ」

何かを思い出した様子の七海の視線の先で、お風呂から上がる音がした。

中に入がいたのに全く気づかなかつた。一体誰だろう？

「おはよ

「おはよう三玖姉」

「おはよう三玖！」

中から出てきたのは、私と同じ五つ子の三玖——なのだけど、頬を膨らましたままお風呂の出入り口から動こうとしない。

「え、えつと？」

「…………」

七海が私のほうを見るけど、三玖が求める言葉を私が言つても意味がない。

「ほら、三玖が待つてるよ

促しては見たけど七海の口から中々言葉は出でこない。恥ずかしがつてゐるのかな。

「四葉だけ、ずるい」

すでに服は脱ぎ終えていて、このまま通せんぼされ続けると体が冷えてしまいそう。

「今じやなくて学校で、といふのはどうでしよう？」

「もう……。わかつた、約束」

そんな私も気持ちが通じたのか、話が進んでそのままの流れでユビキリゲンマンが行われる。

出入り口から退いた三玖の表情は七海の頭で見えなかつたけど、きっと私と似たものだつたと思う。

「そういえば」「うん？」

意外なことに、お風呂場で先に話しかけてきたのは七海のほうだつた。シャワーも浴びて少しさはスッキリできたからかな。

「家庭教師の件、今日からでしたよね。すみませんでした」「え？」

「本当は明日からだつたらしいのですが、パパと話している時に私が余計な一言を放つてしまつたせいで今日からになつたんです。転入日の放課後にというのは、急すぎるのでしよう? みんなの人間関係を構築する時間を奪つてしまふ形になりました」

「一体何のことかと思えば、そんなことか。

「気にしなくていいよ。放課後予定が入つてるなら、そのぶん放課後までに仲良くなるようにすればいいから!」

「……四葉姉らしい答えです」

ホントウニ。そう七海の口が動いた気がした。

私らしい。本当にそうなのだろうか、私は――。

「本当ですよ」

――エツ。

「エスパー?!」

「さあ? どうでしようね」

「むむつ! 種を明かさないとはナマイキな。バツとして私が体を洗つてあげる!」

さあ、観念せーい! と言つて伸ばす私の腕を七海は避けることなくあつさりと捕まる。

「四葉姉、本当に力強いですね」

「ふふーん。逃られまい」

得意げな私に対して、淡々とした様子の七海。

そんな妹の足が少しだけ動いた気がした。それに気を取られて目を離した瞬間、掴んでいた筈の腕が離れていた。

「え……？」

「離してくれるんですね。それじゃあ、体も洗わなくていいということで」

たしかに力を入れてたはずなのに、どうして。いや、今はそれよりも！

「あ、洗う！洗うからあ」

すぐにまた捕まえ直して、ボディタオルを手に取る。そのままボディソープをつけて、なるべく優しい手つきで体を擦っていく。

「シャワー浴びるだけじゃなかつたんですかね」

「いいのー」

適当に流す。それは、七海の言葉よりも体に意識を持つていかれたから。

私は、姉妹の中で一番、体を動かすことが好きだ。その影響か、姉妹同士で見比べると筋肉量などの違いで体つきに差がある。そして、七海の筋肉も私と大差なくついている。けど、私のような主にスポーツで発達した筋肉とは違った感じなんだ。

それに昔はあんなにも小さかつたのに、今では身長も追いつかれちゃって、私なんかよりもよっぽどしつかりしてる。これじゃあ、どつちがお姉ちゃんかわかつたものではない。

「…………」

「あの？手、止まってるんですが」

言うとおり、私の手は止まっていた。視線の先には、痛々しい傷跡。この傷跡に、私達姉妹が触れたことは一度もない。直接もそうだが、話題を振るという意味でも。だから、いつ、どこで、傷付いたのかは知らない。わかっているのは『誰か』に付けられたということ。それだけは、傷を見れば明らかだつた。

幸い、服を着れば見られない場所にあるから、普段は目立つことはない。けど、肌を晒せば嫌でも目に付いてしまう。

「ここまでいいですよ。今度は私が洗います」

いつも七海は、こんな風に傷そのものがあることにすら気づいていないような素振りを見せる。

或いは、なんとも思っていないのか。なんて、楽観した考え方私はにはできない。できるはずもない。

「うん。じゃあ、お願ひしようかな」

七海の洗い方は、効率的の一言だつた。あれよともこれよとも言う暇もなくて、隅々まで丁寧かつ迅速に、そして気付いたら終わつていった。

「あ、あれ？もう終わり？」

「次、頭洗いますよー」

「え」

私が洗つてないところだろうとお構いなし、全身のほとんどを洗い尽くされた。

「はい、終わりです」

そう言い放つと、すぐさま自身の洗つてない箇所を洗い始める七海。それもすぐに終わつて、風呂場を出ようとする。

「え、ちょっと待つて！」

「まだ、何か？」

「お、お風呂！三玖が入つてたからお湯溜まつてるよ。せつかくだから入ろ？」

「……四分だけです」

「うん！」

何とか引き止められた。

こういつた時、七海は指定した時間などの数字を必ず守る。今回は四分。これ、一花だつたら一分になつてたのかな。さすがに短すぎるから十分？なんて考へてもどうしようもないことに時間を使つてると私は声が掛けられる。

「入らないんですか？」

先に七海は入っていた。まずい、七海が入った瞬間から間違いなくカウントダウンは始まっている。私を待ってくれているなんて楽観した考え方は、傷跡のくだりと同じぐらいにできない。

「えへへー」

「近いです。四葉姉」

「うん！」

「……ふう」

大きく息を吐いた七海を見て、やつぱりお風呂に浸かるとリラックスできるなと思った。

手を繋ぐ。幼き日と違つて、私と同じ大きさになったこの手を。

もう、二度と掴むことはできないと思っていた。でも、こうして帰つててくれた。生きていてくれた。

「痛いです」

「あ、ごめんね」

無意識に力が入つてしまつた。力を緩めようとするけど、思つたように力が抜けない。結局、さつきよりは弱めたものの手を握るにしては大分強い力なままだ。けれど、七海は文句は言わずにされるがままになつてくれてる。

「私、頑張るね」

「いつも頑張つてる人がなに言つてるんですか」

そう言う本人の方が私以上に頑張つてる。そう思いはしたが口には出さなかつた。代わりに――。

「ならもつと頑張るんだ」

――自分に言い聞かせるように。七海以上に頑張るという決意で、力強い言葉が出てきた。

少なからずこの頑張り屋な妹は、同年代と比べて何年分にも及ぶ勉強の遅れを取り戻してみせた。

私も今度こそ――。

「今度こそ」

――この手を。

「離  
さ  
な  
い」

そうだよね

「眠れない」

ちゃんと薬は飲んだのに。

なんとなく横を向けば、閉まりきつていらないカーテンの隙間から朝日が差し込んできている。

「あ、あ、あああ……もう」

ベッドから飛び起きて鏡の前に立つ。

幸い、目の下に隈はできていなかつたので態度にさえ注意を払えば、周りに心配をかけることもないだろう。

「上杉先輩との約束を果たさないと」

その為には、まず五番と接觸コンタクトするべきだ。

身だしなみを整えて部屋を出る。目的地は隣室。

煩くならないようにノックをしたら、すぐに扉が開いた。

「おはようござります。五月姉」

「おはようございます。七海」

お互に丁寧な挨拶を済ませた後で話が進む。いつものパターンだ。

「珍しいですね。部屋まで訪ねてくるなんて」

「少し打ち合わせしたことがありまして」

私の言葉に五番の首とアホ毛が傾げる。これもいつものパターンな気がしてきた。

「昨日——」

「——昨日と言えば！先輩呼び、よければもう一度してくれませんか？」

「あー、そつちかあ。

「それは、学校で」

私からの先輩呼びの何が気に入つたのかは理解できないが、一つ確かなことがある。

「そうですか。楽しみにします」

それは、人——いや、生物の多くは様々な事柄に慣れる存在なのだ。

故に、この呼称も使いどころを考えなければならない。より有効的な局面を選んで手札は切らないと。

「取り敢えず、詳しいことは中で話しましょう」

「お邪魔します」

中の描写はしなくてもいいだろう。中野だけに……。

「ど、どうしたんですか!?」

五番が吃驚している。無理もない、私がいきなり頭を壁にぶつけたのだから。

「ごめんなさい、寝ぼけてました」

「い、いえ。それより、ぶつけたところは——」

「——大丈夫です。ご心配おかけしました」

そう、寝ぼけただけ。そういうことにしておいてください。

「それで、話なんですが」

「昨日のことでしたね。そうです！あの後、上杉君の家に行つたんですか？」

う、うるさい。頭に響いて仕様が無い。

「ええ、少し用事があつたもので。その時に五月姉だけでは、みんなを集められるか不安だと言われて私も協力することになりました」「な、なんですか不安つて！」

悪いけどそこに関しては上杉先輩と同意見だ。どうか誰に頼もうが教え子がアレン以上、不安になるのは仕方ない氣がする。

「まだ信頼関係が構築できていない以上、仕方ないかと。不安だというのも、思わず洩れてしまつた一言だと思います」

ですので大目に見てあげてください。そう括ると、素直に頷いてくれる。うん、ちよろい。

「それで打ち合わせの話に入りますが、すでに声を掛けたメンバーは？」

「直接話せたのは、一花だけですね。メールは全員に送りました」

「確りとできる」とはしているよう。こういう真面目な部分は五番のいいところなのだが、眞面目に動いたうえで空回りすることが多いのが彼女である。

「返事はどうでしようか」

「一花はオツケーとのことです、メールの方はまだ一つも」

一番の「オツケー」を控えめに再現している様子を見て、思わず笑みがこぼれてしまう。

「え？え？私、何か変なこと言いましたか？」

焦つた様子もセットで可愛らしいと感じる。

「ふふ……。少し、五月姉から元気を貰つただけですよ。ありがとうございます」

おかげで気分が晴れた。当の本人は、何のことだかわかつていな様子。

「カーテン、開けてもいいです？」

すぐに許可が下りた為、勢い良く全開にする。

「うん、眩しい」

少し前の私なら鬱陶しいとしか感じなかつただろうが、今は上向きな気持ちを更に持ち上げてくれる光だ。

「ごめんなさい、話が逸れてしましましたね。私のほうからもメールを送つておきます」

内容は、みんな一緒に登下校を促すもの。

送信すると、すぐさま近くの携帯が鳴る。五番がそれを手に取ったのを見届けて私は立ちあがる。

「これでよし。朝食、作ってきますね！お邪魔しました」

「あ、はい……。いつも私達は、みんなで登校しているんですけどね」軽い足取りでキッチンに向かう私に、五番の呟きは聞こえていたかった。

かつた。

「おはよう七海！今日、一緒に学校行くつて本当?!」

「おはようございます四葉姉。そんなことで嘘はつきませんよ。あと、下校も一緒です」

嘘ですが。勿論、登下校の話は本当だが、状況によつてはこういつた事柄でも嘘はつく。

「やつたー！」

兎といい勝負ができそなぐらいに飛び跳ねる四番。もしかして、私はこれに類似したやり取りを後、三回するのか。

「朝食、できていますよ。すぐに食べますか？」

「うん！食器出しておくね」

「ありがとうございます」

律儀なことに、後に来るであろう姉妹達の食器を出してからこちらに向かってくる。

「お願ひします！」

食堂の職員も、こんな素敵なかわいらしい笑顔の生徒がトレーを受け取ってくれれば、さぞ遣り甲斐を感じられるだろうなと思いながら、手渡された食器に盛り付けていく。

最後に皿の開いた部分へ、四番のトレードマークであるウサギ調のリボンを模した形にソースを引いて完成。

「どうぞ」

「すゞーい！ありがとうございます！」

このままだと洗いものが嵩む。先に使用済みの調理器具だけでも洗い終えよう。

「あれ？七海は食べないの？」

「私は、後でいいですよ」

「え？でも一人で吃るのは寂しい」

面倒な——そう思いはしたが上杉先輩との約束もある、気分を損ねるような対応は避けるべきだ。

「四葉姉だけに巣食したと見抜かれたら、何て言われるか。一々、食事中に席を何度も立ち上るのは、マナーが悪いので」

巣食とは、先程のソースアートのこと。それにすぐ——。

「……いい匂い」

——扉の開く音がして、誰かが階段を降りてくる。

「おー、おはよう三玖」

「おはよ」

「おはようございます。三玖姉」

来たのは三番か……難易度高いのきたなあ。

「今日、一緒に——」

「——それについては、四葉姉に聞いてください。それより、朝食はすぐ食べますか？」

対応も面倒になつてきたので、四番に役立つてもらう。

それよりも今は集中だ。洗い物を中断して、盛り付けを開始する。すぐに仕上げの時間がくる。……よし。

「……ふう、できました。」

『す、すごい』

二人から揃つて、賛美の言葉が贈られた。

私がソースで描いたのはヘッドフォン。三番のトレードマークだ。ただでさえ表現難度の高いそれを、難しい角度アングルで精細に表現した自信作。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

最早、賞賛というより若干引かれてるような気もするが、得てして芸術とはこういうものなのだ。多分。

『いただきます』

「召し上がり

二人が食事を始めた時、また扉が開く。次は誰だろうか。

こうした流れで朝の一時は、段々と賑やかさを増していった。

「江端さん、送つてくれてありがとうございます」  
想定外の事態だった。まさか——。

——リムジンで登校することにならうとは。

今、お礼を言つた一番の起床が遅れたことこそが原因である。ある理由で私は、今いる空間が苦手なのだ。運転手やリムジンという車種が原因ではない。黒い車というのが問題だった。

自分のものではないかのように、肉体が硬直しているのがわかる。緊張状態によるものだ。

だが、周囲に悟られるわけにはいかない。折角ご機嫌な様子の姉達なのだから、ここで心配をかけたり機嫌を損ねるようなことになつて、上杉先輩との約束を守れないのはまずい。最悪、私の体調が心配で勉強が手につかないなどとほざき始めて、今日の家庭教師授業自体が中止になる可能性すらある。

上杉先輩が求めているものは結果。試みはしたけど失敗しました、では駄目なのだ。

今はまだ、私に話題が振られてきてはいないが、それも時間の問題。いざその時がきたら、うまくやり過<sup>ご</sup>せる気がしない。現に一番がこちらに違和感を感じはじめている節がある。

どうする。そう考えては何も思い浮かばず、また周囲の様子を見て繰り返す。このループから抜け出せた時は、私が話を振られた時だろう。

半ば諦めかけていたで場面<sup>タイミング</sup>で予想通り、その時がきた。

「七海は、どう思う？」

視線が私に集中する。

「わ、私は——」

「——お嬢様方、談笑中失礼いたします。少し止めてもよろしいでしょうか？」

介入したのは、このリムジンの運転手でもあり、父親の秘書でもある人。

特に反対意見を言うものは出ず、すぐに車はコンビニエンスストア近くの駐車場に止まつた。

「少し通話をさせていただきます。外に出る方はいますか？」

即座に返事をして、店内に入る。そのまま、店員にお手洗いを利用する許可を得る。

狭い個室で呼吸を整える。学校まで車で後、五分程度か。

大丈夫。そう自分に言い聞かせるが、押し寄せてくるのは不安と氣だるさ。前者はともかく、後者は氣を抜いたことによつて寝不足の影響が表にでてきた為だろう。

これ以上長引くと心配をかける、店内に戻つてワンコインでガムを

購入してから外に出た。

「何買ったの？」

「ガムですけど、何でみんな外に？」

と聞いてはみたが、答えが返ってくる前に理由を察した。

「ああ、急用が入ったんですね。時間に余裕があるわけではないので、もう歩き始めましょうか」

ただでさえ存在感のある車種なのに、この店の前から見たら絶対、最初に視線が向かうあろうそれがいなくなつていた。

「……気遣わせてしまつたようですね」

「何か言いましたか？」

「いいえ、何でも。それよりも今日の放課後の話をしましようか」

あの時とは違つて、今は誰かが助けてくれるこの環境に心から感謝した。

暢気に話しながら登校していたので我が校の門が見えてきた時は、始業までの猶予は瀬戸際が見えそなほどだつた。

「いつそげー！」

四番に言われなくともそうして。だが、明らかに遅れている者が一名。

「三玖姉、頑張つて！」

そう声を掛けるが返事が来ることはなく、むしろペースが落ちる有様。仕方ない、手札カードを切るか。

「登校一日目から遅刻なんてカッコワルイですよ？ 三玖先輩」

コンクリートの地面と、にらめっこして いた顔が前を向いた。

「が、がんばる」

効果はあつたようで安心する。本当は、こんなことで呼ぶつもりはなかつたが、先程他人に助けられたばかりなのだ、私も誰かの助けになることができればと思つてしまつたが故、致し方ない。

私から促したからかはわからないうが、放課後の件も全員からいい返事がもらえた。これなら上杉先輩との約束も果たせそうだ——そう

思つた瞬間、眩暈がした。

「七海!？」

最後にやらかした。もう下駄箱まで到達していく、すぐそこの廊下にさえでれば別れられたというのに。だが、他の姉達はもう先に行つて見えない。なので、三番の口説得封じにさえ成功すれば何の問題もない。

「大丈夫? 体調悪いんじや」

下駄箱を壁にして寄りかかつた私にすぐに近づいてくる三番。

あれ? この人今、さつきよりも早い速度で駆け寄つてしまませんでした?

「大丈夫ですよ。それより今、やたらと早くありませんでした? 最初からその調子スピードで頼みますよ」

少しだけ怒氣を醸し出して、自らの体と三番の両方を騙せるように言葉を紡ぐ。

「ほら、まだ教室じゃないんだから急がないと。家庭教師だけじゃなくて学校での授業も頑張つてください」

ここまでは、いい巻き返しだ。問題はこの後、私の体調に関することを吹聴させないようにせねば。

「さつきのは、虫を見つけて避けようとしたらバランスを崩しただけです。決して、体調が悪いわけではないです」

安心させるように微笑みかける。だが――。

「嘘」

――見抜かれていた。と決め付けるにはまだ早い。鎌をかけてい るだけの可能性もある。故に表情筋に変化は起きない。

「嘘じゃないですよ。ただ――」

「――花が言つてた、七海の様子が変だつて」

ちい、やはり車内で勘付かれていたか。私がコンビニ入つての間に伝えたとしか考えられない。

「はあ……ただの寝不足ですよ。そんなことで心配されるのも恥ずかしいのでみんなには言わないでくださいね」

こうなつたら、説得から交渉に切り替えるだけだ。

「やだ

「は？」

今なんと？

「保健室に連れて行く。後、みんなにも言う」

交渉失敗どころか、これじやあ三番まで遅刻扱いになるじゃないですか。

「ちよ、ちよつと待つてください。保健室なんて大げさな

「いいから言うこと聞く。先輩の言うこと聞けないの？」

「ちよつとお？だーれ、この人に先輩とか意識させた奴。

「お願ひだから、一緒に来て。お姉ちゃんからのお願い」

お願いに始まりお願いに終わる。そんな必死さを籠められては、頷くしかなかつた。

保健室にはすぐに到着して、中に入ると鏡が目に入った。それを見た瞬間、驚愕する。

「え、」

顔色が真っ青だつた。これで心配するなというほうが無理な話。固まつている私は、肩を掴まれてベッドにまで押される。

「先生呼んでくるから。横になつて待つて」

駆け足で出て行つた三番を見届けて、思考を巡らす。

校門を通るまでにも顔は見られていたわけだし、走つたことで一気に表に現れた形か。

思えば、昨日アルバイトから帰つてきた辺りから、所々でテンションがおかしかつたような気もする。

夜眠れなかつたのも、体調を崩して薬が効きが悪かつたからか。今朝、ただの寝不足だと楽観視したのは愚かな判断だつた。

「大丈夫？ 中野さん。お姉さんから話は聞いたわ」

養護教諭がいつの間にか入つてきていた。

「姉は」

「あら、お姉さんいなくて心細かつたかな。授業に行かせたわ。ごめんなさいね、切り離すような真似をして」

「いえ、安心しました」

「え？」

学校の授業ですら心配で参加できないなどとほざこうものなら、家庭教師の授業の時だつて言うに決まつていて。

「まあ、いいわ。いくつか質問するわね。ゆっくりでいいから答えて。喋るのがつらいなら首を振るだけでもいいから」

三番の言いつけを守らず、ベッドに腰掛けていた私は首を縦に振つた。

「大丈夫だよ、七海」

大丈夫、そう繰り返す姉こそが一番大丈夫とは思えなかつた。でも、その言葉を呟くことでしか精神を支えることができない。二人一緒なら大丈夫。いつかまた、大好きな人達と再会できる。ただそれだけを希望として日々を生きていた。

今度は、私が呟く。

「大丈夫、そうだよね——」

目を開く。目覚めの気分は良好で、カーテンの隙間から漏れていた暖かそうな日差しが今の私に適していた。

「いつ寝たのか覚えてない……」

首を縦に振つたところまでは覚えているのだが、それ以降の記憶は抜け落ちていた。

体を起こしたところで違和感に気づく。

「この手は……」

視線を動かした先には、大事そうに私の手を握る一番の姿。

「おーい」

呼びかけて見るが反応はない。一番遅くに起きてきたくせして、随分と気持ちよさそうに寝てる。

「離しては……くれませんよね」

さて、どうしたものか。ここから動くことなく出来ることといえ

ば。

「もう昼休み……」

それも終わりそうな時間だつた。悠長に寝させている場合ではない。

「一花姉、起きて」

「んー？ 七海だあ。……つて七海起きてたの?!」

「誰かさんが隣で気持ちよさそうに寝てるので、私が起こさないとと思いまして」

「あ、あはは。それより、体は大丈夫？」

「ええ、大分よくなりました」

「ごめんね。車の中でちょっと変だなとは思つたんだけど」「その話はいいので早く授業に向かってください。お昼の休憩時間、終わっちゃいそうですよ？」

私も先生と話をつけてから授業に出ますので――そう話しを括ると納得しきつた様子ではなかつたものの手を離してくれた。「少しでもつらいと感じたら無理しちゃダメだからね！ 放課後迎えに行くから」

一番を見届けて、私も先生を探しに行こうとベッドから降りる。上靴を履いていざ行かんと意気込んだところで対面のカーテンで視界の遮られたベッドから声を掛けられる。

「なあ、アンタ」

「あ、お騒がせして申し訳ありません」

「いや、それはいいんだけどよ。アンタ、一花さんの妹……で合つてるよな？」

「はい？ そうです。中野一花の妹、七海と言います。一学年に在籍しています」

「そうか……」

静寂が訪れた。聞いてきたのはそつちでしょうに。

「あの、それで私に何か？」

「いや、それで、あーっと」

煮え滾らない物言いに、どう対応したものかと悩む。会話の流れか

ら察するに、初対面であることは間違いないだろう。いや、今は顔さえ合わせていないのだから初対面という表現ですら適切ではないのかもしれない。

こちらが自己紹介をしたにも関わらず、相手は何の情報も開示していない。声の低さから判断するに男性だろうが、わかるのはそれだけだ。姿形さえわからない相手に付き合う義理はない。

「私、授業に出るのでもう行きますね」

「まつ、待つてくれ！」

どうやら相手にも、引けない何かがある模様。

「話しがあるのなら、顔と名前ぐらいは知りたいのですが」

仕切りのカーテンが勢いよく開かれ、やつとのことで対面する。

「あ、ああ。俺は、前田つつうもので二年だ」

先輩だつたか。

「初めてまして、よろしくお願ひします。前田先輩」

「ああ……」

またも訪れた静寂。どうやら、私が潤滑油としてこの会話を動かさないといけないらしい。

「私に用があるというよりは、姉に興味があると見受けました。例えば好意を抱いているとか」

「えっ」

だが、潤滑油を垂らすだけではこの会話がいつ終わるかわかつたものではない。ならばと、火種に油をぶちまけるかのごとく、本題を切り出すことにした。

「抱いてみたはいいものの、近づく為のきつかけが得られず、妹がいると知つてそこからヒントを探ろうとしたが、いざ話しかけてみたら何を喋ればいいのかも考えていなかつた——とかでしようか？」

最早、言語での返事はなく、首を縦に振り続ける反応だけが送られてくる。

「一花姉はドラマをよく見て、日課はジョギングです。ほとんど話したことのない相手が、自分のことを知りすぎていると警戒されるでしょうから、好物などはご自身で聞いてください」

もう行つていいですか？そう目線で語りかける。

「あ、ああ！ありがとう」

あ、だけで半分を占めそうな感謝をいただきながら、そういうえばここは保健室だと思い出す。

「私は、もう出ます。養護教諭に会いにいきますが伝言などはありますか？」

「よ、ようご？」

「保健室の先生のことです」

「いや、サボつてただけだから特に何も言うことないっす」

何だか、最初と態度が変化したような印象も受けたが、気に留めることなく保健室を後にした。

あれから、午後に予定されていた教程をすべてこなしたが、再び体調が崩れることはなかつた。一先ず、安堵の溜息を吐く。

一番は迎えに来ると言つていたが、まさか教室にまで迎えに来るというのか。お手紙入れや通話履歴に目新しいものはない。少し待機して、様子を見る 것을選択する。

数分待つたが、誰も来ない。登校時の話し合いで決めた校門前へ向かおうと立ち上がりつた時、姦しい集団が現れた。

「七海！大丈夫だつた？無理してない？おんぶしようか？」

やめてよして触らないで恥ずかしいから。

まさか、全員で來るとは。まだ教室にはちらほらと生徒が残つており、視線が私達に集中してゐる。

「四葉姉なら本当におんぶしながら帰れそうで怖いです。冗談……ですよね？」

頼むから冗談だと言つてくださいな。

「え？」

「……大丈夫です。無理はしていません。おんぶもやりません！」

自身が健康であることを必死に主張する。

「そう？でもつらかつたら何時でも言つてね？」

落胆と期待を込めたその言葉に、首を縦と横、同時に振りたい気持ちからか結果、斜めになつた。

「おーい？ 早く帰るわよー」

羞恥心と恐怖心で必死の抵抗を見せていた私に助け舟を出してくられたのは、教室の出入口で留まつていた二番だ。

揃つて返事をした姉達が先に行く中、待つていてくれた救世主の前で止まる。

「ありがとうございます。二乃姉」

「ん。……みんな大げさすぎなのよ。遭難したかもしれない、みたいなことならともかく、少し体調を崩した程度で」

「心配かけた張本人としては、何とも言えませんね。でも、内心最も心配してくれるのは二乃姉だと思っています」

「つ……。学校では——」

「——一乃先輩、ですね」

「はあ……。ほら、行くわよ。遅れちゃうわ」「はーい」

歩き始めて、校外へ出たところで先程の会話での違和感に気付いた。

「二乃姉は、家庭教師に否定的かと思いましたが、そうでもないんですか？」

「……ちょっと言わなきやいけないことがあるの。あの上杉とかいう奴に」

昨夜の会話で得た印象とは、また違う。昨日は、撃退して清々した。今日は、撃退じや飽き足らず打ちのめしてやるといった氣概が感じられる。……私が暢気に寝ている間に何かあつたと見るのが妥当か。

上杉先輩の授業に全員参加するところまで見届ければ、大事をとつて自室に籠つていようかと考えていたが、私も同席したほうがよさそうだ。

「そうなんですね」

何の気もない風を装い、会話を区切る。

一日は後、三分の一の時間が残っている。昨日と今日の出来事イベントを思

い返せば、当然この後に起こりうるそれらも易々と終えることはないだろうと、確信に近い予感が脳内を過ぎた。

「今日は、よく集まってくれた！」

やつてきてしました。家庭教師のお時間です。

取り敢えず、約束は果たせたことに安堵の溜息を漏らす。

だが、参加している面々の反応は様々で、とてもいいものとは言えない。

瞼がほとんど閉じている者、膝枕として利用されて苦笑いの者、軽侮の眼差しの者、睨みつけて黙している者、終いには携帯端末をいじくってる者までいる始末。そんな不安しかない生徒達がソファーに座っている様子を私は、高めの椅子<sup>チエア</sup>を支えに立ち、後方から見学中。「だつたら、それを証明してくれ」

「証明？」

「昨日できなかつたテストだ」

気付けば話は進んでいて、自信あり気に机上の紙へと手をついた上杉先輩が宣言する。

「合格ラインを超えた奴には、金輪際近づかないと約束しよう」

そこまで聞いて、一つ気付いたことがある。それは――。

「勝手に卒業していくてくれ」

――彼は、教えることそのものに興味があるわけではない、ということだ。少なくとも今現在は。

恐らく、金銭さえ得られればいいのだろう。そのこと自体に文句はない。だが、考えが甘い。

「わかりました、受けましょう」

抗議の声も存在したが、五番が承諾したことにより、全員がテストに挑むことになった。

合格ラインは五十点。

「凄え、百点だ!! 全員合わせてな!!」

これからのことと思い、汗が止まらないといった様子の上杉先輩を

見て、姉達は逃亡した。

静寂の訪れた広いリビングルームに、二人だけが残される。

「お前も赤点候補つてことはないよな?」

「ご心配なく、昨夜も言つたとおり教え子でもないです」

「ホントウか?」

現実逃避でもしてゐるのか、疑心暗鬼に陥つてゐる。

「近いです……」

言えば離れてくれる。ありがたい限りだ。どつかの誰かさんは、同じ言葉で離してくれないから。

「受けろ」

「はい?」

「お前もテストを受けるんだ」

なんか言い出したぞ、この人。ありがたさは露と消えた。

「テストつて、用紙の予備はあるんですか?」

「ない」

コピー機はあるが、もう解答欄が埋まつてしまつてゐる。

「作る」

ああ、もう……。さつきと同じ反応するのも馬鹿らしいので黙つている。

「今から作る。待つていろ」

「嫌です」

「は?」

何時になるかもわからぬそれに、付き合う気は毛頭ない。

「口頭で問題を出してください。それなら付き合います」

思い返してみれば、昨夜にお前も参加しろとかなんとか、言われた記憶がある。私も上杉先輩もすっかり忘れていたようだが。「……特別にお前は、合格ラインを三十点に下げてやる

この人、弱気になりすぎじゃないですか?」

「第一問!」

「凄え、百点だ!! お前一人でな!!」

余裕でした。

「どうか、一部の問題はまだ授業で習つていません。私が一学年だと  
ということ忘れてませんか?」

「なんでこいつが生徒じやないんだ……」

私の指摘は右から左に抜けていつてるご様子。

先程も思つたが、考えが甘いのだ。これまでの発言から察するに『卒業』させることこそが最終目標の家庭教師業務なのだろう。だが、多くの場合は受験を合格しての『入学』を最終目標としたもの。上杉先輩は、後者の基準が脳内に残っていたのだろう。前者と後者の教え子の学力には差があつて当然。他者に多額の金銭を払つてまでする依頼内容が、そんな簡単ことばかりではないのを体験していない人だと推測する。

「あの、これ……」

話しかけはしたものの、現実逃避は続いているようで反応がない。机の上に置いてあつた、テスト用紙。私は、何気なく手に取つたそれを見て驚愕していた。

「すごい……」

驚愕は、すぐ賞賛に変化し口から零れる。

すべて手書きなのだ。五枚ある紙のどこを見ても。

問題文に解答欄、更に名前の記入欄まで違和感のない均整の取れた配置で丁寧な文字と線が引かれている。

紙同士を重ね、照らし合わせる。すると、ほとんどが差がない。

この人、この質クオリティで卒業が視えるまで続ける気なのか?

たつた数枚の紙。それを見ただけで私は、この人の授業を受けてみたいと思つてしまふ。

印刷技術が発達した現代において、均整の取れていな文章や配置は、見ている側にストレスを与える要因となりうる。元は白紙なのだ。均整をとる為の基準も自分で作り、多くの時間を費やして作成したのだろう。適当に書いてできる物ではない。

「おい、どうした?」

いつの間にか復活した上杉先輩が近づいていて、私は顔を上げた。

「ミ、これ——」

「——ちょっと、七海！ そいつに近づいちやダメよ！」

私の肩に手をかけたのは二番だ。こちらもいつの間に戻ってきたのか。

「あんた、七海に余計なことしてないでしようね？」

「何もしてねーよ」

「……七海は体調崩してたんだから部屋で大人しくしてなさい。私はコイツに話があるから」

「えっ、ちょっと！」

問答無用、といった形相で自室に押し込まれる。

部屋に入ってしまうと防音機能が高水準の為、リビングで発する声は届いてこない。

気にはなつたものの、二番も心配して私を押し込んだのだ。無下にするのも気が引けた。

着替えてからベッドに潜る。<sup>イ</sup>とにかく寝よう、また同じ失敗を繰り返すのは御免だ。

目を閉じるとすぐに眠気は襲ってきた。まどろみに飲み込まれるまでの間で思考を巡らせる。

真っ先に思い浮かんだのは、先程のリビングでの出来事。

あの紙のおかげで私の上杉先輩に対する評価は急上昇した。私自身が彼の授業を受けてみたいと思うほどに。だが、受けるべきは姉達だ。

この先、姉達を授業に参加させるところから、家庭教師としての仕事が進んでいくだろう。

私もそれを手伝うところから始めようと思う。何でもすると言つたからでも、姉達が心配だからでもない。私自身の意思で行う。理由は、彼の授業を受けて欲しいと思ったから。元から、私は誰かの為に動くより、自分自身の為に動いたほうがあうまくいく性質だ。だからこれでいい。いや、これがいい。

僅かな間だつたが、思考の大部分に靄がかかってきていた。最後に明日からがうまくいくよう、祈るがごとく呴こう。

「大丈夫——」

『大丈夫だよ——』

「——そうだよね——」

〔六海〕  
〔七海〕

分かつてる

「焼肉定食、焼肉抜きで」

「はいよ」

この学校に入学してから、何度頼んだのかも覚えていないこのメニューを今日も今日とて頼む。

すぐに差し出されたそれを手に、いつも使っている席へと直行しようとしたが、特徴的なアホ毛を見つけて声をかける。

「五月。昨日の話はどうなった?」

「上杉君……」

やたらと機嫌な様子だつたからチャンスだと思ったのだが、俺に気づくと五月の表情は歪んだ。

「……七海が話をまとめてくれました。全員参加することです」

「そうか」

どうやら、あいつに頼んで正解だつたようだ。昨日は、用意したけど出番のなかつたテストが日の目を見ることになりそうで安心する。俺にとつても他人、それも同年代へ向けてのテストなんて作ったのは初めてだつたんだ。自分の勉強だけではなく、睡眠の時間だつて削りながら作つたそれが、お蔵入りとあつては心にくるものがある。

「それより! 七海から聞きました。私だけじゃ……」

勢いよく切り出してきたかと思えば、すぐに言葉は萎んでいく。

「だけじゃ?」

「……いえ、なんでもありません。それより、なんで七海が貴方を手伝うことになつているんですか?」

お前一人じや不安だから助力してもらうことにしただけだ。それにどちらかと言えば、俺を手伝うというよりかは、五月に手を貸すということ。だが、それらを指摘したところで話が拗れるだけ。

「それは……」

今度は、俺の言葉が萎む。頭を過るのは、昨夜のこと。こいつの妹が見せた必死の表情が、脳裏に焼き付いていた。その光景がストップーとなつた形だ。

「……忘れ物を届けてくれたんだよ。律儀な奴だな、あいつ」

少し悩んで、嘘をつくことにした。だが、後半の部分は本心だ。  
「答えになつていませんよ。なんで手伝うことになつたのか聞いたんです」

おつと、いけない。嘘を考えるのに集中しすぎて、会話の流れを無視してしまった。

「律儀な奴って言つただろ？ あいつから申し出でてきたんだよ」

これに関しては、嘘と事実、どちらとも取れる。実際『何でもする』とは言つたのだ。まあ、なんであれ、一応の納得はしてくれたのか、追求はこなかつた。

全員の参加さえ確認できれば、今のこいつに用はない。

「ちゃんとお前も参加し——」

「——五月一？ もうみんな集まつてるよー？」

捨て台詞の途中で介入してきたのは、二乃……だったか。

よくも昨日は、と口から出そうになつたが、昨夜のことがまたも過つては唇を噛むに終わる。

「何話してたの？」

そう聞く二乃は、俺のほうを一瞬だけ見て、すぐに最初から居なかつたかのように視線を五月に戻した。

「それは」

元から離れるつもりだった俺は、いつもの席へと向かう。だから、五月がその先に放つた言葉の内容は、食堂の喧騒に搔き消されて耳に届くことはなかつた。

「何度見てもでつけ。家賃は月十万はするだろうな（適当）」

放課後、二回目となる家庭教師業務の時間だ。

中野家の住むタワーマンションの前で、仰け反るように天を見上げる俺がいた。

「ここにちは、お待ちしていました。みんなが待つてゐるリビングまで案内します」

そう言つて入り口から現れたのは、五月達の一つ年下の妹、七海だ。  
……律儀律儀と何回か口にしたが、想像以上に律儀な奴だな。ここ  
最上階だったはずだ、彼女達の家は。昨日は必死で階段を登つていた  
から、最上階が何階かは覚えていないが、外から見れば相当高いのは  
明らかだ。私服なのだから、一度家に戻つて着替えたのだろう。エレ  
ベーターとはいえ、わざわざ降りてまで出迎えるのは面倒そうだ。  
「ど、言つても。昨日もいらっしゃったのですから、案内は必要なかつ  
たでしようね」

まあ、お客様であることに違ひはありませんし。俺の返事も待たず  
にそう呴いた七海を見て、何でこいつが教え子じやないんだと思つて  
しまう。少なからず、名前だけ書いてその先が一切進まなかつたり、  
いつ起きてるのか疑問に思うぐらいにすぐ眠くなる奴や、剩<sup>あまつさ</sup>え俺に薬  
を……やめよう、またあの表情が過るだけだ。

「あの、行かないんですか？」

「あ、ああ。今行く」

やつべ、何かを操作してこのマンションの入り口のドアを開いた気  
がしたが、どうやつたのかを見過<sup>ご</sup>した。昨日は、不法侵入のような  
形で開いているところに滑り込んだからわからない。まあ、適当に操  
作すれば開くだろ。多分。

今更聞くのも若干の恥ずかしさがあつて自己完結で終える。

「そういえば」

「んあ？」

「昨日は、自信ありといつた得意気な表情をしていましたが、何か秘策  
でも？」

エレベーターが来るまでの場繋ぎとして放つたのだろう。何の氣  
もなさそうな語調で語りかけてきた。

「ふつ、それは始まつてからのお楽しみだ」

答えると同時になんだか高級そうな音が鳴る。

「お待たせしました」

エレベーターが来ても先に乗ることはせず、片腕を中へ向けて広げ  
ることによつてお先にどうぞと促してくる。高級ホテルとかではこ

ういった扱いの案内をされるのだろうか。

「ああ……」

こんな丁寧な対応をしてくる奴の姉達を、これから俺は赤点候補者以外はほつたらかすことで楽しようとしているのか、俺は。そう考えると罪悪感が沸いてきたが、何より大切なのは金銭を得ることだ。こちらにはこちらの事情がある。自身の勉強も両立させないといけないんだ、負担は一人分でも軽くなるにこしたことはない。そう考えて罪悪感を振り払った。

「私は、後ろで見学させてもらうことにします。言われたとおり、楽しみにしておきますね」

エレベーター内で後ろの壁によりかかっていた俺には、ドア横にある操作盤の前に立つた七海の表情は見えなかつた。

「家庭教師はいらないって、言わなかつたつけ？」  
「だつたら、それを証明してくれ」  
「証明？」

俺の言葉が想定外だつたのか、若干の不安を覗かせる二乃。  
「昨日できなかつたテストだ」

机の上にテスト用紙を手と一緒に叩きつける。

「合格ラインを超えた奴には、金輪際近づかないと約束しよう」

この場にいる全員が大なり小なりの反応を示す。その中で一番気になつたのは、後ろで見学している七海。

あまり驚いた様子はないが、視線が鋭くなつた気がする。何を考えているかはわからないが、こちらに引く気はない。  
「勝手に卒業していくてくれ」

何せよ、これで俺の負担は減るんだ。

「凄え、百点だ!! 全員合わせてな!!」

減るはずだつたのになあ。

「お前ら……まさか……」

「逃げろ!」

そう叫んだのは誰だつたか、この時のことと未来で思い返すと曖昧だつたが、五つ子達全員が一斉に逃亡したことは鮮明に記憶していた。

当時の俺が制止の声をかけたところで、彼女らの逃亡を阻止できるはずもなく。五つ子は各々の自室に退避した。

学校の教室かよ、と感じるぐらいには広いリビングで残つたのは俺一人かと思っていたが、もう一人こちらを見つめる視線があることに気づく。

「お前も赤点候補つてことはないよな?」

「ご心配なく、昨日も言つたとおり教え子でもないです」

「ホントウか?」

もう、何もシンジラレナイ。残つていた七海の眼前まで近づき、見えもしない心の中を覗くように瞳を見つめ返す。

「近いです……」

言われて、その日何度も思い返していた昨夜のこと——から更に後に起きた出来事を思い出す。

「悪い」

すぐに離れる。一応、こいつは俺にとつては——いや、今その話は後回しだ。それよりも昨夜のことで他に思い出したことがあつた。

「受けろ」

「はい?」

俺の突然の発言を聞いて、意味がわからないといつた表情の七海。

それは、昨日俺が穴だらけの秘策を思ついた時に見せた五月の表情とそつくりだつた。

「お前もテストを受けるんだ」

他に思い出したこととは、昨夜の会話でお前も参加しろとかなんとか言つたことだつた。この様子では、俺もこいつも忘れていたようだが。

「テストって、用紙の予備はあるんですか？」

「ない」

即答。ないなら。

「作る」

俺の教材製作テクニックは、進化を遂げた。五人分のテストだけではなく、先の授業分だつてストックを作つた今の俺なら、わずか25問のテスト一つを作るぐらいわけない。自分の才能が恐ろしいぜ。この場でささつと作つてみせる。

「今から作る。待つていろ」

「嫌です」

「は？」

さつき放つた俺の即答よりも早く返され、思わず声が漏れる。

「口頭で問題を出してください。それなら付き合います」

仕方ない、付き合つてやるか。そんな感情を隠そうともしないその態度を見て、後悔するなよと脳内でさつき行つたテストよりも難しい問題を組み立てる。

数分後、問題を決めたはいいものの、少し難しくしすぎたかと思つて保険をかける。……後になつて思えば、こいつの学力を鑑みると失礼にも程がある行為だつたが。

「……特別にお前は、合格ラインを三十点に下げてやる」

俺の情けが不満なのか、眉をひそめた七海。だが、テスト内容は容赦なしだ。

「第一問！」

「凄え、百点だ!!お前一人でな!!」

文句なしの満点だつた。解答もすべて即答。しかも、こちらが問題

を出して いる最中でも答えられた だろ うに、一門一門、最後まで聴き終えてから の即答だ。これなら、クイズに 出てくるよ うな引つ掛け問題でも不正解にならなかつただ だろ う。

「なんでこいつが生徒じやないんだ……」

エレベーターでも思つた、この一言に尽きる。

しばらく現実逃避を続けていたが、扉の開く音に気付いて顔をあげる。

階段を降りて きていたのは二乃。彼女を視界の端に捕らえてはいたが、それより近くにいる七海の様子がおかしいことに気づき声をかける。

「おい、どうした？」

よく見てみれば、俺のテストを手に持つて いる。

そんな七海は、動搖と敬意の念が合わさつた眼差しで口を開いた。

「こ、これ——」

「——ちょっと、七海！ そいつに近づいちやダメよ！」

何を言われるのか気にはなつたが、二乃に遮られてしまう。

「あんた、七海に余計なことしてないでしようね？」

「何もしてねーよ」

ただテストを受けてもらつただ けだ。結果は、お前達五つ子の合計と点数が同じだつたぞ。なんていじわるを言おうかと思つたが、余計なことを喋ろうものなら噛み付いてくるかもしれない剣幕だつたのでやめた。

「……七海は体調崩してたんだから、部屋で大人しくしてなさい。私はこいつに話があるから」

「えつ、ちょっと！」

七海の肩を押して部屋へと閉じ込めた後、再び俺の元に戻つてきた二乃。

「五月から聞いた。七海から手伝いを申し出たつて。本当？」

そう切り出してきた二乃の雰囲気は、さつきまでの刺々しいものとは何処か違うように感じる。

「本当だ。だが元はと言えばそれはお前が……」

「私? 一体私と何の関係があるっていうの?」

今日何度も数えるのも面倒になつてきた、例の表情による効果でブレークがかかる。

「な、なに」

言葉は途中で留めることに成功したが、お前のせいだという非難にも似た感情までは抑えきれるものではなく、表面に出てしまう。

「そんなに気になるなら、妹から直接聞けばいいだろ」

「七海は、平然と嘘を付くからダメ」

「嘘……」

昨夜の俺との会話も嘘や演技の類だったのだろうか。だが、何度も回想しても『あれ』がそういう類のものだとは思えなかつた。

「教えてくれないならもういい。最後に一つだけ言つておく、七海にこれ以上関わらないで」

「あ、おい!」

掛けても無駄だと思いながらも、制止の声を出さずにはいられなかつた。

「あいつ、お前達のことが心配で俺に協力なんて申し出たんだぞ。それをお」

「——分かつてる!……分かつてる……そんなこと、言われなくたつて」

今日一番の激しい剣幕で俺の言葉を遮つたかと思えば、すぐに意気消沈して自室へと姿を消した。

「まつたく、どいつもこいつも七海七海つて。……俺が家庭教師としてうまくいってないのは、実は全部あいつのせいなんじやないか?」

そこまで言つて、考えを改める。

「つて、そうじゃないだろ」

さつきのは戯言だ。理由は何であれ、あいつは俺に協力してくれていて、その証拠にちゃんと五つ子達を集めてくれた。そのおかげで、少なからず生徒全員の学力は把握できたのだ。これでどういった教材を作つていけば良いのかの指標になる。感謝こそすれど、責任を押し付けていい相手ではない。

「……一応、もう一度全員に声を掛けるぐらいはしてみるか」

階段をあがつて一番近くにある七海の部屋はスルーし、五月の部屋からノックをしていった。

結局、誰一人として、勉強させることはできずの中野家をする。数時間ぶりとなる地上の空気を大きく吸つて、ゆっくりと吐き出す。その動作に連動するようにマナーモードにしていた携帯電話が振動した。

開いたメールボックスには、大量の受信記録。

「一体何通きてるんだよ」

差出人は全部同じ。

「内容は、どれも似たようなものか」

一通だけ返信をしたところで、また振動する。今度は、メールではなく通話を知らせるものだつた。

「もしもし」

電話口からは、甲高い声が鳴り響いてくる。

「昨日からそろばつかりだな」

通話先の相手は昨夜から同じようなことばかりを繰り返し言い続けてくる。

内容は、七海がどうとか、七海に失礼のないようにだとか、七海七海と口を開けばそろばつかり。正直なところ、耳に脾睨たたこができるような思いだ。

中野家で放つた戯言は、こういつた事情があつて思わずでてしまつたものだつた。

回想している間にも、一方的な弾丸トークが終わる様子はない。俺にとつては、口撃と言つても過言ではないので、なんとか止める為の言葉を探る。いくつか候補はあがつたが、先程、二乃が去り際に放つた言葉を借りるとしよう。

「分かつてる」

『いい? 七海さんは、私にとつて恩人なの』

「らいば」

どうして

一日は二十四時間ある。

例え、午後九時に就寝する人でも、起床する時間が翌日になるとは限らない。何かの拍子に目が覚める可能性だつてあるのだ。ならば夕方頃、床に就いた私が同日の夜分に覚醒したのは、何の不思議もない話だつた。

「私は寝ています」

なんて呟いてはみたけれども、一度瞼を開いたことにより映つた自室の風景は、ニューロン神經細胞が活発になるに、必要十分な情報量だつた。

「起きますか」

二度寝は諦めてベッドから降り、真っ先に向うは鏡の正面。薄く塗られた銀のおかげで、手前と奥が逆転していることを除けば、肉眼で見ると遜色ないであろう私の姿が映る。

異常な箇所は見当たらない。軽く、手首足首肩周りを重点とした、立つたまま行える柔軟運動ストレッチをこなしながら、自身の状態を確かめてゆく。

「よし」

一日の終わりが近い時間に気合を入れる。別に大したことをする予定もないが、今日という日は、まだ終わつてないのだ。『何か』が起つた際に、注入したこの気力が物事を左右する……かもしれない。

櫛をして、踏み荒らされた草木のように乱れた髪を梳いていく。

肩先まで伸びた先端部分に視線がいったところで、寝巻きの止め具ボタンが一つ取れていることに気づいた。動いた時に引っ掛けたのだろうか、この部屋のどこかにはあるはず……なのだが、いくら探しても見つからない。

捜索に時間を浪費したせいで、予備のボタンを引っ張り出すのも億劫になつてしまい、その気持ちを表すかのように視線を落とせば、開いた胸元から谷間が露出していた。

「大きくなるものですね」

五つ子の姉達と再会した時、栄養不足で痩せこけていた私の体は、適切な食事を摂り続けることによつて、合成樹脂の加工品が水を吸収するかのごとく、肉や脂肪がついていった。その中でも胸は、最も成長の過程に驚かされた部分だ。

「一体どこまで成長するのかと怯えていたっけ」

今でこそ苦笑するだけに済ませれる話だが、当時は心の底から恐怖していた。最終的に体の内側から破裂して死ぬのではないかと布に包まつて震えていたほどだ。

勿論そんなことになるはずもなく、姉達と似たサイズに落ち着いた。

「まあ、このままでもいいか」

首元のボタンは残つており、留めれば胸元も曝さなくて済むが暑苦しいのでやめる。

自室を出ようとドアノブに手をかけたところで、胃が空っぽになつた合図<sup>サイン</sup>を送つてきた。

「はいはい。今からご飯ですよー」

聞き分けのない子供をあやすように、お腹を撫でながらリビングへと向かつた。

「うーん、何もないなあ」

誰かが箱の中に顔を突つ込んでいる。

「家の冷蔵庫に限つて、空<sup>から</sup>なんてことは滅多にないと思うのですが」「わっほい！」

昨日の早朝、四番に襲撃されたときの私と似たような反応をしたのは、一番だ。

「び、びっくりしたよ。七海ちゃん、体調は大丈夫なの？」

「……大丈夫です。ご心配おかけしました」

「えー？ ホントかなあ？ 今、少し返事が遅れたからなあ、怪しいなあ」  
なあなあなあと、冷蔵庫を隠すように詰め寄つてくる姉を鬱陶しく思いつつ躲す。

返答が遅れたのは、一番の小さな異常に気づき、それを怪訝に思つたからだ。つまり、私も彼女と同じ気持ちということ。

「隠し事、してるんじゃないですか？」

「ギクッ！」

少々心配したのだが、擬態語オノマトペを一々口にするような余裕があるとうのなら、大して重要な秘密でもないのだろう。

「なんだ、十分に食材はあるじゃないですか」

朝食を作つたのは私なのだから、あるだろうとは思つていた。けれど、家には矢鱈やたらと食う人間が一人いるので一応確認した次第だ。「えーっと、塩辛いものが食べたいなー、なんて思つてたり……」「はいはい。食べたいのは塩辛いものじやなくて、塩辛そのものでしよう?」

「あはは……はい」

苦笑いで誤魔化そうと試みてはいたが、すぐに白旗をあげた。

「少し、後ろを向いててください」

「え?」

「いいから、早く」

「は、はい」

指示通りに体の向きを変えたのを確認して、戸棚の隠し空間を開く。

「はい、もういいですよ」

素早く中にある物を取り出し、台所の上に置いた。

「これは……?」

一番が不思議そうに見つめる先にあるのは、片手で持つには少し大きい壺。

「ふふ、なんでしょうね。開けてみてください」

恐る恐るといった様子でゆっくりと蓋が退かされる。中身は——。  
「し、塩辛リアクセシヨンだあああ！」

大きさな反応リアクションをしてもらつて悪いが、まだ味見すらしていない試作品である。品質の保証はできない。

「でも、初めて見る塩辛だね。これ、どうしたの?」

「作りました」

「え、」

それも初めての挑戦、味はどんなものだか。

「ま、ま、ま」

「ま？」

「毎日私に塩辛作つてください」

「毎日は、ちょっと……」

「そこをどうにか！」

「嫌です」

膝から崩れ落ちた一番を尻目に、白米を装つて温める。その間に付け合せとなるサラダを作つていく。

「ほら、いつまで頃垂れているんですか。もうできますよ、食べないんですか？」

「た、食べる！ 食べます！ 絶対！」

「なら、早く手を洗つてきてください」

起床時間もこれぐらい早ければ文句なし、そう思える速度で戻つてきた一番と共に、席へと着く。

『いただきます』

当然と言わんばかりの表情で、真っ先に箸が向けられたのは塩辛だった。

それは湯気上る白で埋まつた茶碗に乗せられ、共演を果たす。そして、宙へと架かる箸の力を借りて口へと運ばれた。瞬間、嬉々とした表情は至福へと昇華した。

「その様子なら、成功と捉えていいかもしませんね」

私が食して下す評価よりも、作つているとき最も食べて欲しいと思ふかべていた人物が見せるこの表情こそが、他の何物にも代え難い最高の報酬だと常々思う。

「うん！ 最高！」

偶然にも最高という部分が一致したようだ。

「……つて、もうないじやないですか」

物凄い食べっぷりだった為、若干引き気味で眺めていたのだが、気

づいたときには塩辛が全滅していた。

「えー?! そんな……！」

それはこつちの台詞である。私、まだ一口も食べてないんですが。「試作品だつたから、大量に作つていたわけではありませんが……」「こちらの言葉など聞こえていないのか、愕然の面持ちで固まる一番。

「食べすぎですね。しばらくは控えましようか」

「え、」

しつかり聞こえているじゃないですか。

「まつ、待つて！ そんな殺生なあ」

「また作りますよ。毎日は無理でもね」

「ムリ！ もう私の体は、アナタ（の塩辛）なしでは生きられないの！」

急に芝居じみた大げさな動作で、こちらに手が差し伸べられた。

「食事中です。邪魔なので引っ込めてください」

「アッハイ……」

払うことすらせずに、一言で退かす。

「今日、体調を崩した私が言えた義理ではないのですが、体調管理だって実力の一つなんですよ？ 一花姉には、やりたいことがあるのでは？」

？」

そう言つた私に見せてきた一番の表情は、昨日とは少し違つた何かを誤魔化すような笑み。

「別に言いたくないのなら、深く追求するつもりはありませんよ。……そうですね。一方的に制限を設けるのも悪いですし、次作る時は塩分をもう少し控えめにして作りましょうか。勿論、味もまた『最高』と言つてもらえる品質でね」  
〔クオリティ〕

一度頂へと到達しても、きっと次なる目標ができる。それは新たな頂か、はたまた違つた光景か。それらを追い続けていくことこそが、人生というものなのかも知れない。そう思えるひとときだつた。

時刻を確認すれば、まもなく今日が終わろうとしている。

一番と別れてから一通りのことをこなし、再び床に就こうかと自室へ足を向けたところで扉の開く音がした。

「眠れないの？」

三番の登場である。

「寝ようとは思つていましたが、すぐに眠れるかどうかは……体調は快復したのでご心配なく」

「なら、少し付き合つて」

「一体何に？」

私の疑問に答えが返つてくることはなく、腕を引っ張られる。

「いらっしゃい」

到着したのは、三番の自室。

「お邪魔します」

「一体これから何が行われるかはわからないが、入室の挨拶だけは済ませる。」

「明日がつらくなるので、三十分だけですよ？」

「休日だから大丈夫……三時間」

私が大丈夫じゃないのだ。

「三十分です」

譲らない意志を見せる。

「……三万秒」

「増えてる増えてる」

平日なら登校してる時間だ。

「……三千秒」

「……いいでしょう」

五十分。うまく引き伸ばされた形になるか。

さすがに体内時計だけで、これだけの時間を正確に把握するのは骨が折れそうなので携帯のアラームを振バイブレーション動だけで知らせるように設定する。

「それで、何をするんですか？」

まさか授業が受けたいなんてことはあるまい。

「ゲーム」

この答えを聞いて、私の表情は微妙なものへと変わった。三番は、普段からヘッドフォンをよく首にかけている為、音楽を聴く以外にもこういったことに使用していることに不思議はない。問題はジャンルなのだ。勝手な想像<sup>イメージ</sup>になるが、対戦ゲームなどをやる傾向<sup>タイプ</sup>には見えない。となると——。

「これ、協力しないとクリアが難しいの。手伝つて」

——こういった内容になるのは、想像に難しくない。

そもそも、私は協力という行為が苦手——といつては語弊があるが、適切な言葉を探すなら……そう、経験が少ないので。

だから、断ろう——そう口に出そうとした時に過ぎたのは、上杉先輩のテストだった。

あれを見て、私は彼の仕事を手伝おうと決めた。それは言い換えると『協力』するということだ。なら、今回の三番からのお願いにだつて、逃げるわけにはいかない。経験がなかつたから——そんな言い訳が通じるほど、現実もゲームも甘くないだろう。

「わかりました。任せてくれさい」

ゲームの内容は、日本の歴史上の人物達を題材としたアクションゲームだった。

プレイするのは初めてなので、基本的な操作を教えてもらつてから問題のステージへと挑戦する。時間は限られているのだ、悠長に他のステージで肩慣らししている場合ではない。

「上手だね。七海」

「そうですか？」

褒められはしたものの、疑問の声で返す。

まだ、攻撃の判定や発生時間<sup>フレーム</sup>、敵の行動規則<sup>パターン</sup>も理解していないのだ。

評価を貰うだけの土俵にすら立つていないように感じていた。

「ここまで印象では、そう難しい内容には思えませんが、この後に何か起ころんですか？」

「うん。出てくるボスが——」

『何か』それは、自室から出る前に覚悟していたことだつた。日付は変わつてしまつたが、それは確かに私の前に現れた。

正直なところ、現実はゲーム以上に困難だろうから、こんなところ  
で躊躇くわけにはいかない。そんな気持ちで私はこのお願<sup>ミッショ</sup>いに挑んで  
いたのだ。だが、その考え方こそが甘かつた。何故、協力が必要だつた  
のか。何故、やたらと長い時間を要求してきたのか。それらの意味を  
探ることなく、無防備な状態でのこと『何か』の前まで来てしまつ  
た。

「この強敵<sup>ボス</sup>、不具合<sup>バグ</sup>に侵されてませんか!?」

「うん、体力ゲージがすっごく……」

『長い……』

というか、画面に收まりきつていなかつた。

「あ、あの……これつて修正<sup>パッチ</sup>とかを待つたほうがいいんじや……」

「これが最後のパッチ」

「Oh……」

なんてこつたい。

「ちなみに、これの攻略法は……」

「ハメ殺し」

「……いつ終わるかは」

「わからない」

ステージの途中で保存<sup>セーブ</sup>できないことは確認済み。

「五十分じや、終わらないかもせんよ?」

「終わるかもしれない」

即答である。そもそも、ここまでくるのに時間を使つてるので五  
十分すら残されていない。

「嵌めパターンは難しくないから、頑張ろう」

深夜の共同作業が始まった。

集中する。この行為は、私が得意なことの一つだつた。物事に没頭  
しているといつてもよい。必要な情報を逃さず取得し、不必要的情報  
は意識の外へと追いやる。海中深くから、わずかに差し込む光へと向  
けて少しづつ、少しづつ近づいていくかのような感覚と共に終着点<sup>ゴーラル</sup>へ

と——。

「三玖姉！減つてます！減つてますよ！」

「ふあ？」

數十分に及んでいた戦い——と呼ぶには一方的過ぎたが、とにかく一向に減る気配のなかつたボスの体力にやつとのことで変化が起きた。

だが、それより早く変化が訪れていたのは三番のほうだった。十分ほど前から、瞼が落ちかけていたのだ。

「ほら、よく見てください。……あつ」

私はこの時、失敗した。<sup>ミス</sup>例え、瞼が落ちかけていようとも何十分と繰り返していた作業は体が覚えていて、無意識に入力され続けていた。だが、私が喋りかけたことにより、その動作に変化が訪れてしまう。

今まで反撃の余地などかけらもなかつたボスは、鬱憤を晴らすかのごとく怒涛の連續攻撃を決める。結果、三番が操作していたキャラクターは地に伏せ、残るは二人の武将のみ。ここからが本番——というより、ボスからすればやっととともにに戦えるといったところだつた。もし、このまま私も倒されてしまえば、今までの苦労が水の泡。

「がんばあつ……すー」

ほとんど落ちかけている三番の応援が合図となつて、一騎打ちが始まつた。

三番は言つていた、協力しないとクリアは難しいと。つまり不可能ではないのだ。……多分。ねえ、寝言でいいから同意して？

「かつ、勝つた……」

激戦だつた。少なくとも私にとつては。今し方、地に伏せた彼にとつてはどうだつたのだろうか。生き残る者と散りゆく者。両者は様々な差があつたが、勝敗を分けたのは隣に誰かがいたこと……かもしれない。

「終わりましたよ」

死者と違つて——というのは偏見かもしれないが、とにかく生者はやるべきことが多いのだ。真っ先に取り掛かるべきは、生きているんだか死んでいるんだかわからないぐらい、静かに瞼を閉じるお姫様を在るべき場所へと誘導すること。

「……セーブ」

「はいはい」

適当に返事はしたもの、すでに終わらせてある。ただ安心させるために放つた言葉。だが、その選択<sup>チョイス</sup>は悪手だった。

「あの……？」

反応はなく、静寂が訪れる。安心させてしまったが故、現実とは違う何処かへと旅立つてしまつたようだ。

「はあ……」

背中と膝裏に腕をかけ、お姫様を包み込んでくれる王子様の元へと運ぶ。鳴る寸前だつた携帯端末と部屋に存在する光るもの達を消灯していき、立ち去る前に退室の挨拶を喰いたところで、もう一つこの場面に適した挨拶があることに気づいた。

「おやすみなさい。三玖姉」

良い夢を。

先ほどまで集中していたせいか、眠気など当分来そうにもなかつたので、一度リビングへと戻り『とある物』を手にして自室へと向かう。「さて、やりますか」

手に持つたものを机の上に広げる。

「綺麗に正解した箇所が被つていらない」

私が向かい合つていたのは、昨日行われたテスト用紙だ。それは自身ではなく姉達の物。

五つ子の不思議<sup>パワ</sup>によつて成せる技なのだろうか。全員で一枚のテストに挑んでいれば満点を取れていた内容だつた。

だが、用があるのは正解した箇所ではなく、不正解に終わった問題。一つ一つ、一人一人、どういった間違い方をして、どうやつたら次

の機会に彼女達が正解できるかを考えながら、注釈を加えていく。  
彼女達が類似した問題にもう一度向かい合うかどうかの保障など  
ない。それどころか、この紙にまた目を通すかどうかすら分からな  
い。だが、先が見えない状態でも今の私に、何もしないという道を通  
る気にはなれなかつた。

「これでよし」

再びリビングへと戻り、元の位置に。

種は蒔いた。後は水をやり続けるだけ。まだ見ぬ明日に、彼女達の  
満開に咲き誇る笑顔があることを願いながら。

「夜に薬の力なしで眠れたのは、久方振りですね」

私にとつて、それは快挙と表現しても過言ではない。このまま薬の  
必要ない体へと戻れるのが理想だ。

有意義な休日を過ごせたおかげで、このような形で朝を迎えること  
ができただろう。あの人には三度の感謝をしておこう。

いつものように鏡の前に立つ。髪は乱れていたくて、整<sup>セツトスル</sup>えるのが容  
易そうだ。無意識に上がった口角が、今の私の状態を的確に表してい  
る。

できることなら、この気分を維持<sup>キープ</sup>したまま一日を終えたい。先週と  
同じ要因<sup>パターク</sup>で崩れることなど、想像することでさえお断りしたい。

ならば、せつせと自宅を出てしまうに限る。自身の朝食は抜いても  
問題ないだろう。だが、観賞魚の分は忘れずに与えておく。

「いっぱい食べてね」

返事などあろうはずないが、行動で示された。

「いつてきます」

一際目立つように、素早い動きで泳ぐ魚達。早く行けと。

「はいはい」

私が玄関の扉を開けると同時に、家の奥からも同様の音が聞こえて  
きた。さつきの催促は、これを予知したものだつたのだろう。

太陽が真上にある頃。食堂にて、いつものメニューを頼んだ私は、トレーを手に空席とある人物を探す。

「七海みーつけ！」

貴方はお呼びじやない。

「こんにちは。四葉姉」

「うん！」一緒に食べよう！」

挨拶を返し忘れるほど、一緒に食事を共にしたかったということなのだろうか。ならば、無下にするのも気が引ける。

「構いませんが、席は何処にしますか？」

「みんなも来るから、大きなところにしようか」

「なら、あそこでですね」

四番の希望に沿う候補はいくつかあつたが、こちらもある条件を満たした席がいいので指定させてもらつた。

特に反対意見がでることもなく、席へと着いた。

「それだけでいいの？」

「ええ、あまり食欲がなくて。体調は万全なのでご心配なく」

今日も今日とて、真実と嘘を練り合わせて会話を組み立てていく。「でも、ちゃんと食べないと。これ一個あげる！」

「ふふ、ありがたく頂戴しますね」

マナーの良い行為とはいえたが、貰える物はもらう施しは受けの主義だ。

そんな遣り取りをしているうちに、続々と姉達が集合する。後、揃っていないのは三番か。

「あ、上杉さんだ」

四番の言葉につられるように視線を向けた先には、確かに枝分かれしたアホ毛があつた。それは私の探し人だつた。

「私、行つてくる！」

静止の声などかける暇もなく飛び出していったウサギリボンを見て、もう一人が席を立つ。

「近くに三玖もいるし、私も行つてくるかな」

仕様がないなあ。そんな素振りで追いかける一番を見届け、再び視

線を上杉先輩へと戻す。

遠目からではあるが、異常はないように見える。土下座したあの日、本人は体に異常なしと言つてはいたが、後から何らかの症状が現れる可能性も否定できない。しばらくは様子見するつもりでいた。

一、三、風。これらだけなら嵐にはなりそうもないが、そこに四も加わっているのだ。思わず目を背けたくなる突風が吹いていた。やがて風は止み、二人が戻ってきた。

「あの、三玖姉は……？」

『あ』

本当に仕様がない人達だ。

放課後、バイトの時間まで余裕があつたので、学校の図書室で読書に勤しんでいた。

静寂の空間に突如訪れる重量感を思わせる音。何事かと視線を向ければ、大量の本が受付カウンターに乗せられていた。

「全部貸し出しで!!」

ドン引き。この空間にいる人間の大多数がそういうった表情をしていた。

「意地でも勉強教えてやる!!」

きつと、口角が上がつていたのは本を借りた彼と私だけ。

「これも借りては?」

積み上がつた本に一冊追加する。先程まで私が読んでいたものだ。ジャンル種別は歴史に該当する。それも時は戦国。夜中に三番と一緒にやつたゲームも同じ時代背景を題材としていた。

どういった経緯で彼がこの塔タワーを作るに至つたかは知らないが予想はつく。

「読み終えても不安なようなら、私に声を掛けてください。他の資料を『用意します』

想像以上に彼が関わることによつて描かれる未来は、私にとつて理想の光景なのかもしれない。

単語カードに連絡先を記載して端に置く。いい頃合いなので、返事を待つことなく立ち去った。

「お願い……聞いてくれる？」

「どうして——」。

「最後まで……頼りないお姉ちゃんでごめんね」

「謝るの？」

「これが……ワガママだつてことはわかってるの」「どうして——」。

「生きて」

「——そんなにも他者を想えるの？」

「分かってるんだ……七海が死にたいと思つてることは」「どうして——」。

「それでも……私は」

「——笑顔なのよ！」

「……態々、夢にまで出てこなくてもわかっていますよ。ええ、わかつてますとも」

さすがに一日連続で薬いらざとはいかなかった。気分よく床に入つたのまではよかつたが、いざ瞼を閉じても寝付くことはできず。もしかすると、そんな期待を胸に粘りはしたが、結局最後には観念したあたりで記憶は途切れている。

薄暗い自室に点滅する物体が一つ。それに指を添えれば光量は増し、部屋の全体とまではいかずとも、天井まで照らされる。

未読の着信は二件。

一通目。用件……放課後の予約。待ち合わせ場所……屋上。

「告白かな？」

そんな冗談を呟いてしまうのも、無理のない内容だつた。だが、相手のほうに無理がある。

懇々屋上にまで呼び出してきたのだ、色恋沙汰ではないだろうが、何らかの重大な用件である可能性は考慮しておこう。

次のお便り。差出人……不明。

「誰？」

最初は上杉先輩かと思ったが、内容に目を通せば支離滅裂な文章となつており、幼稚な印象も受ける。だが、それ以上に強く伝わってきた感情がある、それは緊張の類だつた。

文章を吟味し、何とか読み取れたのは『とにかく会いたい』ということだけ。何て返すかと少し悩んだが、冷静な文章で質問を送る。一度に多くの情報を送信しては、相手方の緊張が増すかもしれない。なので、一つ一つ聞いていこう。まずは――。

「あなたの名前は何ですか？」

これが私にとって、家族以外で初めての大切な関係性を築くことになる人物との、最初の交信だつた。

「もう読み終えたんですか？」

「いいや、まだだ。今回は別件になるな」

授業の合間、小休憩の時間に私は上杉先輩に呼び出されていた。秘匿性を要する内容ではないらしく、人の多くが行き来する廊下での立ち話。

「お前、テストに何かしたのか？」

「何かとは？」

惚けることを選択する。

「いや、それはわからないんだが……」

「そもそもテストとは、一昨日私達の家で行われたものですよね？」

「それで合つてる」

「心当たりはありませんね」

この件を隠すこと自体に深い意味はない。なんだつたら、暴かれてもいいのだ。

「どうか……」

「他に用件がないのなら、もう行つても？」

「ああ、時間を取らせて悪かつた」

「お気になさらず」

仮面を被り、他者を欺き続ける存在。痛い目に合つても憲りらず、嘘を付かない方がいいと分かっていながら……いや、本当は分かった気になつていてるだけなのかもしれない。勉学に励もうとも、世間を知ろうとも、大切なことは未だ修められずにいる。そんな愚者の歩みは不意に止まつた。

人の数は増していて、振り返つても上杉先輩の姿は見当たらない。だが、さつき私達がいた辺りから、こちらを見つめる視線を強く感じたのだ。

氣味が悪かつたが、次の授業タイムリミットが迫つている。後ろ髪を引かれる思いで、その場を後にした。

告白。それは、この学校に入学してから何回か経験済み。その中でも一番多い指定場所は、今私が立つているここ、屋上だつた。といつても、手の指を折り曲げて数え切れる回数なので、統計を取るには心許ないが。

これから来る予定の人物は、今述べたような色恋沙汰の類に属する用件ではないだろう。けれど、『何か』を伝えたくて私をここに呼び出したことは確かだろう。

扉が開かれ、待ち人が姿を表す。お互いの髪が風で揺れているが、中途半端な長さの私より、彼女のほうが乱れていて大変そうだ。しかし、風の影響を強く受けているのは髪だけではない。彼女の手に握られているそれも、髪同様乱れていた。

『どうして——』

手に持つてるのは髪ではなく紙。数は……五枚か。

「——アイツに協力するような真似してるとの？」

「——みんなのテストを持つてあるんですか？」

告白なんて可愛いらしいものではありませんでした。これでは詰

「七海」  
三乃姉  
問ですね。

## 知つてゐる

知つてゐる。

この温もりを私は知つてゐる。

昔、何度も頭を撫でてもらつた。何度も抱きしめてもらつた。

その時に感じた気持ちを誰かに伝えたくて仕方なかつたんだ。

「一花」

名前を呼ばれた。伝えなくちや、言葉にして。

「ねえ、お母さん。私ね——」

「うーん……今何時ー?」

答えてくれる人はいない。私の一人部屋なんだから当然か。

「夜かー。これは二度寝かなあ」

夜じやなくとも、二度寝どころか三度寝だつて歓迎するけど。  
「あーでも、お腹空いた……起きますか」

すぐに部屋を出ようとしたけど、ドアノブに手をかけたところでや  
める。人様にお見せするには照れる格好だつたからだ。

床に散らばつてる服の中から適当に拾う。このままの格好だと、妹  
達にならともかくお父さんに見つかつたらと何を言われるか。

今度こそ部屋を出て、冷蔵庫の前まで辿り着いた。

「うーん、何もないなあ」

口にはしたものの、私の探す『何か』とは好物のことだつた。ちや  
んと冷蔵庫の中に食材はたくさんある。  
「家のうち冷蔵庫に限つて、空からなんてことは滅多にないと思うのですが

「わっほい!」

後ろから声を掛けってきたのは七海だつた。

しつかり者のイメージがある妹にしては、パジャマの上のほうのボ  
タンが外れて谷間が覗けてしまうだらしない格好だつた。私の適当  
に選んだ服も、人のことは言えないんだけどね。

「び、びっくりしたよ。七海ちゃん、体調は大丈夫なの?」

「……大丈夫です。ご心配おかけしました」

「えー? ホントかなあ? 今、少し返事が遅れたからなあ、怪しいなあ」「こんな夜遅くに、体に悪そうな物を食べようとしていたと知られたら、何か言われるかもしれない。そう考えて、冷蔵庫から意識を遠ざけるように七海詰め寄った。

だけど七海は、ひよいつと私を躱してしまった。

「隠し事、してるんじゃないですか?」

「ギクッ!」

バレてる。

躱されても冷蔵庫の中身だけは見せまいと阻止していたのだけれど、一瞬の虚をついて覗かれてしまった。

「なんだ、十分に食材はあるじゃないですか」

これ以上、七海相手に隠し事をしても、バレるのは時間の問題かな。

「えーっと、塩辛いものが食べたいなー、なんて思つてたり……」

「はいはい。食べたいのは塩辛いものじゃなくて、塩辛そのものでしちゃう?」

「あはは……はい」

無意識に誤魔化してしまった。それもすぐに看破されて私のお姉ちゃんゲージは見る見る減少。

「少し、後ろを向いててください」

「え?」

「いいから、早く」

「は、はい」

いきなりの命令に困惑したけど、それ以上にきつめの口調とは裏腹に優しい笑顔だつたのを不思議に感じながら指示通りにする。

なにやら後ろで物音がして。気になつてしまい、我慢できずに後ろを向こうとしたところで声をかけられる。

「はい、もういいですよ」

「これは……?」

台所の上に置いてあるのは壺だつた。

「ふふ、なんでしょうね。開けてみてください」

こういう時はなんて言うんだつたか、オニが出るかヘビが出るか。  
みたいな?

「し、塩辛だああ！」

言われたとおりに蓋を開けて出てきたのは、イカでした。

「でも、初めて見る塩辛だね。これ、どうしたの？」

「作りました」

「え、」

これを七海が……!?

「ま、ま、ま」

「ま？」

「毎日私に塩辛作ってください」

結婚するならこういう人がいいなあ。

「毎日は、ちょっと……」

「そこをどうにか！」

「嫌です」

渾身のプロポーズは敢え無く撃沈。

「ほら、いつまで頑垂れているんですか。もうできますよ、食べないんですか？」

「た、食べる！食べます！絶対！」

「なら、早く手を洗ってきてください」

さつきまであつた眠気は吹っ飛んでいた。

素早く手洗いを済ませたつもりだつたけど、私以上に七海の準備のほうが早かつた。

すでに料理はテーブルに並んでいて、すぐに座れるように椅子まで引いてある。

『いただきます』

最初に手をつけるのは勿論私の大好物。<sup>塩辛</sup>

ご飯と一緒に口に入れた瞬間、顔がニヤケるのを抑えられなくなつた。

「その様子なら、成功と捉えていいかもせんね」

大成功だ。味も食感も理想の塩辛だった。けど、このニヤケの原因

はそれだけではない。嬉しかった、七海が作ってくれたことが何よりも。

「うん！最高！」

箸が止まらない。止められない。

「……って、もうないじやないですか」

言われても、すぐに脳が理解できずに空いたお皿の上で箸が空を切っていた。

「えー?!そんな……！」

少し遅れて現実を直視したけど、やっぱり認められそうにない。

「試作品だつたから、大量に作っていたわけではありませんが……」

これで終わりなんて。

「食べすぎですね。しばらくは控えましょうか」

「え、」

ヒカル？ひかる。控える。

「まつ、待つて！そんな殺生なあ」

「また作りますよ。毎日は無理でもね」

「ムリ！もう私の体は、アナタ（の塩辛）なしでは生きられないの！」

本日、二度目のプロポーズ。

「食事中です。邪魔なので引っ込めてください」

「アッハイ……」

伸ばした手は触れることすら叶わず。

「今日、体調を崩した私が言えた義理ではないのですが、体調管理だって実力の一つなんですよ？一花姉には、やりたいことがあるのでは？」

？

そう言つて私に見せてきた七海の表情は、昔の記憶にあるお母さんの表情によく似ていた。

「別に言いたくないのなら、深く追求するつもりはありませんよ。……そうですね。一方的に制限を設けるのも悪いですし、次作る時は塩分をもう少し控えめにして作りましょうか。勿論、味もまた『最高』と言つてもらえるクオリティでね」

誰よりも、私達の幸せを願う表情に。

休日、私は日課のジョギングをしていた。

ギリギリ朝日と呼べないこともない光を浴びながら、慣れたコースをゆっくりと走ってゆく。

すれ違う通行人の中には、ペットの散歩をしている人もいた。私はそれらを目で追う。

あれはワンちゃん。あれはネコちゃん。あれもワンちゃん。またもワンちゃん。これはヘビちゃん。……ってヘビ!? 「だ、誰のペット!?

さすがに足が止まる。苦手というほどではないけど、若干の恐怖心はあった。

「ペットなわけないでしょ」

次に現れたのはオニでした。

「二乃!」

ワンピースのスカートを強く握り締め、苛立ちを抑えきれない様子でご登場。何があったかは分からぬけど、こういった時の原因は大体が姉妹関連なことがほとんどだ。ついでに、二乃は後になつて落ち込むタイプなので、ついさつき何らかのトラブルが発生したのも想像がつく。

「つて二乃? そこへビいるよ?」

「ヘビがなんだつていうの」

「なんだつて……危ない?」

人ならともかく、ヘビ相手には普段ならしないような強気の発言に、思わずハテナマークが浮かぶ。

「危ない……? つてヘビ!?

やつぱり、私の言葉も目の前にある光景も半分ぐらいしか認識していなかつたみたいで、足元まで近づいたところでやつと気づいた。

急いで私のほうに避難してきた二乃。背中の後ろに回られて盾にされる。これは、七海を除く妹達が偶にしてくる行為だけど、二乃相手にされたのは随分と久しぶりな気がする。

「ほら、もう行つたよ」

ヘビも周りの動物達と同じで散歩だつたのか、私達に興味を示すこともなく、茂みへと消えていった。

「はあ、もうなんなの、今日は……」

「色々あつたみたいだね」

「そうなの！七海が——」

「——あつ、それは後でお願い。先にジョギング終わらせちゃうから」  
決まつたコースを走りきりたいのも嘘ではないけど、今の二乃相手は面倒そうだ。クールダウンしてから話を聞きたかった。

「もう、聞いてきたのはそつちでしょ」

「あはは、また後でね」

早々に別れを済ませて、足を動かす。

「あれは……」

二乃と別れてから数分経つたあたりで噂の七海を見つけた。声を掛けるには遠い距離で、すぐに建物の影に隠れて見失つてしまう。見ていたのは僅かな時間だったけど、捉えた雰囲気に違和感を覚えて首を傾げる。

「怪しい」

それは何かを楽しみにしている表情なんだけど、私の知つているものとは何かが違う。でも、どこかで見たことがあるような……。

「……あつ」

思い出した。あれは、この前見たドラマで不倫した妻がしていた表情に似てる！つまり。

「男かー!?'

わ、私という人がいながら！……いや、振られているんですけどね。それも二回。

「これは、みんなを招集する必要がありますな」

こうしてはいられない。ペースをあげて、急いで帰宅した。

「これより、第五十回五つ子会議を開催します！」

私の高らかな宣言と共に、参加者である七海を除いた妹達の視線が集まる。

「はい！」

「どうぞ、四葉くん」

元気よく伸ばされた手に指差して、発言を許可する。

「議長、今回の議題は何でしょ？」

「議題は……」

深刻な面持ちで溜めを作る私を見て、みんなが息を呑む。

「七海に好きな人ができた！」

『な、なんだつてー！』

「……かも」

「男……」

「つまり彼氏!?」

「あわわ、どうしよう。こういう時は赤飯かな!?」

「ふさわしくない奴だつたら、どう調理してやるか……」

私の補足の弦は搔き消されてしまつたよう。三玖と五月ちゃんは妥当な反応だけど、四葉は話が飛躍しすぎで、二乃是物騒すぎた。  
「静肅に！」

別の人——例えば私達五つ子に同じような話が出てきたとしてもこういった反応にはならない。二乃是口マンチックな恋愛に憧れているから、あんな発言はしないだろうし、私と四葉はきやーきやーと騒いでいただろう。けれど、七海となれば話は別だ。

「あくまで、かもしれないというだけです」

加えてジョギング中に見たことを話したけど、反応は微妙なものだった。

「一花の勘違いということでは？」

何人かの気持ちを代表して、五月ちゃんが聞いてくる。

「五月くん、貴女がそう思うのも当然です。なので、証言人を用意しました」

私の言葉が終わると同時に立ち上がったのは——。

「二乃？」

二乃は私達を一瞥したあと、息を一度大きく吐いてから喋り始めた。

「今日、七海を買い物に誘つたんだけど断られたの」  
それ自体は珍しいことではない。だけど――。

「その時、理由を聞いたんだけど……答えてくれなかつた」  
――理由を聞けば、必ずと言つていいぐらいには答えてくれるのだ。

「しかも、答えてくれないだけじゃなく『ふふ、何だと思います？』って……あれは絶対怪しい。調査すべきよ」

落ち込むとというより、少し拗ねてるような二乃を見て、五月ちゃんが励ますように口を開く。

「で、でもそれだけじゃ彼氏云々の話にはならないのでは？もしかしたら私たちにサプライズな何かを用意しているのかもしれません」  
その反応は想定済み。

「結論を出すにはまだ早いです。もう一人用意しました」  
無論、証言人のことだ。

「もう一人？あと残っているのは……」

まず視線を向けられたのは四葉だつたけど、首を大きく横に振つて否定する。

「なら――」

「――私だよ」

残るは三玖しかいない。

「今朝、七海がお菓子を作つてゐのを見た」

「それなら、私たちの目の前にあるじゃないですか」

そう、私達が集まつてゐるリビングのテーブルには、置手紙と共にお皿に盛られたラング・ド・シャガがあつた。

「その時、ここにあるのとは別に包装してたの……おいしい」  
サクサクと良い音を鳴らしながら頬張る三玖に続くように、みんなで一口。

「確かにおいしー！でも、挟んでいるチョコレートの中にあるのはなんだろう？」

「これは……ジュレね。食感の邪魔にならないぐらいの舌に触れるとすぐ溶ける少量で、わずかに広がる酸味とひんやりとした感覚がいいアクセントになってる。味はベリーかしら」

四葉の疑問に答えたのは、七海同様に料理が得意な二乃だつた。「ベリー・ブルーベリーとかラズベリーフてことだよね。私はミカンぽかつたよ」

「私はリンゴですね」

「私はブドウ」

「私はモモかな?」

「ラング・ド・シャ 자체、作るのは簡単なほうだけど、蓋を開けてみれば予想以上の作り込み。色んな味があるのは、まだ相手の好みがわかつてないから……」

二乃の推理で想像は加速する。

「つまり、これは余り物つてことかあ!」

私の叫びにみんながざわついた。

「この先、クリスマスもバレンタインデーも彼氏優先つてことだよね。あくまで私たちはついで」

『ついで……』

三玖の言葉に、今度は意氣消沈。

静まり返った空間で思い起こすは過去の光景。七海から初めてプレゼントをもらつた時のことだ。

『いちおねえちゃん!これ、くりすますすふれぜんと!ゆきがふらな  
いから、おりがみでゆきだるまつくつたの!』

『え?でも、わたしなんにもよういしてないよ?』

『いいの!ふれぜんとがほしいんじやなくて、ふれぜんとをあげたいの!』

次に思い浮かんだのは再開して最初の年。

『あの……一花姉さん。これ、クリスマスプレゼント……です。  
えつと、えつと、体を冷やさないようにマフラーを編みました。受け  
取つて……くれますか?』

『勿論!ありがとうございます。ありがとうございます。七海……!』

『苦しい……です。でも、暖かい……』

そして現在では。

『一花姉。これ、クリスマスプレゼントです。今年は冬用のランニングウェアにしました』

『おー！ありがとう。動きやすそうだし、可愛いね。これ、どこのメーカーの？』

『メーカー品ではありませんよ。私が作りました』

『えっ』

体が成長して、私への呼び方が変わつても、想いの籠つた作り物を贈ってくれることに変わりはなかつた。おそらく、みんなも似たようなことを思い出しているはずだ。

そんなこんなでしばらく沈黙が続いていたけど、それを破つたのは五月ちゃんだった。

「……いいじゃないですか、私たちにとつても喜ばしいことなはずです。だつて、今まで普通の学生らしいことを全然できていなかつた七海が恋をするなんて、昔では考えも及ばなかつた——」

「——本当にいいの？もしかしたら、ついでどころかプレゼントすらないかもよ」

みんなに語り掛けてはいるけど、何処か自分に言い聞かせるような五月ちゃんに、三玖の容赦ない追撃が入つた。それは——。

「良いわけないじやありませんかー！議長ー！」

——辛うじて保つっていた強がりを崩すには、十分だつたみたいだ。

「よーしよし、頑張ったねー。お姉ちゃんもんねー」

涙目で私に抱き着いてきた五月ちゃんのアホ毛を寝かすように撫でながら、今後について考える。

「むー、何にせよ情報が足りませんな

「まずは情報収集からだね」

私の呟きを三玖が拾つてくれた。反対意見は出なかつたので、議論を進めることに。

「何かいい案ある人」

「はい！直接聞けばいいと思ひます！」

他人との距離感が近い、四葉らしいストレートな回答。と言いたいところだけど、そうではない。四葉はデリケートな問題などは敏感に察知して、一步引いたりするのも珍しくはない。だけど、七海相手にはブレーキが利かなくなつたみたいに距離を詰める。超えてはいけないラインのギリギリにまで。

そこまで考えて、最近四葉が七海と同じぐらいの距離感で接している相手がいたことを思い出す。

「まさか……ね」

「……う？」

今まで男の影もなかつた七海に急に浮上した疑惑。つまり、相手がいるとしたら最近出会つた人物である可能性は高い。そして、私達も最近になつて出会つた男の子がいた。

「……ちか！」

それは――。

「もう、一花つてば！」

「え？」

「え、じゃないよ。さつきから呼んでたのに」  
どうやら考え方事に集中しすぎてたみたい。

「大丈夫？ 具合いが悪いんじや……」

「ごめんね。ちょっと考え方をしてただけだから、心配しないで」

今は私より七海のことだ。

「それじゃあ、意見の善し悪しは置いといて、先に案を出し切っちゃおうか」

続々と意見が挙がつて、それを五月ちゃんが記録してくれたので、その紙を読み上げていくんだけど……。

「尾行、誘導尋問、盗聴……えつと、この先は全部消そつか」

今言つた案だけでもひどいのに、他のはとても人様に見せられるものではなかつた。

「いちばんマシなのは、やっぱり最初に挙がつた四葉の案だね。これでいこうか」

当然、反対する人はいない。問題は誰が実行するか。

「ん? どうしたのみんな、私のほう見て」

この場にいる五人中四人の視線が一人に集中する。

「こういうのは言いだしつべがやるべきよね」

「え?」

「ええ!」

「頑張つて」

「ま、待つて一人じゃ不安——」

「——四葉」

私は、不安がる四葉の言葉を遮った。  
「貴女に私たちの未来を託します!」

「えつ」

託すもなにも、どんな聞き方をしたところで七海の回答は変わらないと思うけど、もし本気でうざがられたりでもしたら、今の私達には致命傷になりかねない。被害は最小限に抑えなければ。

「四葉隊員に敬礼!」

一斉に立ち上がり綺麗な敬礼を決めた四名と、一人だけ座つたまま呆然と見上げる四葉。

「これにて、第五十回五つ子会議を終了します!」

『お疲れ様でした』

そのまま座りなおすこともなく解散する。

「一花はバイトだつけ?」

「うん。帰つてくるのは少し遅くなるかも」

「そつか。なら三玖と五月、一緒に出掛けない?」

「私はバス。夜更かししてたから、眠い」

「私は大丈夫です。ついででいいので新しくできた駅近くのお店に寄つてもいいですか?」

「また食べるの?」

各自、この後の予定に向けて動き出していく中で一人だけ取り残されたのは人物の名前は言うまでもない。

「ど、どうしよう」

……のままでは、さすがに可哀想だ。フォローはしておこう。

「四葉」

「い、一花」

「大丈夫。あくまで四葉のは第一案つてだけだから。はぐらかされたりすれば私たちが他の手段を実行するし、私はその場には居ないかもしけないけど、他のみんながフォローしてくれるよ。とにかく、反応を見ないことには次にどう動けばいいかも分からないうから、最初は頼んだよ」

「うん、分かつた。任せて！」

単なる私の勘違いで終わればそれでよし。だけど、もし相手がいるようなら……。

『見極めなくちゃ』

結局、四葉が聞いてくれたものの「彼氏はいませんが、ある意味気になる人はいます」という、グレーには変わりない返答だつたらしい。「第二作戦を開始します」

五つ子会議の翌日、今日も七海は出かけるけど行き先は秘密と聞いて、暇していた三玖と一緒に尾行することにした。

「うん。変装は完璧」

意気込む相棒は頼もしいと言いたいところだけど、変装道具がおかしかった。

「それ何？」

「何つて、お面」

それは分かつてる。

「目立っちゃうんじゃないかなー……」

キヤップ帽を被りながらマスクにサングラス姿の私に対し、三玖はキツネのお面を被っていた。それも妖怪チックな。可愛くもあるけど、ちょっと怖い。

「一花だつて十分目立つ格好だよ。お互い顔は隠せるから問題な

い

そう言われると反論できない。

「それより、七海が動いたよ。追いかけなきや」

通行人の視線が痛い。完全に怪しい人を見る目だ。街中なのもあつて、人が多いのから痛さ倍増。

三玖は気にした様子もなく、小走りで尾行している。お面のおかげで恥ずかしさなどもシャットアウトできているのだろうか。

「ペースはやつ」

先ほどから小走りをしている理由、それは七海が歩く速度が早すぎて見失いそうになるからだ。普段一緒に出かける時などは、こちらに合わせてくれていたのだろう。思い返してみれば、昨日もすぐに見失つてしまっていた。

マスクのせいで息がしづらくて、少しつらくなってきた。私ですらこうなのだ、体力のない相棒はというと……。

「ハア……ハアツ……」

当然、私以上に息を乱していた。

「み、三玖、大丈夫？」

「も、もう無理……」

そう言い放つて地面に座り込んでしまうキツネさん。

「頑張つて！七海のこと見失つちゃうよ」

「……もういなideど」

「え」

目を離していたのは、ほんの僅かな時間だったのに、言われたとおり振り返つてみれば姿は見当たらない。

「ど、どつち行つた？」

「左……私に構わづ先に行つて」

「え、でも……」

「いいから」

「うん……わかつた」

早くも脱落してしまつた相棒の為にも、なんとかして追いついて見せないと。そう意気込んで走つてはみたけど、一度見失つた七海のこ

とを再び捉えることは叶わなかつた。

「これは気づかれてたのかなー」

そういつた素振りは一切見られなかつたけど、七海は鋭い子だ。尾行がバレても何の不思議もない。

「諦めますか」

三玖にメールを送つたけど先に帰つてしまつたと返信が来たので、近くの喫茶店で休憩することにした。

さすがに喫茶店内でも変装道具を身につけたままとはいかないのを取り外す。

「ふう……」

やつとのことで息苦しさから開放される。店内に入ればクーラーが効いていて、走つて上がつた体温を冷やしてくれる。

注文したフラペチーノを受け取り、空いている席を探す。ちょうどお昼時なこともあつて、中々見つからない。周囲を見渡していると、こちらを見つめる視線に気づいた。ワイルドな大人の男性。でも、どこかで見たことがあるような……？

男性の座つている席はもう一人分空いている。もしかして、座れということだろうか。でも、知らない人相手に相席する勇気は持ち合わせていなかつた。

「あつた」

他に空席を見つけて安堵する。男性もすでに視線を外していて、さつきの座れ云々は私の勘違いだつたよう。

一冊だけ持つてきていた本を取り出して、読書を開始する。昔は読まなかつたけど、七海に薦められた本は肌に合うのか苦もなく読めたので以降、仕事の休憩や移動時間に読むようになつた。

本を半分まで読み終えたところで、少し離れた席で談笑が盛り上がりつてゐることに気づく。声の主はさつきの男性のようだ。他にも会話をしている席はあるので詳しい内容までは聞き取れなかつたけど、見た目と同じく声もワイルドだつた男性は本当に楽しそうな聲音で話している。

ある程度雑音があつても読書を再開すれば、すぐに集中して気にな

らなくなるだろう。そう思つて一度テーブルに置いた本にもう一度手を伸ばした時、聞き覚えのある声を耳が拾つた。

「七海……？」

声のほうに顔を向けても、仕切りが邪魔してここからは見えない。だけど、話している相手は見えた。さつきの男性だ。単なる聞き間違いの可能性もあると思つたけど、男性と一緒に楽しそうに笑う声を聞いて確信する。七海で間違いないと。

「……の……は……か？」

「それ……とき……なあ」

必死に耳を澄ましても、会話の断片しか聞き取れない。何を話しているか非常に気になる。そもそも相手との関係は？まさか気になる人つてこの男の人？七海は彼氏はいないって言つてた、つまり残る可能性は援交！

と、そこまで考へては居ても立つても居られなくなつた。見つかるリスクを冒しても会話を盗み聞こうと決意する。

店内に置いてある無料の小冊子をとるフリをして、男性と七海に近づく。ここなら死角になつているうえ、会話も聞き取れる。

「そんな裏話があつたなんて驚きです」

「別に大した話じやねーよ」

「パパなりに、頑張つていらっしゃるのですね」

「パパ!? もしかして、これは噂に聞くパパ活というやつでは……!?

「やめてくれ。さすがに恥ずかしい」

「ふふ、過去を暴露された本人のほうが恥ずかしいでしょうし、これぐらいいの言葉は素直に受け止めてください」

「あー、やっぱ似てるわ、嬢ちゃん」

「誰にですか？」

「いや、何でもねえ。そろそろお開きにしようか」

「……? もう、こんな時間ですか。そうしましようか」

二人が席を立つたので急いで席に戻つた私は、フラペチーノを飲み干して先に店を出た二人をなぞるように追う。外に出ると同時に変装道具を付け直して尾行する。

数分歩いて住宅地まで来たところで一人は立ち止まつた。すぐに別れないからさつきの『お開き』が何かの合図かと疑つていたけど、どうやらここで別れるようだ。よかつた、本当に。

「今日は、ありがとうございました。イサナリさん」

「おう。こつちこそありがとな。久々に昔話ができて楽しかつた」  
イサナリさん。イサナリさん。……覚えた。

「そうだ。お父さん云々の話で思い出したが、近いうちに父親として礼に行くから、その時はよろしく」

「はい?」

父親として礼?!つまり、パパ活のお金渡すこと!?

「そのうち分かる。それじゃあな、気いつけて帰れよ」

「あ、はい、さようなら。……そのうち分かる、ね」

こちらの心配をよそに、あっさりと別れたのを見て一先ず安心。七海も自宅のほうに歩き去つていった。つて、いけない。すぐにでも追いかけ、あの男性のことを聞いただす——。

「一花」

——為に走りだそうとしたところで、呼び止められた。

「三玖? 帰つたんじゃ」

「また外に出たんだ。一花は、今帰るところ?」

喫茶店に入つた時は、まだ太陽が真上にあつたけど、今はもう沈みかけていた。

「うん。でも七海が……」

「ん? 七海がどうかした?」

さつきのことを話そうとして思い止まる。変に不安を煽つても仕方がない。まずは、私のほうで七海に聞いてからにしよう。

「……さつき、一人で家のほうに帰つていく七海を見かけたけど、もういなくなつちやつたなつて」

「そうなんだ。私もちょうど帰るところ。一緒に帰ろ」

今からじや追いつくのも大変そうだし、後で聞けばいいか。そう考えて、二人で歩き始める。

「今までそれ、着けてるの?」

「あつ、忘れてた」

指摘されて初めて、変装道具一式を着けたままことに気がついた。

「三玖こそ、お面つけっぱだよ？」

「……忘れてた」

私のように顔の正面につけていたわけじゃないけど、頭の上にキツネさんが乗つたままだ。

「一度帰つたのに、着けたままもう一回出掛けたんだ。実はその仮面気に入つてたりする？ 確か、三玖はネズミが好き——」

「——ネズミじやなくてハリネズミ」

「あー、うん。ハリネズミね、ハリネズミ」

いけない。三玖は気にいったことには、こととんこだわるタイプ。表情は変化しないけど、怒つたりもする。ここは面倒な展開になる前に、話題を元に戻そう。

「それで、その仮面はどうなの？ キツネも好きだつたつけ？」

「ううん。キツネが好きなわけじやない。でも、七海に貰つた物なんだ」

「へえ……」

七海からのプレゼントには、毎回ちゃんとした理由がついてくる。本人のことを考えた物であるのは言うまでもないけど、他人にプレゼントをした時に理由を聞くと、表向きとは違う隠された意味を教えてくれることがある。ちなみに、プレゼントした本人には絶対に教えないらしい。

確か前、四葉にカラフルな手袋をプレゼントしてた時は、表の理由がスマートフォンを操作しやすいように指を好きな時に開ける物を。裏の理由が嫌いなピーマンを食べられるように願いを込めてで、ご丁寧に裏地に種まで描いてある徹底ぶり。後日、四葉はカラーピーマンを色んな料理に仕込まれてたのに気づくことなく、それはそれは美味しそうに頬張つていた。

「あれ？ でも、お面つて、どんな理由で貰つたの？」

お面なんて裏どころか表向きの理由でさえ、想像つきそうにない。

「それは……秘密」

「えー、気になるなあ」

でも、よくよく考えてみたら裏の理由は、なんとなくであるけど浮かんできた。

三玖は私達五つ子の中で、姉妹に変装して演技をするのが最も得意だ。だから私も、仕事と学校の用事が被つた時とかは、三玖に頼んで替え玉として入れ替わって貰う事も多い。勿論、他の姉妹間で頼み頼まれることもあるけど、やはり頼まれることが一番多いのは三玖だ。目ざとい七海のことなので、私達が入れ替わりをしていることに、そしてその回数が三玖に多いことにも気づいているだろう。なので、大方ボロを出さないように願いを込めてとかそんな感じだと思う。キツネが化けるエピソードは、よくあるからね。

だけど表の理由、つまり七海がどんな使い方をしてほしくてお面を渡したのか、それが謎だ。まさか、今日みたいに尾行する時用に渡したわけじやあるまいし……。

「そんな大事そうに持つちやつて、やつぱり相当気に入っているんだね」

「…………」

反応の返つてこない妹を不思議に思つて表情を覗こうとしても、下を俯くような姿勢なので長い髪が邪魔して分からぬ。

「三玖？」

「……えつ、何？」

名前で呼べば、今度はちゃんと反応してくれた。バツとこちらを見上げた顔は、いつもの無表情。

「何つて、そのお面、気に入つてるんだねつて話だよ」

「気に入つてる訳じやない。ただ、思い出していただけ」

「思い出すつて何を？」

「約束」

「約束? 一体どんな?」

「秘密」

それは、さつきも聞いた言葉。でも、今度は即答。そして、心なし

か力強く感じた。

「教えないよ。だつて——」

私が何かを言う前に、先を封じるようになに喋った三玖の表情は——。

「——これは私と七海、二人だけの秘密の約束だから」

——確かに微笑んでいた。

三玖と一緒に帰宅した後、七海と二人になれる機会を窺つたけど、その時は訪れなかつた。

翌日の月曜。七海と一緒に登校しようと頑張つて早起きしたけど、すでに七海の姿はなくて、ならいつかと二度寝したら危うく遅刻しかけた。おかげで今日もみんなでリムジン登校だ。前回との違いがあるとすれば七海がいないこと。

学校の前まで着いたのでリムジンのドアが開く。すると五つ子会議の時、七海の彼氏かもと密かに疑っていた人が、何故かすぐそこにいた。

「お前ら、この前はよくも逃げて——」

怒られると察知して、すぐさま逃走。

「——ああっ！また！」

みんなも私と同じ考え方みたいで、見事に動きがシンクロしていた。

「よく見ろ！俺は手ぶらだ、害はない!!」

その言葉に、これまたみんなで足を止める。でも、私達五つ子は疑り深いのだ。

「騙されねーぞ」

「参考書とか隠しない？」

「油断させて勉強教えさせてくるかも」

二乃と私と三玖の順番で警戒する言葉を投げかけられた彼は、まともに取り合わず何故か一番近くにいた五月ちゃんに近寄つた。なにやらヒソヒソ話を行つていたけど、それもすぐに終わつて五月ちゃんがこつちの輪に入つてくる。

「私たちの力不足は認めましょう。ですが、自分の問題は自分で解決します」

「勉強は一人でもできるもん」

「そうそう、要するに余計なお世話つてこと」

五月ちゃんの宣言に、三玖と二乃の援護射撃が入る。私も乗ろうかと口を開こうとしたところで、七海のことがちらついた。きっと七海も、私の過保護気味な行動を知つたら余計なお世話と思うだろうと。

「そ、そうか……!!」

ポンッと手を拳で叩いた彼は、出会つてから初めて見せる笑顔で私達にこう言つた。

「じゃあ、この前のテストの復習は当然したよな！」

その言葉に時が止まつたかのことく、私達は固まつた。ある者は背中を向けたまま。ある者は視線を逸らして。ある者は口を開いたまま。

私を含む、この場にいる全員が冷や汗を搔いている。そう思つていただけど、視線を逸らしていた私は、視界の片隅でただ一人、冷や汗は垂らしていないのに冷たい目をしている人物が気になつていた。その子は頬に手を当て、なにやら真剣な表情で考えこむような仕草をしている。

〔問〕。巖島の戦いで毛利元就が破つた武将を答えよ

問題を出してきたけど、分かるはずもない。なんたつて、私はテストをどこにやつたのかさえ覚えていないんだから。……あれ？ ホントにどこやつたつけ。テストの答えあわせをして、合計百点を告げられて、みんなで逃げて……それっきり見てないような？

膠着状態のままかと思われた状況で動いた人物が一人だけいた。五月ちゃんだ。

これはなんとかしてくれるかも！ そう期待したけど、すぐに涙目で頬を膨らませて、プルプルと震えるだけに終わつた。

五月ちゃんで無理なら、もう取れる選択肢なんて一つしかない。私達は踵を返して、何事もなかつたかのようにその場から立ち去つた――。

「やつぱり…」

——のだけれども、私達から少し離れた後方には、相変わらず優等生くんが付いて来ていた。まあ、同じ学年なのだから教室まで道のりも同じなだけで、好きで付いて来ているわけではないんだろう。……多分。

集団の先頭を歩く私は後ろの様子を窺う。ブツブツいいながらノートと私達を交互に睨めっこしているのが一名。どう見ても怪しい人にしか見えない。もしかして、昨日の私と三玖もこんな感じに見えていたのだろうか。うん、しばらく尾行は控えることにしよう。「あんな奴、視界に入れないほうがいいわよ」

私のすぐ斜め後ろにいた二乃が忠告してくる。でも、私が本当に様子を見たかったのは二乃のことだつた。理由は、さつき学校の前で固まつた時、真剣な表情をしていたのがこの子だつたから。

「……私の顔に何か付いてる？」

いけない。二乃ばかりをジロジロ見すぎた。ここは下手に誤魔化すより、ストレートに聞こう。

「さつき凄く真剣な表情してなかつた？それが気になつてて」「ハア？ なにそれ、そんな表情した覚えない」

少しへきになつてるというか、イラついた返事ではあつたものの、嘘をついているようには見えなかつた。

「うーん。なら、やつぱり気のせいだつたのかな。……ただ」「ただ？」

「似ていたんだ。七海の表情に」

そう、私が秘密を知つた、あの日の表情に。

「あ、上杉さんだ」

お昼休み。食堂で妹達と一緒に食事を取つていた。

「私、行つてくる！」

飛び出していつた四葉の向かう先には、唯一まだ集まつていなかつた三玖の姿も見えた。

「近くに三玖もいるし、私も行つてくるかな」

視線で七海がお願ひしますと語りかけてきた。ワインクで返す。  
お姉さんに任せなさい。

「上杉さん！お昼、一緒に食べませんか？」

「うおっ」

意外にも四葉が話しかける前に、私は追いついていた。何故かとい  
うと、彼を驚かそうとでもしていたのか、すぐに話かけることはせず  
にチャンスを窺つていたからだ。

「なんだ四葉か。お前はいつも突然なんだよ」

「あはは。朝は逃げちゃつてすみません！」

すぐ傍には三玖もいる。どうやら二人で何かを話している最中に、  
四葉が入つていったみたい。

「それで三玖——」

「——これ見てください、英語の宿題」

「さつきの話——」

「——全部間違えました。あはははは！」

「……」

一体どこに隠していたのか、いつの間にか手に持つていた紙を見せ  
びらかす四葉は、会話の仕方が強引すぎるようを感じる。それだけ彼  
のことを感じに入っているということかな。だとすれば、どこをそんな  
に気に入ってるんだろう。この時の私には、到底解りそうにない疑問  
だつた。

何にせよ、今は会話を邪魔されて睨み付けてくる視線をなんとかし  
なければ。

「ごめんねー。邪魔しちゃつて」

四葉をわき腹を捕まえて、回れ右をさせる。今は、ここから離れた  
ほうがよさそうだ。……何かを忘れているような気がするけど……  
まつ、いつか。

「一花も見てもらおうよ」

会話の流れ的に勉強のことだろう。

「うーん、バスかな」

だつて。

「私たち、ほら、バカだし、ね？」

やんわりとお断りを入れるようすに笑顔で振り返つて言うと、何故か彼の顔が少し強張る。

「だからってなあ…」

それも一瞬のこととすくに呆れ顔に変わった。

「それにさ、高校生活、勉強だけってどうなの？もつとエンジョイしようよ」

そう。

「恋とか！」

「！」

私が言い放つたその瞬間、空気がガラリと変わる。

「恋？」

その異常に気づいた私は、男女の恋仲を表すように手と手を合わせていたまま固まつた。

「アレは学業からかけ離れた最も愚かな行為だ。：したい奴はすればいい。だが、そいつの人生のピークは学生時代となるだろう」

「この拗らせ方、手遅れだわ…！」

優等生くんになるまで、色々なものを犠牲にしてきたんだね。

「あはは…。恋愛したくても、相手がないんですけどね」

そうなんだよね。七海が男の子なら、こんな悩みもなくなるのに。……家族だからアウトみたいな指摘は受け付けていません。

「三玖はどう？」

四葉は私のリアクションを見て、こつちのことはスルー。唯一望みがありそうと睨んだ三玖に問いかける。

「好きな男子とかできた？」

「えつ」

おつ、この反応は！

「い、いないよ！」

ダッシュで逃げていく三玖を見届けた後、私と四葉は顔を見合わせる。

「？急にどうしたんだ…」

やはり、勉強に頭が支配されてしまった優等生くんには分からなか。

「あの表情、姉妹の私にはわかります。三玖は、恋をしています」

「…」

『キャー』

盛り上がる私と四葉に対して、冷や汗を垂らしている拗らせくん。彼にはまだ早い話だつたか。

「あれ、行っちゃうんですか？一緒にご飯食べましようよー」

四葉の声など聞こえていないのか、その場から去つていつてしまふ。

「今日は気分じやないんだと思うよ。また今度誘えばいいでしょ」

私の言葉に、四葉は一瞬残念な仕草を見せたけど、すぐに頷いてくれる。

「いけない、みんなが待つてる！戻らないと」

私も領き返して元の席に戻ると、七海が呆れた目をして待つていた。

「あの、三玖姉は……？」

『あ』

私たち、ほら、バカだし、ね？……はい、今すぐ三玖を呼んできます。

放課後は私も七海も仕事が入つていたので、二人つきりになるチャンスはなかった。なので帰つてきた後、七海の部屋をノックしてみたけど、何の反応も返つてこない。

こうなつたら、メールで明日の放課後を予約するかな——。

「一花」

——みたいなプランを、七海の部屋の前で練つていた私に声を掛けてきた人物は、同じく七海に聞き出したいことがあるそう。本当は私は一人で聞き出すつもりだったけど、一人じや問い合わせても躊躇そう

だし、一人ぐらい仲間がいたほうがいいかと思つて、彼女の出してきた提案に乗つた。

「それじゃ、明日はよろしく」

「うん。任せて」

翌日の火曜日。晴れてこそいるが、やたらと風が強い。登校中はスカートを抑えるのに苦労したし、昨日組むことを決めた彼女は、髪が凄く乱れていて私以上に大変そうだった。

そんな荒れそうな日でも、いつも通り行われる眠くなる授業を終えて、やつときた放課後。私は、駆け足で階段を上がつていた。ショートホームルームがショートというには無理があるほどに長引いたせいだ。

向かう先の屋上では、組んだ彼女と呼び出してもらつた七海が待つているはず。

一步、また一步と階段を上つていくたび、外で風が吹く音が大きくなる。後にして思えば、それは屋上にいた二人の口論が、荒れに荒れてることを表していたのかもしれない。でも、この時の私は、そんなことを察せられるわけもなく、軽い足取りで屋上のドア前までに辿り着いて、自室に入る時と同じようにドアノブへと手をかけた。

「ごめん、遅れちゃつた。待たせた？」

勢いよくドアを開けた瞬間、予想していた強風が襲い掛かつてきた。でも、それは予想以上のもので、体が倒れそうになる程とはいからずとも、教室より広い屋上の真ん中で何かを話していた二人には、風切り音が邪魔して声が届かなかつた。

「……すか？……なら……しよう？」

「……ダメ……たら……るの？」

当然、こつちの声が届かなければ、あちらの話している内容も聞き取れない。そう思つていたけど、向こうはなにやら話がヒートアップしているのか、声が大きくて僅かに聞き取れた。

詳細は分からぬけど、七海が口喧嘩なんて珍しい……どころか初めてのようだ。

何にせよ、近づかないと私の存在に気づいてもらえそうにない。向

かい風に負けないように踏ん張りながら近づいて、組んだ彼女——二乃の肩に手をかける。

「きゃあ！」

「つ！」

やつぱり、私のことには気づいていなかつたようで、不意打ちのような形になつて驚かせてしまつた。それは七海も同じかと思つたけど、すぐに違うことがわかる。

「ちよつと、七海!?」

二乃が驚いたせいで手に持つていた紙束を放してしまい、それが風に煽られて宙に舞つたからだ。

「え？」

そのまま空の彼方に飛んでいくかと思われた紙たちは、七海が驚くほどに早い動きで回収していく。

一枚、また一枚。私がリアクションした直後には、四枚を回収し終えていた。だけど、残る一枚は胸の高さ程ある落下防止用の壁へと、風に叩きつけられるようにして引っかかっている。それも、今にも再び舞い上がりそうなギリギリの位置に。

「え、ちよつと!? 危ないよ……」

そんな私の忠告が言い終わる頃には、七海はダツシユで壁の前まで辿り着いていた。でも、すでに紙は屋上の外に吹き飛ばされていた。  
「ちよつ、嘘でしょ?!」

隣の二乃が驚く。そりやそうだ、七海は何の躊躇もなく、ダツシユした勢いを落とさずに壁を乗り越えて——。

『七海！』

——跳んだのだから。

私と二乃の悲鳴にも似た叫びが響き渡る。当然、それによつて時が止まるわけでも、夢から覚めるわけでもなく、だけどゆつくりに感じるこの空間の中で私達は、顔を青ざめながら目を見開いていた。

届くはずがない手を伸ばす。間に合うはずのない足を動かす。想像したくもない光景が見えてしまう……！

私達の伸ばした手は届かなかつた。しかし、七海の伸ばした手は紙

へと届いた。その後、七海が優しい声音で何かを呟いた気がした。

一  
・  
・  
・  
つ  
た

どうして？どうして、そんなに安心したみたいな声なの？今から落ちちゃうのに。落ちたら凄く痛くて、死んじやうかもしないんだよ？せっかく再会できたのに、また、居なくなっちゃうの？また、失うの？また、あの時の感情を私は……！

嫌あああ！

それは私と二刀とどちらか発したものだつたか、後になつても思い出せなかつたその叫びは、スローに感じていた現実が突如加速するト リガーになつた。次の瞬間、七海の姿は見えなくなる。それでも私の足は止まらない。

。 一 沢 に し い て は ま た 一 沢 に し い て は ま た

——ようしたら、悲痛な叫びと共に私の動きは止まつた。

二二

振り返れば、顔は青ざめたまま、涙を流して、体を震わした二乃が私の体に抱き着いていた。その腕には、ありつたけの力が込められてるようだ。

—お願い  
—花まで居なくならないで……

その言葉を聞いて、壁にかけていた手を放した。二乃のお願いを叶えようとしたからではない。ただ、私は怖くなつただけ。この壁を越えた先、下にある光景を見るのが。

地面にへたり込んだ私から離れて、二乃が様子を確認しにいく。それを受け、ぼーっとしながら眺めていた。

ふわふわとした現実味のない感覚に包まれながらも、痛いほど鼓動が早くなっている心臓を今更自覚し、これは現実なんだと訴えかけてくる。その鼓動は二乃の動きに合わせて、更に加速していく。

[ ... ]

もう、心臓が張り裂けるんじやないかと思つたタイミングで、つい

に二乃が下を覗いた。けれど、だんまりを決め込むせいで、何も分からぬ。

「な、七海は……」

「……え？」

痺れを切らして、自分のとは思えないぐらいに掠れた声で聞いてみたものの、返ってきたのは疑問の声だけ。

「七海はっ！七海は無事なの?!」

自分で見に行こうともしない人が、何を叫んでいるの。

そんなことよりも、七海がどうなったかを早く教えて。

場違いなことを考える冷たい私と、身を焦がされるかのように熱くなっている私。別々の私が、心の中で渦を巻くかのごとく存在しているようだつた。

「い、いないの。居ないのよ……どこにも。というか——」

「——居ないつて一体どういうこと?!」

『居ない』というワードがトリガーにでもなつたのか、やつとのことで私の体は動いた。

二乃の隣まで行き、壁に手をついて同じように下を覗く。

「……え？」

そうして搾り出されたりアクションは、二乃と全く同じものだつた。

「何やつてるんですか？二人とも」

『え？』

後ろから声がして振り返る。そこに居たのは——。

『七海！』

——落ちたはずの愛おしい妹だつた。

「そんな幽霊でも見たような顔つぶ！」

横にいたはずの二乃が、いつの間にか七海の元に駆け寄つて抱きしめていた。

「よかつた！よかつた！よかつた……！」

二乃の心からの叫びを耳にしながら、私はぼーっとしたまま突つ立つていることしかできない。

「むーー！むーー！」

頭を抱きこむような形で捕まつてゐる七海は、二乃の背中を何度もタップしていた。いけない、このままじゃ今度こそ本当に七海が逝ってしまう。

「二乃。離さないとやばいかも」

「え」

私の指摘でようやく開放された七海。

「ふはあっ！……抱きしめるなら、もう少し私が苦しまない形でやつてくれませんか？」

「それなら、私たちのことも心配させないで欲しいんだけど？」

笑顔なはずだけど、なんだか怖く感じる。そんな攻撃的な笑顔とも言える表情で七海の肩を掴んだ二乃。

「……そういうえば、二乃姉達は最近転校してきましたばかりでしたね。なら、心配をかけたのにも納得です」

七海の言つていることは、さつき見た屋上の外。その下を覗かなければ何のことかと疑問に思つていただろう。

「まさか、七海が跳んだところにも屋上があるなんてね」

そう、二乃の言うとおり、もう一つの屋上があつたのだ。私達が今立つてゐる屋上の外周、その一階下の高さに。

「屋上でも間違つてはいませんが、ルーフバルコニーですね。正確には」

注釈と同時に横へと視線を逸らす七海。

「あそこに階段があるので、気付かなかつたんですか？」

言われた通り、ここからルーフバルコニーへと続く階段が確かにあつた。あそこから七海は戻つてきたのだろう。

「あはは、さつきは必死だつたから、気付かなかつたよ」

ジト目で指摘する七海に押されて思わず謝つてしまつた私に対して、二乃の反応は真逆そ�だ。

「うん、気付かなかつた。誰かさんがあんな紙切れの為に身を投げ出すなんて、思つてもいなかつたもの」

やつぱり怒つてますね、これは。

助け船は出せそうにない。というか、私も怒りたくなってきた。  
「……取り敢えず、ここは風が強くて話すのに向きません。場所を変  
えませんか？」

あ、隙を見て逃げる気だ。

「そうね。話しあは家でじっくり……ね？」一花

呼ばれて七海の脇に立つ。

「あの……これは？」

『逃げないように捕まえたの』

私は右腕、二乃是左腕、一人で分担して両腕をがっしりホールド。

「これじゃあ、歩きにくいくらいですが？」

『…………』

「オーケー。行きましょう」

無言の圧力に屈したのか、すぐに歩きだした七海。それに合わせて、私達は縋りつくような形で動く。

「あの、扉を開けられないで、どちらか開けてもらえます？」

二乃が空いている左手で屋上のドアノブに手をかける。

「な、なにこれ。開かないじゃない」

ガシャガシャとドアを無理に開けようとする音と、断続的にくる風切り音だけが、この場に響いていた。

「どうやら鍵を閉められてしまったようですね。屋上を確認せずに閉めるなんて、教員の誰かが生徒に頼んだのかもしれません」

これだけ風が強ければ、屋上を立ち入り禁止にするのも無理ないか。

「ルーフバルコニーの方にも扉がありますし、そちらも確認しましょ  
う」

一人では行かせまいと、腕に籠める力を強くしてみんなで向かう。  
「こつちもダメみたい。もしかしながら私たち、閉じ込められ  
ちゃった……？」

今度は私が確認したけど、結果は同じ。

「屋上に閉じ込められるという表現は、果たして適切なんでしょうか  
ねえ……」

焦り始めた私と二乃に対して、七海は暢気な発言をして余裕がある。そうだ。風は更に勢いを増していくつていうのに。

「なんで七海はそんなに落ち着いてるわけ？」

私の気持ちを代弁するかのように、二乃が聞いてくれた。

「まあ、今ここは風を凌げますし、この扉も開けようと思えばいつでも開けられますので」

『え？』

風向きの関係で、今いるルーフバルコニーなら風に曝されなくて済むのはわかる。でも、扉を開けられるって一体……？

「そして、ここから脱出するには私の腕を自由にしてもらう必要があるんですが……」

『……逃げない？』

「家で話をするなら逃げようがないと思いますよ。いつかは帰らなきやいけないんですね」

『に・げ・な・い？』

『……逃げませんよ』

観念したように言う七海。でも今は信用していいものか、一人では決められなかつたので二乃とアイコンタクトを交わす。数回の瞬きの後、作戦を決行した。

『更に歩きにくくなつたんですけど？』

『いいから扉を開けて』

七海が言つたのは腕を自由にしろということだつたから、お腹に縋り付くことにした。

体勢の関係で顔をうずめるような形になつてしまつたので、七海の匂いがよくわかる。女の子といえば甘い匂い。そんなイメージとは違つた、爽やかな香りが鼻をくすぐる。

「乃姉がちょうど掴まつてる部分の内ポケットに、ツールボックスが入つてるので放して欲しいのですが。片方掴まつてれば十分でしょう？」

「確かになんか硬いのがあるわね。私が取るから七海は動かないこと

と

「はいはい」

七海のワイシャツが捲<sup>めく</sup>られる。引き締まつて健康的なお腹が晒された。

「手が冷たいです。というか、内ポケットはワイシャツにあるので下のシャツまで捲らないでください」

「……うん、わかつた」

「全然わかつてないじやありませんか！ 弄<sup>まさぐ</sup>らないでください！」

まつたく、二乃は何をやつているんだか。ここは、一花お姉さんに任せてみなさい。

「一花姉まで捲らないで！ しかも顔を突っ込もうとするなんて、変態みたいですよ！」

「いやあ、七海からいい香りがするからもつと嗅いでおこうと思つて。ところで今の変態つて部分、リピートしてもらつても？」

「本当に変態じやないですか！」

「あんたら何やつてんの。もう取つたわよ」

「元はと言えば二乃姉が……ああ、もういいです」

元はと言えば七海が心配をかけるからいけないんだ。

「それでどうやつて開けるの？」

「この箱には色々便利グッズが入つてるので、それを用いてね」「ふーん、ピッキングツールでも入つてるわけ？」

「ええ、他にも手縫い針や糸とか。今扉を開けるので少しお待ちを」力チヤカチヤと音が鳴るかとも思つたけど、意外なことに静かに作業は始まつた。その間、暇なので私と二乃交互に質問をして時間を潰すことにした。

「そういうのつて、どこで手に入れてくるの？」

「基本的に色んな店を渡り歩いてですね。ジャンク品などの安い物ばかりなので、自分用に使いやすく改良しています」

「改良つて、一体どうやつて？」

「熱<sup>ねつ</sup>して変形させたり、他の物と組み合わせるのが主ですね」「熱してつて、鍛冶屋さんみたいに？危なくない？」

「鍛冶屋さんつて……ふふ、一花姉は赤く変色するほどに熱した金

属を叩く、みたいなのを想像していませんか？そんな派手なものじゃありませんよ。小さなパーツをアルコールランプとかで軟らかくて変形させるんです」

ほへえ、本格的ですな。

「開きました。お先にどうぞ……はいはい、一緒にね」

なんだかやたらと長く居た気がする屋上ともおさらば。実際は数分しか居なかつたんだけどね。

「閉めるのでまたお待ちを」

開いた時と違つて、閉めるのは一瞬だつた。

「後は紙を——付箋でいいか

眩いた通り、七海は取り出した付箋に素早く何かを書いてドアノブ近くに貼り付けた。

「何々……？『鍵を閉めるときは、屋上に人がいないか確認を！』って……」

七海らしい、気遣いのある対応だ。私達が取り残されたことを先生に報告したら、閉めた誰かが怒られちゃう。それを回避しつつ、注意書きを書くことによつて同じ失敗が繰り返されないように配慮した行動。単純に自分で報告したら、どうやつて出たのかを訊かれて困るつていうのも理由の一つなんだろうけどね。

「もう一つの出入り口のほうに寄つても？」

「う、うん」

再び一人で七海の両脇に位置取つて、腕を捕まえながら歩き出す。

「ホントに七海は気遣い上手ね。……あいつに協力するのも、ただの気遣い？」

「あいつ？」

何の話だろう。

「上杉先輩のことです」

「優等生くんのこと？」

「さつき必死に拾つてた紙切れも、あいつの作ったテストだつたつてわけ」

「テストつてこの前の？」

「ええ、これ要ります？皺だらけになっちゃいましたが」

手渡された紙は、確かにこの前やつた私のテストだ。でも、最後に見たときは採点までしかされていなかつたはずなのに、今は問題の解説などが書き足されていた。

「さつきのケンカ？もこれが原因？」

「ケンカ……？そつか私、喧嘩したんだ……」

「……七海、あんたケンカして笑うなんて、やつぱりどこか打つたんじゃないでしょうか？」

二乃の心配を余所に、七海は微笑むばかりで何の返事もしない。

「ほら、七海だつてケンカの一度ぐらいしてみたかったんじゃない？私たちも昔はよくケンカしたしさ」

「それは……まあ、そうね」

最も、昔私達がしていたケンカは言い争いを通りすゞして物理がまかり通っていたような気もする。

何にせよ、うまくフォローできたみたいで何より。私はひつそりと息を吐いた。

もう一つの出入り口にも、何事もなく付箋を貼り終えて帰路につく。

道中、色んな生徒や通行人が私達に注目していた。両手に花状態なんだから、それも仕方ないことか。花を持っている本人も女の子だけど。

「それで、何を話すつて言うんですか？」

ラブラブカップルにも負けないぐらいの密着度で家まで帰つてきた私達は、屋上での話の続きをしようと七海の部屋にお邪魔していくた。

「それは……あいつに協力するような真似をやめろつて話よ」

「そもそも、私は上杉先輩に協力しているんでしょうか？」

「は？」

「偶々リビングに置いてあつたテストを見つけて、自分の勉強も兼ねて注釈を書き加えただけですよ。勝手にいじつたことは反省しなければなりませんね。ごめんなさい」

「ふざけないで、五人分もいじつたっていうの？同じ問題なのに」  
「……意外にしつかりと目を通してますね。筆跡も真似ていたはずなんですが、どうやって気づいたんですか？」

「勝手なイメージだけど、あんなカラフルにペンを使い分けるようなタイプじゃないでしょ。あいつは」

「なるほど、今後の参考にします」

なんだか私一人が蚊帳の外で、会話に入る隙間なんてなさそうだ。

「認めたってことでいいのね？」

「ええ。二乃姉達と同じ学校に通い、同学年の成績最優秀者。家庭教師の人選としては申し分ない相手なはずです」

七海の眼には、強い意志を感じる。

「とはいって、五人分を一人で受けもつのは大変だと思うので、協力は惜しまない考えです」

「……これ以上何を言つてもムダそうね。もういい、なら私にも考えがあるから」

そういう残して出て行つてしまつた二乃。私と二乃是元々、七海と一対一じゃ言いくるめられそうだつたから、加勢しあおうつて狙いで組んだわけなんだけど、話し合いに割つて入ることすらできなかつた。これでは私の味方をしてほしい、なんて理由で引き止められるはずもない。

「会話に入つてこなかつたところを見るに、一花姉の用件は違うようですね」

「うん、一昨日のことなんだけど……」

勿論聞き出すのは、あのワイルドな男性との関係性だ。

「昨日？ああ、大人の男性と一緒にいるところを見かけでもしましたか？」

「う、うん。あの人との関係は？危ないこと手を出してない？」

「あの人は、上杉先輩のお父上ですよ」

「えっ！……でも、確かに面影があつたような」

驚く私をよそに、七海の話は進んでいく。

「そもそも、なんで上杉先輩に家庭教師の話が回ってきたのか不思議に思つていました」

「た、たしかに。同じ学校に通う生徒が家庭教師なんて普通はないよね」

「そして、その答えはパパの旧知の仲である上杉先輩のお父上が知つていそうだったので、お話を伺つていたというわけです。色々と面白い話が訊けて、私としては満足でしたね」

「お父さんの知り合いかあ」

「まあ、そんなわけで危険性のあることには関わつていませんよ。納得していただけましたか?」

意外にも素直に白状してくれて助かつた。私一人じや、誤魔化されたら追求できそうになかったから。

「うん、安心した。でも、面白い話つて気になるなあ」

「それは……本人達のプライバシーの為にも私の胸に納めるつもりなので話せません。ごめんなさい」

謝つてはいるけど、柔らかい笑顔は隠せていなかつた。

「お話はこれで終わりですか?」

「あつ!他にもあつた」

パパ活の疑いが晴れたらもう一つの疑問がおのずと浮かんでくる。「四葉に聞いたんだけど、気になつてている人つていうのは?一花お姉さんに話してみなさい」

「構いませんよ」

「えつ、本当!?一体——」

「——ただし、一花姉も教えてくれるならですが

「え、」

それは、ちよつと恥ずかしいような……?でも、今気になる人はいないんだし、素直にいないと答えるれば教えてくれるかな?

「勿論、今いないというのならこの先できたら、真っ先に私に教えてもらいます」

「う、うん。やめておくね」

やつぱり、私一人じや七海からあれこれ聞き出すのには無理があつ

た。危険なことに関わっていないと収穫があつただけマシか。

「さて、そろそろ夕食を用意しなければなりません。話はここで終わりにしましょう」

本当は二乃と話していたことも追求したかったけど、返事も待たず  
に部屋を出て行ってしまう。一人残された私は周囲を見渡した。  
「…………」

私のと比べては失礼になるけど、綺麗に整頓されている部屋だ。床も  
机も……ベッドも。

「ダーライブ……なんて」

気の迷い。魔が差した。表現なんてなんでもいいけど、とにかく私は  
は屋上で嗅いだ七海の香りが忘れられなくて一番匂いのついてそう  
なベッド目掛けてダイブしたのだ。

なんとなく、そんなんとなく枕に顔をうずめる。屋上でも嗅いだ爽  
やかな香り。それとは別に、微かだが甘い香りがした。これが七海本  
来の匂いだろうか。

甘くて、どこか暖かい。この香りを私は知っている。昔何度も嗅い  
だ匂いだから。

意味もなく足をバタバタと動かす。このまま寝ちゃいけないと分  
かっていても、一度閉じた目を開くのは億劫だつた。

まどろみに包まれながら私は……。

「ごめんなさい」

夢を見ている。

「ごめんなさい」

繰り返される謝罪の言葉。それを受けて私たち五つ子は、立ち尽く  
すばかりで何も返すことができなかつた。

「ごめんなさい」

見ているだけでも痛々しい痩せこけた体。額を床に擦り付けなが  
ら強く握られた拳を見て、謝罪を繰り返すこの子——七海が必死に  
謝つてしていることがよくわかる。

「二人で帰れなくて……『ごめんなさい』

とても言い表せそうにない強い感情の波が襲ってきて、私の目から涙が溢れ出した。それは、みんなも同じだつたと思う。

「『ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい』」

握られた拳か俯いた口からか、床に滴つた血が少しづつ私たちの元へと流れてきていた。それでも謝罪は止まることはない。

何故この夢を見ているか、それはわかっている。屋上での出来事が原因だ。

今日の私は、この夢の——過去の私となにも変わつていなかつた。大切なはずなのに、満足に抱きしめてあげることもできない。何も出来ずにただ見つめているだけ。

「『ごめんなさい』——

「——七海！」

『お母さん!?』

永遠続いてしまうんじゃないか。そんなことを思つてしまふ空間を壊したのは、今は亡き母だつた。

「お母さん、今は安静にしてなくちゃいけないんじや」

代表して私が聞いたけど、取り合つてはくれなかつた。

「あ、あ、あの私——

「——ありがとう」

「つー！」

お母さんは床の血を気にすることもなく七海に近づいて、顔を上げさせてから抱きしめた。

「生きていてくれて、ありがとう」

お母さんのその言葉を皮切りに、嗚咽が漏れる。それは私達五つ子のものもあり、お母さんのものもあり、七海のものでもあつた。場面が切り替わる。

「急づけ！急づけ！」

エレベーターを待つこともできず、階段を駆け上がる私がいた。七海のお見舞いに向かうためだ。

肉体的にも精神的にも状態がひどかつた七海は、私達と再会しても

すぐ一緒に暮らすことはできなかつた。なのでこの頃の私達は、お見舞いが許可されている日は必ずと言つていいほど病院へと足を運んでいた。

七海のことが心配だつたのも理由の一つだつたけど、それ以上にこの頃にはもう亡くなつていたお母さんに、七海のことを持されたという部分が何よりも大きかつた。

「ふう、到着。七海、喜んでくれるかなあ」

階段を上り終えた私は、手に持つたプレゼントを両手で抱きしめて病室へと向かう。別に何か特別な日というわけでもなかつたんだけど、この日は私以外のみんなそれぞれに事情があつて遅れるとのことだつたので、私が一番に七海の笑顔を見るんだ。そんなことを考えながら目的地の前にたどり着いた。

「あれ、ちょっと開いてる……。七海ー？ いる——」

「——ごめんなさい」

開きかけのスライドドアに触れたところで、中から漏れてきた声にビックリして心臓が跳ねる。

「全部、私が悪いの」

七海はベッドの上で眠つていた。どうやら寝言らしい。

「私のせいで死んじやつた」

悪夢でも見ているのだろうか、その目からは涙が流れていった。

「お母さんも——」

そんなことないよ。そう語りかけて、夢の中の七海を安心させてあげようとしたとき、続く言葉を聞いた私は目を見開いた。

七海の姿は見当たらぬ。私の部屋で寝てゐるのかな。

「五時……か」

「……あー、寝ちやつたのかあ」

起きて周りを見渡せば、すぐに状況が理解できた。

「七海には悪いことしちやつたな」

七海の姿は見当たらぬ。私の部屋で寝てゐるのかな。

「五時……か」

一体私は何時間寝ていたんだろうか。普段なら二度寝するシチユ

エーションなんだけど、七海のベッドでは申しぐれなく思つてやめる。

「少し走つてきますかあ」

昨日の夕食を取つていなかつたけど、今は氣分じやない。日課を済ませてからシャワーを浴びようと決める。

音を立てないように、ゆっくりとドアを開ける。忍び足で中に入つて適当に落ちている服を拾おうと、手を伸ばしたところで違和感に気づいた。

「あ、あれ？ 七海いないの？」

ベッドに人がいなかつたのだ。しかも――。

「一体どこで寝たんだろう……」

——掛け布団もシーツも乱れたままだつた。他人のベッドを使って、七海がこんな状態で放置しておくはずがない。まず間違いなく、最後に私が使つた後そのままだ。

「まさか、変などこで寝たんじや」

リビングにあるソファーなら寝ることはできるけど、それでは体のどこかを痛めてしまつてもおかしくない。

適当に拾つた服に着替え、風呂場を確認するけど誰もいない。残るは他の家族の部屋だけど、今の時間じや確認するわけにもいかなかつた。

まあ、後で聞けばいいか。そう考えてジョギングをするために家を出る。

エレベーターで地上まで降りた私に朝日が浴びせられる。正直なところ、今の気分はあまりいいとは言えなかつたから、この光は無理やりにでも気分を上げるのに役立つそうだ。

少しでも長く朝日を浴びていたくて、いつものコースから外れて寄り道することにした。

朝早い時間だからか、休日の時と違つてペットの散歩をする人は見当たらない。代わりに私と同じで走ることが目的な人とはボチボチすれ違う。

そうして何人目とすれ違つた時だつただろうか、前から猛スピード

で近づいてくる人を捉えた。

ジョギングをしているだけの私と比べるまでもなく、歩幅からして全然違う。フォームも陸上をやっている人みたいに綺麗で乱れがない。

邪魔になるかと思つて道を譲るように端に寄る。日課をこなして、気分をリフレッシュさせたい程度の気持ちで走つている私と違つて、あの人は必死に走つているように感じたからだ。

何回かチラ見して容姿を確認する。フードとサングラスを被つていて顔は見えない。でも、身長も胸も私と同じぐらいだから、年の近い女の子だと思う。もしかすると、同じ学校に通う子かもしれない。

なんてぼんやりと考えているうちに、あつという間に訪れたすれ違ひの瞬間、覚えのある香りが鼻についた。

「えつ、もしかして七海？」

あれだけ七海の匂いに包まれながら夜を過ごしたんだ、見間違う——じやなくて嗅ぎ間違うはずもない。

「はつ、はや……」

速い速いとは思つていたけど、近くを通り過ぎると想像以上だった。速すぎて私の呼びかけにも気づいてもらえなかつたみたい。

振り返つてみると、どんどん七海と思われる人の姿は小さくなつていく。とてもじゃないが、今から追いかけようとは思えなかつた。

まあ、今呼び止めなくとも後で話を聞けばいい。家にいたときと同じ結論を出して、いつの間にか止まつていた足を再び動か——。

「あのー、お話を伺つてもよろしいでしょうか？」

「はい？」

——そうとして、呼び止められた。

この時、私が足を動かしていれば未来は変わつたのかな……。

結局家に帰つてきたとき、七海の姿はなかつた。今日も早々に家を出てしまつたみたい。……すぐ今更だけど、もしかして私つて避け

られてる？

「はあ……」

お日様浴びて気分アゲアゲ、シャワーでリフレッシュ、共に試しても効果は薄かつた。みんなで一緒にという気分でもなくて、私にしては珍しく一人で登校することに。

下を向いて、トボトボと通学路を歩きながら、考えるのは七海のこと。

私が——私達五つ子が七海に対して過保護気味なのには、ちゃんとした理由がある。それを思い起こす為に、過去を振り返つていくことにしよう。

昔、私達家族は母子家庭だつた。しかも子だくさんだつたから、貧乏ここに極まりな暮らし。だけど、毎日が賑やかで輝いていたことを覚えている。

そんな私達が幼い頃に、妹が行方不明になつたことがそもそも始まり。そのときの行方不明者というのが七海とその双子の姉、六海の二人。この事件が起きたとき、最後に六海と七海の手を握つていたのが四葉だつた。当時——いや、今でも四葉はこの時に責任を感じているに違いない。

行方不明になつた二人の搜索は長期に渡つて行われたけど、様々な臆測や情報が飛び交うなかだつたからか、事態が進展することはなかつた。

やがて搜索の規模は縮小していく、それに伴つて私の記憶からも世間の記憶からも二人のことが薄れかけていた頃、唐突に七海が保護されたという情報が流れてきた。遠い異国の地で……。

日本に帰つてきた七海に、私達は急いで会いにいった。今のお父さんが用意してくれたりムジンに乗りながら、最初はなんて言葉をかけようか。そんなことを考えていた記憶がある。今までどこに行つていたの？とか、どうして居なくなつたの？とか、予定していたのはそんな感じの言葉だつただろうか。だけどそれに意味なんてなかつた。何一つ言葉になんてできやしなかつたんだから。その理由は——。

「あの時、どうしたらよかつたんだろう」

——六海が亡くなつたと聞いて、頭が真っ白になつたからだつた。

この時のエピソードが今日見た夢の——過去の出来事。

その後、お母さんが亡くなつてしまい、再婚していた今のお父さんとの父子家庭に。この頃から似たり寄つたりの姿勢をしていた私達五つ子は、それぞれの個性ができるようになつていて。でも、変化したのは外面だけじゃなく内面もだつた。

年齢のことを考えれば、変化が訪れるのに不思議はない。だけど、そんな私達の中でも大きな……を通り越して異常とも言える変化をした子がいた。

それが四葉と五月ちゃんだ。

四葉は、七海に対する距離が非常に近くなつた。でも程度の違いこそあれど、これは私達五つ子全員に言えることだ。四葉が責任を強く感じているのを加味すれば、それも仕方がないことだと思う。

五月ちゃんのほうは、お母さんの真似をするようになつた。姿、言動、その他とにかく様々なところを。その様子は、傍から見るだけでもつらいものがあつたけど、色々な出来事が重なつて余裕のなかつた当時の私に、五月ちゃんのことを気遣うのは難しかつた。……これはただの言い訳でしかないか。

そして、実はもう一人ある日を境に異常に変わつた子がいた。

「……ん？」

考えごとを中断する。学校が見えてきたあたりで、私と同じように登校している周りの生徒達が、ざわついていることに気がついたからだ。

「なにあれ……」

顔を上げてみると本がいた。正確にいうなら、本を高くまで積み上げて持つ人だ。しかも、高すぎて顔が見えない。さつきまで下を向きながら歩いていた私が言えることじやないけど、あの人、前見えてるのかな？

「つて危ない！」

本が傾いたのを見て、急いで駆け寄る。

「せ、セーフ」

幸いにも崩れる前になんとか支えるのが間に合つた。

「その声は……一花か？悪い、助かつた」

なんと私の家庭教師でした。

「どうしたの？この本」

「図書室で借りたんだ。返そうと思つてな」

手で持つている分だけではなく、鞄がパンパンに膨らんでいる。中身は聞くまでもないだろう。

「半分持つてあげる。貸して？」

「あ、ああ。助かる」

ようやく顔が見えるようになった彼を横目に、残り少ない道のりを再び歩き出す。

「これ、全部歴史の本？勉強熱心ですか」

「まあ、そうだな……」

なんだかそつけない。出会つて少ししか経つてない間柄だけど、いつもはもう少し愛想がよかつた気がする。

とはいっても、それは今の私も似たようなものかもしれない。こちらから積極的に話しかける氣にもなれず、しばらく沈黙が続いた。「悪いが、図書室まで付き合つてもらつてもいいか？」

下駄箱で靴を履き替えたところで確認してきた。いつもと違つて時間に余裕のある登校だったから、塞がつた両手の代わりに首でオッケーする。

「……なあ、お前は知つているのか？」

「んー？何を？」

図書室につくまで、また沈黙が続くかとも思つたけど、彼のほうから話題を振つてきた。気づけば周りに人がいない廊下までできている。愛想が普段より悪いと思っていたのも、話を切り出すタイミングを見計らつてたからそう見えたわけだ。

「あいつが……七海が病気だつて」

「うん、知つてるよ」

特にためることもなく、正直に答える。……ここまで。

「そうか、ならなんで——」

「——不眠症っていうのはね、あくまで症状なの」

「は……？ ああ、まあ不眠症だしな」

「そう、つまり原因は別にあるはず」

「……まさか、それが知りたいから教えてくれなんて言わないよな？」

「言わないよ。ちゃんと知ってる」

「そう、私は知っている。」

「で？ それが一体どうしたつて？」

「……情報交換しようよ。質問に一つ答えたら、今度は逆に質問する——みたいな感じで」

一人で見舞いにいったあの日、病室で私は聞いてしまった。知つてしまつた。あの子の秘密を。

「ああ、いいだろう」

三玖の言つてたような、二人だけの秘密というわけではない。私だけが知つていてるんだ。

「それで、どつちが先に質問するんだ？」

『私のせいで死んじやつた』

「さつきキミの質問に答えたでしょ。だから、今度は私からだよ』

『お母さんも——』

「ふつ、なんだつたら勉強のこと訊いてくれてもいいんだぞ』

『——七海も』

あの子のほとんどが偽りなんだつて。

「キミだよね』

知つている——私は知つているんだ。

だから、これは質問なんかじやない。ただの確認。

「七海と六海が——私たちの妹が誘拐されたとき、現場にいた目撃者つて』

本当に知らなくちやいけないことを、この時の私は何一つ知らない

まだつた。

それなら

風が強い。そして、目の前にいる二番の当たりも強かつた。

「答えて、七海」

「私の質問にも答えてください」

先程から似たような遣り取りを繰り返している。

会話が始まった時よりも風は強さを増していく……ああ、二番の下着が少し見えた。ふむ、チエリーピンクか。今後役に立つかは不明だが、しつかりと脳裏に焼き付けておこう。

「ちよつと、ちゃんと私の目を見て」

待つて、後少し、今吹いている風が止むまで。

「はいっ。見ました。ありがとうございます」

「なんでお礼……？」

別に布切れ一枚に強い拘りがあるわけではない。だけど、なんだか見ておかないと勿体無い気がしたのだ。

……少し脱線してしまった、話を戻そう。

どうしてこの人は、強風の日に屋上なんかを指定してきたのかが疑問だ。人が寄り付きにくいという条件なら満たされているが、話し合いをする場所としては相応しくない。だが、私はここから離れる提案をすることができなかつた。たつた一言を告げればいいだけなのに、どうしてそうしないのか。いくら考えても答えを導き出せないでいる。

「先に私の質問に答えて。本当は、あいつと話一つしてほしくないのよ」

『あいつ』というのは上杉先輩のことだ。一体何故、こんなにも嫌悪の感情が籠つた言葉が出てくるのだろうか。

二番の性格なら、単純に自身の家テリトリーに突如として踏み込んできた人間だから、毛嫌いに近い形の感情を持つている——そう考えるのが最も違和感がない。だが、決め付けるのは早計だ。私の知らない事情があつてもおかしくない。

「どうしてですか？先輩後輩の間柄なら、話をするぐらい普通のこと

でしょう?」

「ダメつたらダメ。あいつがオオカミにでもなつたらどうするの?」

「狼つて……」

狼に変身した上杉先輩を脳内で形<sup>イメージす</sup>を作る。……ふむ。あの枝分かれしたアホ毛と、密かに気に入っている彼の目が残っているというのなら、触れ合つ<sup>モフモフし</sup>てみたいという結論が出た。

「アリですね」

「アリ!」

あのアホ毛は、私にとつてスパゲッティ<sup>メジャーナースタ</sup>をフォークで巻くかのように弄るか、それともヘリコプター<sup>空中で静止できる航空機</sup>のプロペラみたいに高速回転させるのか、どちらかを選べと言われたら長考しても決められそうにない魔性の毛だ。五番のアホ毛と取り替えてもらえれば、毎日家で弄り放題なのだが……どこかにアホ毛の交換技術を有する職人はいないものか。「あんた、それマジで言つてる?」

「いえ、狼つて」

返答を中断する。鳴り響く風切り音の中で、微かだが人の足音を拾つたからだ。

「きゃあ!」

足音の主はすぐそこにいて、動作<sup>アクション</sup>を起こした。それによつて状況が動く。

「つ!」

足音に気づいていなかつた二番が肩に手を掛けられ、驚いた拍子に持つていた紙<sup>テスト</sup>を手放してしまつたのだ。

当然、強風の吹く屋上でそんなことをすれば、テストは宙に舞う。数は五枚。彼方へと消えてしまつ前に回収できるかは判らない。だが判断を下すよりも先に、私の体は動いていた。

テストが舞つた方向にいた二番の脇を最小限の動作で躱すように抜けて、散らばつてしまつた五枚のうち、一枚目を掴む。十二点、外れ。

次に近かつた一枚を一旦放置し、最も高く舞い上がつていた一枚を、跳躍して人差し指と中指の間で挟んだ。文字通り紙一重での

キヤツチだつたが、点数は二十。これも外れだ。

片足で着地して、空いた片足と腕を前へと伸ばす。三枚目も確保。三十二点、また外れ。

四枚目は、タイル スレスレ 際を滑るように動いていた為、ひざます 跪きつつ上から押さえつけた。八点、今度こそ当たり。ではあるが――。

「え、ちょっと!? 危ないよー！」

——狙うは大当たりだ。

パラペット 囲壁に風で押し付けられていた、最後の一枚目掛けて迷うことなく駆ける……が、この手が届く前に紙は宙に舞つた。

「ちよつ、嘘でしょ?!」

二番の驚きに満ちた声を背にしながら、勢いをそのままにパラペットを飛び越える。

『七海!』

当然、その先には飛ぶ前と同じ高度の床があるわけではないので、投げ出すように飛んだ我が身は、すぐにでも落下を始めるだろう。そうなる前に、私は五枚目を掴むことに成功した。

「よかつた」

姉達の中では、最も勉強に意欲があるのが五番だ。そんな彼女なら、このテストを有効活用してくれる可能性が高い——そう考えて、大当たりという表現を用いたのだった。

『落ちる』というより、私にとつては『引っ張られる』ような感覚を受けながら、着地の瞬間を待つ。

「つと」

難なく綺麗な着地に成功。無論、飛び降りたの先は地上の地面ではなく、一階分下にあつたルーフバルコニーだったからこそその着地だ。

これ以上、ここにいても良いことはないと判断して、バルコニーから屋上へと直接繋がつて いる階段を上る。

「なにやっているんですか? 二人とも」

『え?』

パラペットに手を掛けっていた姉二名は、私に呼ばれると目を見開きながらこちらを向いた。

「そんな幽霊でも見たような顔つぶ!？」

二番が唐突に突進してきたので当然のように避けようと試みたのだが、先程の着地で足を痛めてしまっていたのか、鋭い疼痛<sup>とうつう</sup>で動きが止まり捕まってしまう。

「よかつた！よかつた！よかつた……！」

全然よくない。胸で窒息しそうだ。

「むー！むー！」

私の意識が失われるまで、まだ少しの猶予はあるが早めに主張<sup>アピール</sup>しておぐ。

「二乃。離さないとやばいかも」

「え」

一番の呼び掛けで、ようやく開放された。

「ふはあつ！……抱きしめるなら、もう少し私が苦しまない形でやつてくれませんか？」

「それなら、私たちのことも心配させないで欲しいんだけど？」

おっと、これは形勢不利だ。話題を逸らすのが最適解<sup>ベスト</sup>か。

「……そういえば、二乃姉達は最近転校してきたばかりでしたね。なら、心配をかけたのにも納得です」

言外に心配かけてごめんなさいと込めてみたが、伝わったかは不明だ。

「まさか、七海が跳んだところにも屋上があるなんてね」

「屋上でも間違つてはいませんが、ルーフバルコニーですね。正確には」

大して意味のない注釈と共に視線を逸らすが、二番は態々私の視界に入るよう回り込んでくる。

「あそこ」に階段があるのに、気付かなかつたんですか？」

少し呆れるような声音で、流れをこちらに引き寄せようと試みるが……。

「あはは、さつきは必死だつたから、気付かなかつたよ」

「うん、気付かなかつた。誰かさんがあんな紙切れの為に身を投げ出すなんて、思つてもいなかつたもの」

一番はともかく、二番に効いた様子はない。苦し紛れの発言で引いてくれるような相手じゃないか。

「……取り敢えず、ここは風が強くて話すのに向きません。場所を変えませんか？」

ならば、ここは逃げに徹するとしよう。

「そうね。話しあいでじつくり……ね？」一花

呼びかけに反応して、一番もこちらに近づいてきた。

「あの……」これは？』

『逃げないように捕まえたの』

両腕に抱きつかれ、暑苦しくて仕方がない。

「これじゃあ、歩きにくいんですけど？」

『…………』

「承諾しました。行きましょう」

無言の要求を呑んで、少しでも早くこの状態から開放される為にも歩き出す。

「あの、扉を開けられないの、どちらか開けてもらいます？」

一瞬静寂が訪れたが、一番がドアノブに手をかけてくれる。

「な、なにこれ。開かないじゃない」

無理やりあけようと力を込めている。ここで扉を壊されでもしたら面倒だ。

「どうやら鍵を閉められてしまったようですね。屋上を確認せずに閉めるなんて、教員の誰かが生徒に頼んだのかもしれません」

二重の意味で適当な推理をして――

「ルーフバルコニーの方にも扉がありますし、どちらも確認しましょう」

――続ければ別の糸口を提案して破壊活動をやめさせる。

「こつちもダメみたい。もしかしなくとも私たち、閉じ込められちゃった……？」

今度は一番が確認してくれたが、結果は同じ。

「屋上に閉じ込められるという表現は、果たして適切なんでしょうかねえ……」

不安や焦燥を覗かせる姉二人を落ち着かせるように、故意に暢気な発言をしてみた。

「なんで七海はそんなに落ち着いてるわけ？」

概ね予想してたどおりの言葉が返ってきた。

「まあ、今ここは風を凌げますし、この扉も開けようと思えばいつでも開けられますので」

『え？』

「そして、ここから脱出するには私の腕を自由にしてもらう必要があるんですが……」

『……逃げない？』

「家で話をするなら逃げようがないと思いますよ。いつかは帰らなきゃいけないんですし」

『に・げ・な・い？』

「……逃げませんよ」

家に帰るまでに似たような遣り取りを後何回繰り返すのか、予想しかけたが虚しくなつてやめた。まあ、何が言いたいのかと言うと、拘束されたままでは無駄な思考をしてしまうぐらいには、できることがないということだ。

「更に歩きにくくなつたんですが？」

『いいから扉を開けて』

腕は自由になつたが、腹に縋りつかれた。これ以上抗議するのはやめよう。一刻も早く家に帰ることだけを考えるんだ。

「二乃姉がちょうど掴まつてる部分の内ポケットに、ツールボックスが入つてるので放して欲しいのですが。片方掴まつてれば十分でしょう？」

「確かになんか硬いのがあるわね。私が取るから七海は動かないこと

と

『はいはい』

もうなんでもいいから早くしてくださいな。

「手が冷たいです。というか、内ポケットはワイシャツにあるので下のシャツまで捲らないでください」

「……うん、わかった」

「全然わかつてないじやありませんか！ 弄<sup>まわ</sup>らないでください！」

まさか頭を叩<sup>はた</sup>くわけにもいかず、ついさつきやめようと決めた抗議をするほかない。

「一花姉まで捲らないで！ しかも顔を突っ込もうとするなんて、変態みたいですよ！」

「この姉達は……もう！」

「いやあ、七海からいい香りがするからもつと嗅いでおこうと思つて。ところで今の変態つて部分、リピートしてもらつても？」

「本当に変態じやないですか！」

「あんたら何やつてんの。もう取つたわよ」

「元はと言えば二乃姉が……ああ、もういいです」

余計なことは考えない考えない……。

「開きました。お先にどうぞ……はいはい、一緒にね」

投げかけられた質問に適当に答えながら無事開錠。そのまますぐにも帰途につきたかったが、鍵を開けたままでは後から面倒が起きたねないと考え、施錠まできつちりと行つた。

「後は紙を——付箋でいいか」

念には念を。問題が起こつてからでは遅い。同じことが繰り返されないためにも、注意書きを貼り付けておく。

「もう一つの出入り口のほうに寄つても？」

「う、うん」

一番の返事は歯切れこそ悪かったが了承は得られたので、すぐに移動する。

「ホントに七海は気遣い上手ね。……あいつに協力するのも、ただの気遣い？」

「あいつ？」

そういうえば、一番は遅れて屋上にきたから何を話していたか知らないのだった。

「上杉先輩のことです」

「優等生くんのこと？」

「さつき必死に拾つてた紙切れも、あいつの作ったテストだつたつてわけ」

「テストつてこの前の？」

「ええ、これ要ります？ 鏡だらけになっちゃいましたが」

流れで手渡したもの、こんな物は使い道に困るだけか。

「さつきのケンカ？ もこれが原因？」

何気ない質問を聞いて、私の体は自然と止まっていた。そして、止まつた体の代わりと言わんばかりに口が呟く。

「ケンカ……？ そつか私、喧嘩したんだ……」

喧嘩——それは、私が経験したことのなかつたことだ。交友関係が希薄なことが要因の一つだつたが、昔は喧嘩をするだけの余力すらなかつたというのが理由の大半を占めている。

何やら両隣で会話が繰り広げられているが、それらは耳に留まることはなく帰宅した。

「それで、何を話すつて言うんですか？」

帰宅直後にどこで話すかを聞いてみたら、私が二番の部屋で話そうという案が出た。当然のように省かれている一番の部屋は今度掃除しておこうと心に決めつつ、最終的に私の部屋に集まることでまとまつた。

「それは……あいつに協力するような真似をやめろつて話よ」

「そもそも、私は上杉先輩に協力しているんでしょうか？」

我ながらふざけた返しだ。だが、最終的に行き着く結論がわかりきつて いるこの会話、無駄にしないためにもお互いの気持ちの整理に利用しようと決めていた。

「は？」

「偶々リビングに置いてあつたテストを見つけて、自分の勉強も兼ねて注釈を書き加えただけですよ。勝手にいじつたことは反省しなければなりませんね。ごめんなさい」

「ふざけないで、五人分もいじつたつていうの？ 同じ問題なのに」「……意外にしつかりと目を通していますね。筆跡も真似ていたはずなんですが、どうやつて気づいたんですか？」

「勝手なイメージだけど、あんなカラフルにペンを使い分けるようなタイプじゃないでしょ。あいつは」

「なるほど、今後の参考にします」

単純に私が間抜けだっただけか。

「認めたってことでいいのね？」

「ええ。二乃姉達と同じ学校に通い、同学年の成績最優秀者。家庭教師の人選としては申し分ない相手なはずです」

他人ではなく自分自身に確認させるように放った言葉。

「とはいっても五人分を一人で受けもつのは大変だと思うので、協力は惜しまない考えです」

「……これ以上何を言つてもムダそうね。もういい、なら私にも考えがあるから」

今決心がついたと言わんばかりの態度で部屋を出て行つた二番だったが、私が関係してなくともその『考え』は変わらなかつただろう。遅いか早いかの違いでしかない。

「会話に入つてこなかつたところをみると、一花姉の用件は違うようですね」

さて、こつちの姉との話も手短に終わらせて夕食を作るとしますか。

「うん、昨日のことなんだけど——」

「四葉姉。夕食ができるのでみんなを呼んできてもらえますか？」

「うん、わかつた！」

駆け出していく四番を尻目に、効率よく食器に盛り付けていく。いつもなら盛り付け方に拘るところだが、そうせずに考えるのはこの後の予定だ。

先程の二番との会話で、改めて上杉先輩の協力をしようとした。私がどれだけの力になれるかは不明だが、協力する相手に隠しながら動くのはやめよう。ならば、明日にでも上杉先輩にこの件を持ち掛けれるか。

残る問題は、くしゃくしゃになつたテスト。新しい紙に書き写さなければいけないが、すでに渡してしまつた一番はともかく、二番と三番に対しては受け取つてもらえるかすら怪しいのが現状だ。つまり、優先すべきは四番と五番の分だ。今日中に仕上げておこう。

「七海。呼んできたよー」

「ありがとうございます——一花姉と二乃姉がいませんね」

後者に関しては、今会うのが気まずいといった類の理由だろうが、前者がいないのは気にかかる。

「二乃は後で食べるつて」

「一花姉は?」

「それがどこにもいなくて」

眉を『へ』の字にしてこちらを見つめる四番からは、憂いの感情が強く伝わってくる。一番を搜索する前に、彼女の笑顔を取り戻すほうが先か。

「誰も家の外に出た様子はないので、心配しなくても大丈夫ですよ。私が探してきますね。先に食べてください」

「え……でも」

しまつた。四番相手にこの対応は悪手だつたか。なら、別の対象に興味を移させることで対処しよう。

「ほら、五月姉が涎を垂らして大変なことになつています。四葉姉を律儀に待つているからでは?」

「うわっ、ほんとだ」

笑顔を引き出せはしなかつたが、憂いの帶びた表情を変えることに成功した。氣を取られているうちに、ここから離れてしまおう。「さて、どこにいるのやら」

いただきますの声を背にしながら搜索を開始する。高級タワーマンションと言つても、そこまで広くはない。探す場所も大してないのだ。

真っ先に向かうは、行方不明者本人の部屋。当然ここは四葉姉が探した場所だろうが、念のためもう一度確認する。

「一花姉。いますか?」

ノックをし終えてから呼びかけるが返事はない。

「開けますよ」

中で寝ている可能性も考慮して部屋に入る。

「いないか……にしては」

汚い。雑誌やマイク道具など様々な物が散乱している部屋だが、最も散らばっているのは衣服だ……。

「はっ！ 気がついたら畳んでいた」

今は部屋の主を探さなければ。だが、次に足を踏み入れたときには全てを片付けてやる。

今日は決意をよく固める日だと思いながら部屋を後にした。二番の部屋にも寄つていこうかと考えたが、今は一人にしたほうがいいと判断して通り過ぎる。そのまま携帯を取りにいこうと、自室の扉を開けた先に彼女はいた。

「人のベッドで気持ちよさそうに寝ちゃつて……」

一番との話し合いは、私のほうから少々強引に切り上げたのだった。その時、彼女を置いていく形で部屋を出たので、このような事態が発生しているのだろう。

「制服のままだし」

これでは皺だらけになつてしまふ。起こすか否か迷つたが、あまりにも気持ちよさそうに寝ているせいでそれも憚れた。となれば、明日の為にも替えの制服を用意しておかなければならない。

携帯電話を手に取り、電子メールが来ていることを確認する。今までは家族相手にしか使わなかつた機能だつたが、初めて家族以外を相手にしたとあつて、新鮮な気分が味わえていた。

「ふふつ」

内容を見て、思わず笑みが零れた。なるべく私の思いが伝わるよう文**じゅつこう**章を熟考してから返信をする。

そう遠くない未来に、私とこのメールの主は出会う——いや、再開を果たすだろう。その時、私が最初に掛ける言葉はすでに決まつている。

「楽しみだなあ」

呟いたものの、いつまでもこの感情に浸っているわけにはいかない。今は他にやるべきことがある。まずは部屋を後にし——。

「そんなことない！」

——ようとしたところで、唐突に眠っていたはずの一番が叫んだ。視線を向ければ、先程まで幸せそうだった表情は苦悶のものへと変わっている。目は瞑つたままなので、ただの寝言ではあるようだが……。

そのまま何も聞かなかつたことにして部屋を出ようと試みたが、まるで呼び止めるかのとく私の名前を呼ばれたので引き返すことに。「大丈夫ですよ」

過去に病院で、保健室で、時折目を覚ますと一番が私の手を大事そうに握っていたことがあつた。それを模倣した形で、今回は私から握る。

だが、私はこの人みたいに、起きるまで握り続けることはできそうにない。握り方だつて、どんなに似せていいようとしていても、きっと違うのだろう。そこに籠められている思いも同様にだ。

「大丈夫。きっと一貴女達五人なら、どんな困難でも乗り越えていくから」

『大丈夫。きっと私たち一人なら、どんな困難でも乗り越えられるよ』

……また一つ、私は嘘を重ねた。

「七海、どうだつた？ 一花はいた？」

「ええ、部屋で寝てましたよ。随分と深い眠りに就いていたので、起こさないであげてください」

私が階段を降りると同時に、こちらに駆け寄ってきた四番。反射的に返事をしたあとで不思議に思う。もう食事を終えたのかと。  
「遅かつたから心配したんだ」

どうやら自室で文章を考えたりしているうちに、結構な時間を消費していたようだ。

「……あれ？でも、私がさつき見たときはいなかつたけど」「入れ違いになつたのでは？」

間違つても『誰の』部屋かは言わないでおく。本当は私の部屋で寝ていて、ベッドが空いていないなんて伝わつたら『せつかくだから』とかいう私には到底納得できそうにない理由で彼女のベッドまで引っ張られるのが目に見えている。

ちなみに、一番のベッドが空いているという正論を振りかざすとも、この人に通らるのは経験済みだ。

「そつかあ、一花寝ちゃつたんだ……」

「……どうかしました？」

言葉尻で勢いが無くなり、不思議に思つて尋ねたみたが、何だか嫌な予感がする。

「え、えつとお……お、お姉ちゃんと一緒に寝ない……？」

到頭理由もつけずに誘つてきました。だが、今の彼女には理由以上に勢いがない。いつもなら有無を言わせぬ怪力で腕を引っ張つくるのだが……。

まあいい、今なら軽く断るだけでも引いてくれそうだ。早速言葉にして――。

「構いませんよ」

――ないのですが。どうした私の口。

「ほ、ホント!?」

ウソです。今のナシ。キヤンセルで。

急いで訂正しようと心から、まるで乖離したかのように望む言葉が出てこない。

「やつたあつ」

「いや、あの……はあ」

もういい。嬉々の感情を体中から滲み出している四番を見たらどうでもよくなつた。

少なからず、今日の一番と二番の密着よりかはマシなはずだ。そう思わないとやつてられない。

「……」この後やることがあるので、十時になつてしまいますがいいで

すか？」

「うん！大丈夫！部屋で待つてるね」

足に羽が生えている光景を幻視するほどに、ノリに乗ったスキップ歩きで去っていく四番。その羽で作つた布団は、さぞ軽いことでしょう。

くだらない想像をやめて、早いとこやることをやつてしまおう。時間指定した以上、遅れるわけにはいかない。

食事や入浴などの日常習慣を済ませ、一番を起こさないように静かに自室に入る。そうして真っ先に手にしたのは、皺だらけになつたテストだ。

リビングへと再び戻り、白紙の紙に問題文や解答を書き写していく。筆跡、字間、消し跡、皺がつく前と何一つ変わらない状態の物へと複写する作業は、かなりの集中力を消耗することとなつた。

「……ふん」

作業終了と共に姿を現したのは二番。こちらを一瞥したが、すぐには何も見なかつたかのように風呂場のほうへと去つていつた。

私が嫌われること自体は何の問題もないが、それによつて他の姉妹に八つ当たりする展開だけは防がなければならぬ。何かしらの対策は考えておくべきか。

もう一度自室へと戻り、薬を手にしてから四番の部屋に向かう。指定した時刻限り限りで気持ちが表に出たせいか、少々荒っぽいノックになつてしまふ。

直後、中からも荒々しい物音が聞こえてきた。片付けでもしているのだろうか、大人しく待つこととする。そうして待つこと数十秒、勢いよく扉は開かれた。

「いらっしゃい！七海！」

「お邪魔します」

限度一杯で来た私を、元気一杯で出迎えてくれた四番。これから寝ることを解つているのだろうか、この人は。

「寝る前に少しゲームしない？」

なるほど、直ぐに寝る気なんてないからこそ、あの出迎え方だつた

わけか。

「その前にこれ、拾いましたよ。どうぞ」

「これって……私のテスト！」

私が手渡したのは、先程複写したテストだ。前はリビングに起きて放しにしたがため二番に全部取られてしまつたが、今回は各人に手渡しすることで同じ失敗を防ぐ考えだ。

そういえば、結局二番が全員分のテストを持っていた理由を聞き出せなかつたと、今更ながらに気づく。

「よかつたあ。失くしちやつてどうしようかと思つていたんだ。ありがとうつ！」

「どういたしまして。十一時までには寝たいのでゲームは四十分だけですよ」

拾つた経緯を聞かれると面倒だ。話を進めることで追及されるのも回避する。

「ええ?! 四十分だけ!? 急いで準備しないと」

一体何時間やるつもりだつたんだか。明日も学校なことを忘れているのではなかろうか。

「じゃじゃーん！ 今回やるのはコレ！」

準備が終わるとすぐモニターに映し出されたタイトルは、様々な有名タイトルのキャラクターが使用できる対戦アクションゲームだつた。前に三番とゲームをした時は協力型のゲームだつたが、今回は違う。ネットワークに繋がつてゐる為、オンラインで見知らぬ人とも遊べるが、四番が望んでいるのは私と一対一での対戦だろう。

「いつも通りの規定でいいですよね？」

「うん。大丈夫だよ」

私が確認したかつたのはルールだけではない。同時に四番がどのぐらい集中しているかも見ておきたかつた。先程までとは別人かと思うぐらいに、落ち着きを帶びた声音が返ってきて安心する。

「それじゃあ、最初の使用キャラを書きましょルールうか」

四番と二人つきりでゲームをするのは、今回でちょうど百回目だ。

そして、そのほとんどに共通していることがあつた。それは――。

「負けないよ。七海」

——本気<sup>マジ</sup>でやっているということだ。

「…………」

返事はしなかつた、四番も気にした様子はない。

ゲーム内で操作キャラクターを選択してから、先程紙に書いたものと間違つていなかをお互いに確認する。

キャラクターセレクトを終え、ステージ選択の画面に移つたところで、私はコインを右手の甲に乗せてから左手で覆い隠した。

「表」

腕を突き出せば、何も言わなくても答えが返つてきた。これが当たつていればステージの選択権は四番に、外れていれば私になる。

余談になるが、最初はじやんけんで決めていたのだけれども、あまりにも私に勝率が偏つてしまふ為に、こういつた手法に変わつた経緯がある。

「表です。当たつたので四葉姉にステージ選択権がありますね。ステージ拒否は、これでお願いします」

ゲーム上では、選べるステージ数が百を超えるが、私達二人で遊ぶ時は総数の十分の一にも満たない。更にその中から拒否されたステージも選択できなくしているので、最終的に選べるのは片手の指で数え切れるまでに減る。

これらのルールは賞金などが出ている大会を参考にしているが、最初からこういった遊び方をしていたわけではない。私達が二人でゲーム遊び始めた頃は、協力ゲームなどを和気藹々とプレイしていたが、何回か遊んだ頃には四番が求めている遊び方がこういつたものではないことに気がついた。それからしばらくして私が提案した遊び方というのが、今やっているような本格的なルールで対戦ゲームをプレイすることだつた。決して、私が協力することが苦手だったから逃げたわけではない。ないつたらいいのだ。

『…………』

張り詰めた空気が、空間を支配している。普段の私達からは到底考えられないような雰囲気なので、他の姉達がこの様子を目撃したら、

何事かと喫驚<sup>きつきよう</sup>することとなるだろう。

読み込みが終わり、試合<sup>マッチ</sup>が始まる。今回選んだ互いのキャラクター相性は五分五分だったと記憶しているが、最近のゲームは調整<sup>アップデート</sup>されることが多い。このゲームも先週アップデートが適用されたばかりで、その内容を私は知らなかつた。

現代では、無知を罪とする見方が多数ある。そして、罪は露呈すれば咎められることがほとんどだ。

「……その攻撃、発生フレーム減つたんですね」

返事はなかつたが気にしない。今さつき、私の操作キャラクターが攻撃を食らつたばかりで、態々聞かなくても気づいていたことだからだ。自分自身に意識させるために呟いた意味合いのほうが大きい。

キャラクター相性や得手不得意、それに適したステージ選び、操作技術、駆け引きなど、このゲームで役に立つ要素を自分なりに最大限利用して、互いが目指す結果は唯一つ——。

「よしつ！ まず一本！」

——勝利のみだ。

「……やりますね」

ワンマッチが終わり、結果<sup>リザルト</sup>画面に表示された勝者は四番の操作キャラクターだった。しかし、三本先取制を採用しているので、すぐに次へと意識を切り替える。

「ステージ拒否は、これでお願いね」

先程は操作キャラクターを先に決めたが、今度はステージが先だ。そして、ステージの拒否と選択をする立場も逆になつてている。その後のキャラクターセレクトでは、直前のマッチで勝者だった四番からキャラクターを選ぶ流れだ。

このように、負けた側が次のマッチで有利になりやすいルールになつてている。故に、最終マッチにまで縛<sup>もつ</sup>れ込んで接戦となることが多い。単純に私達の実力が拮抗していることこそが最大の要因ではあるが。

私にとつて、勝負とは接戦であるほど面白い。それに加えて、勝利したほうが更に面白く感じられるのは、勝負事が好きな人には言うま

でもないことだろう。

『絶対勝つ！』

今という時間だけは、この気持ちを胸に全力を尽くす。これこそが、私と彼女が最も心を通わせる瞬間だろうから。

最終マツチにまで縛れ込んだ戦いは、四番の勝利に終わつた。敗因はいくつか思い当たつたが、反省よりも先にすることがある。

『ありがとうございました』

握手を交わす。これも毎回やつていることだ。コンディション調コンディション子コンディションが万全でなかつたとしても、結果がどうだつたとしても、私達は今という限られた時の中で力を尽くしたことには違ひない。ならば、それに感謝することを忘れてはいけないと私は考える。

「時間的に、次をやるには無理がありますね。検討でもしますか？」

昨今のゲームには、便利なことにリプレイ機能というものが搭載されていることが多い。それを用いて反省会をしようと提案してから、あることを思い出す。

「あつー！何だつたら、この前やつた上杉先輩のテストでも復習しませんか？」

茶化すように、思いついたことをそのまま口に出しただけの提案。当然断られるだろうなという私の予想は、大きく外れることとなる。

「お、お願ひできる……？」

「……はい。それでは、すぐに片付けちゃいましょうか」

一瞬動搖したが、おくびにも出さずに了承する。

屋上で的一件。八点の一――四番のテストは『当たり』と表現したのだが、五番のテスト同様『大当たり』に訂正したほうがいいのかもしれない。

「でも、復習つて七海の解るところなの？」

「ご丁寧に書き加えられていた解説を見たので大丈夫です」

「あつ、ホントに書いてある。いつの間に……」

さつき手渡したとき、名前と点数の部分にしか目を通さなかつたな

この人。

「その解説を見て解答欄を埋めれば、充分復習になると思うので読み進めてみては？それでも理解できなかつたら、私に聞いてください」「う、うん。分かつた……」

首は縦に振られたものの、不安感が隠しきれていない。八点しか取れなかつたテストを、いきなり復習しろと言われば無理もないか。「四葉姉は、家庭教師の話が出た時にどちらかといえば賛成派でしたよね？」

「そう……だね。五月のほうが賛成していたと思うんだけど」

それがどうして、あんなにも敵視したかのような態度を取つているんだか。

「今五月姉を見ると、家庭教師に……というより、上杉先輩に教えを乞うことに対する反対しているようですが」

「あはは……。あの一人、相性悪いのかな？」

何か原因があるはずだと遠まわしに聞いてみたが、回答を持つていないのか、あるいは隠蔽しているのか、判断はできなかつた。……まあいい、それよりも今は四番のやる気が出るように努めなければ。「それに比べて、四葉姉は相性良さそうですね。上杉先輩と」

「え、つ……ええ！？そ、そんなことない……よ？うん。多分つ！」

随分と露骨な反応だ。面白いのでもう少し突いてみよう。

「どうでしようか？四葉姉のテンションに付き合つてくれる人、中々いらないと思いますが」

「……もしかして、私のテンションつて面倒に感じる？」

調子に乗つて要らない発言をしてしまつた。好奇心で動くと碌なことがないな。

「そんなことありませんよ。私は、四葉姉にいつも元気を貰つているので感謝しています」

どの口が言うのだか。自分のことなのに、内心非難せずにいられない。

「相性はさておき、上杉先輩は不安なんじゃないでしようか？」

「不安？」

「ええ、あの人は成績こそ優秀と聞いていますが、教える経験が豊富ではないのだと思います。そんな中、いきなり教え子を五人も持つて、そのほとんどが非協力的。これから上手く行くのかと、不安を感じてもおかしくありません。もしかしたら、今も不安で眠れていなかかも！」

「上杉さんが、そんなにも思い悩んでいたなんて……！」

よくもまあ、これだけ適當と言えるものだ。今さつき非難したばかりでなんだが、今度は関心してしまう。

「こんな現状の中、誰か一人でもテストを復習してきてくれてたら、上杉先輩すつごく安心するだろうなあ」

適當なことは確かだが、的は得ているだろう。さすがに、今も眠れていよいというの大袈裟だと信じたい。

「そうだよね……上杉さんを安心させなきや！私頑張る！」

やる気が出たなら何より。上杉先輩と四番の関係性は多少気になつたが、私にとつて重要なのは利用価値があるかどうかだ。今回の行動をコントロール御するのに役立つというのなら、詳細など知らずとも問題はない。

早速テストと睨めっこを始めた四番を、少し離れた位置から見守る。

「な、七海。早速聞いても……いい？」

「はい。どの問題でしようか？」

遠慮がちな姉の不安感が増さないよう、平静を帶びた聲音で答える。

すぐに指差された箇所は、一問目だった。……これは、二十五問全てに質問される可能性も考慮しておいたほうがよさそうだ。いや待て、二問は正解していたから二十三問かもしれない。……大して変わつてないな。

「えっと、解説は読んだんですよね？」

すぐに首が縦に振られる。なら一体何を聞きたいというんだ。自分で書いておいてなんだが、相当わかりやすく解説は書いたし、上杉先輩の筆跡を真似したとはいえ、元の字自体が綺麗だったので読みに

くいなんてこともないはず。

「これ、なんて読むのかなって」

「……陶晴賢すえはるかたですね。私も初めて見たときは、どう読むか分かりませんでした」

そういえば、振り仮名は振つていなかつた。私の配慮が足りないことは確かだが、それ以上に私の学力と四番の学力の違いによつて生じる常識のずれを把握出来ていなことが大きい。すべての漢字にルビを振るわけにもいかないし、難しい漢字だけに振れと言われても私には区別がつけられないのだ。調べることも可能ではあるが、それは非効率がすぎる。

「ありがとう！七海」

「どういたしまして」

満点をあげたくなる笑顔でお礼を言われたが、それよりも今は、次のテストで満点に近づけるように頑張つて欲しいものだ。

「それでー……こつちも聞いていい？」

……ああ、教えるつて難しいな。次は、一体どんな質問がくるのか想像もつかない。上杉先輩は、これを五人同時にか……。とても私はでききそうにないと、四番に気付かれないよう、静かに息を吐いた。

「終わつたー！」

「お疲れ様です」

本当に疲れた、私が。最初から最後まで多種多様な質問の嵐で、十数分あれば終わるかと思っていたのに？

「つて、時間！……ちょうど四十分……十一時の」

「あはは……。ごめんね、付き合つてもらつちゃつて」

アラームをセットし忘れた私の落ち度だ。普段の四番は就寝が早いので、こんな夜遅くまで起きているだけでもつらいはず……なんだけど。

「お気になさらず。それよりも四葉姉、全然眠くなさそうですね」

「え、つ……そ、そんなことないよー？スッゴク眠くて、今すぐにでも

夢へと旅立っちゃうかも！」

目一杯見開きながら言われても、説得力の欠片もない。

「私が来る直前まで寝てましたね？」

「はい。ごめんなさい」

ノックした時に聞こえてきた物音は、飛び起きたからだつたわけだ。

「別に責めてはいませんよ。ただ、無理してまで私に合わせた理由は気になります」

「それは……えっと、その」

それこそ無理してまで聞くことでもないか。

「まあ、いいです。明日も学校ですし、早く寝ましょうか」

濡れた薄い紙で手を拭いてから先にベッドに入る。私と偶に寝るからか、一人で寝るには少し大きいサイズになつてているベッドの奥側へと体を寄せて、四番を手招く。

「つ！七海!?」

ゆつくりと近づいてきた彼女の手をとり、一気に引っ張る。ちんたらしていたら明日になつてしまふ。

「眠くないかもしだせんが、目は瞑つてください」

間違つても抱き枕にされないよう、手と手は繋いだままにしておく。

「そういうえば、四葉姉に報告しておくことがあります」

どうせ、私も四番もすぐには眠れないだろうし話題を振ることにした。

「え？」

握った手の力が強くなる。そんなに警戒しなくとも、大したことではないのに。

「私、上杉先輩の家庭教師業務を手伝うことになります」

報告はあくまでもついで、宣誓の意味合いのほうが大きい。

「どうして？」

「単純に五人一気に受け持つのは、負担が大きいと思ったからです」

現時点じや五人も参加しないと思うが、余計なことは口にしない。

「七海が……」

「はい？」

不自然に会話が途切れたので、疑問に思い目を開く。

「寝てるし……」

今さつき布団に入つたばかりなんだけどなあ。私が話題を振った時には、すでに寝ていたのだろうか。

「はあ……」

溜め息を吐かずにはいられない。何故ならば、私の手が痛いほどに強く握られているからだ。話題を振つた瞬間から徐々に強くなつてきていたのだが、もう無視できそうにない。そして――。

「似合いませんよ。その表情は」

——苦しそうな彼女の表情を見ていると私の胸が締め付けられるようで、手の痛み以上に苦しくて仕様がないのだ。

悪夢でも見ているのだろうか。まさか夢の中に介入できるはずもなく、対処法は思い浮かばない。

こういつた時、今は<sup>亡き</sup>母ならどうしたのだろうか。母親の代わりになど成れるはずもないが、何らかの糸口<sup>ヒント</sup>を得る為に古びた記憶を探る。

しかし、どの記憶も靄がかかつたようで顔すらも曖昧だ。姉達の中なら、最も似ているのは誰なのだろうか。

「あつ」

そこまで考えて、今日私の部屋で一番に似たようなことをしたのを思い出した。

空いていた片手も繋いでいた手に重ね、優しく包み込む。

「大丈夫。きっと貴女達五人なら――」

「――どうして、七海が生きているの？」

「ツ!？」

心臓が停まつたのかと錯覚するほどに驚いた。

……残念ながら、四番の寝言に対する答えを私は持つていない。なんだつたら、私のほうが教えて欲しいとさえ思う。

「どうして、私なんでしようね……」

意味などないと分かつていても考えてしまう、何故私が生き残ったのかと。

何度も考えても答えになんて辿り着けない。そもそも答えが存在するのかさえ分からぬのだから。それでも思考を放棄することをしないでいるのは、この先後悔することになつた時の言い訳の為でしかないのだろう。

四番に——中野四葉にとつて、中野七海という存在は罪そのものなのだ。ただ視界に入れるだけで、声を聞くだけで、思い出すだけで、罪悪感が彼女を襲う。

無論、私自身は四番のことを恨んではいないが、どう接するのが正解なのかは日々悩んでいた。私が人知れずくたばってさえいれば、四番がこんなにも苦しむことはなかつただろうに。

だが、もう遅い。再会して——いいや、私の生存が四番に知られた時点で、死ぬ機会を逃してしまつたのだから。

「うう……」

なんだか、さつきよりも四番の表情が苦悶に染まつてゐる。より恐ろしい悪夢を見ているのかと思ったが違う、いつの間にか力を込めていた私の手が原因だつた。

「あっ、ごめんなさい」

反射的に謝つたが、届いたかは不明である。それと同時に手を離そうと試みても、四番の方が離してくれなかつた。

結局、私の手は強く握られたままだ。このままじゃ痛みで眠ることさえ叶いそうにないが、もうそれでも構わないと諦めることにした。四番の表情自体は、少しはマシになつたので私が我慢すればいいだけの話。

この痛みは……そう、私への罰だと思えばいい。罰に対しても良いイメージを持つ人は少ないだろうが、罪を背負つて下ろすことのできなくなつた人間にとつて、時に罰は救いになりうる。

「違うよ……違うんだよ」

何が違うと言うのだろうか。この時の私には、全くもつて分からなかつた。生き残つた理由も、罰だと思い込んでいた『それ』の正体も、

本当は凄く簡単な答えがあるというのに。

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

一定の間隔<sup>リズム</sup>で荒い呼吸を繰り返す。意識するのは、吸うときではなく吐くとき。多くの息を吐いた分だけ、意識せずとも体が勝手に吸つてくれる。

そうして、雑念を振り払うかのごとく疾走する私の姿が早朝の郊外にあった。求めるのは速<sup>記録</sup>さであり、その為に必要なことだけを意識する。

四番との粒子の交じり合いは、早朝になつてようやく終わった。私の手より、一晩中力を込めていた四番の手のほうが心配だ。

「つて、違う！」

思わず叫んでしまった。周りには見当たらなかつたが、少しだけ頬が熱くなる。まあ、全身が暖まつてるので誤差だということにしておこう。……つて、この言い訳じみた思考も要らない。

姿勢を最適化し、呼吸と鼓動をリズムよく刻むように心掛け——。「お話を伺つてもよろしいでしょうか？」

——たかつたんだけどなあ……。曲がり角で待ち伏せしていたのか、唐突に姿を現した二十代後半と思われる女性に声をかけられた。「すみません。今、急いでいますので」

態々言わなくとも分かることを強調して言う。何の効果も表れないと、これまた分かつていながら。

「この前の件、考えてくれましたか？」

文脈など無かつたかのように進む会話。これではキヤツチボールになつていないどころか、ドツヂボールですらない。互いに相手の投げたボールを避けながらも、懐から出したボールを投げている感覚だ。しかも、投げたボールは地面に転がつたままで。

「…………」

一度断りを入れたので無言を貫く方向性にシフトして、今は記録を出すことに力を注ぐ。

「私と組みましょよ。あなたの体験談を本にすれば間違いなく売れます」

私の過去なんて不幸自慢にすらなりはしない。ただただ私の愚かさを世間へ晒すだけに終わるだろう。

「ビジュアルだつていいのだから芸能界でだつてやつていけますよ」友人の一人すらいないのに芸能界でやつていけるとはとても思えない。

「だから私と組みましょよ？ね？」

それが一番だと言わんばかりの口調で、同じ言葉を繰り返す。このような形で、この女性の勧誘は過去何度も行われてきたが、いつも『あなたならあなたなら』と、私の可能性のことばかりを主張してくる。例え、芸能界や出版に興味がある人物でも、このような勧誘方法では成功するとは思えない。自身や所属会社の実績、メリットなどをアピールするほうが効果的だと思うのだが、それは私が素人だからだろうか。

「ぜえつ……！ぜえつ……！ぜえつ……！」

女性が私と並走し始めて、まだ一分も経つていなかつたが早くも呼吸が乱れている。やがて並走は追走へと変わつたが、それでも諦めはくれなさそうだった。何故ここまで私に執着するのか、直接聞いたわけではないが想像はできる。

きつと、それは私が姉達に幸せな未来を歩んでいくて欲しいと望む、身勝手な押し付けとなんら変わらないのかかもしれない。他者に可能性を感じ、未来を想像す視れば、他者の瞳を鏡にするかのように、自身の未来も想像しやすいからだ。尤も、瞳に反射させて視えた光景など、未来のほんの一部でしかない。想像した未来に至るまでの道のりは、平坦でないことだけは確かだろう。

「…………」

到頭、息切れの音すら私の耳に届かなくなつた。だが、足音だけはまだ辛うじて拾える。いい加減楽にさせてあげよう。

走り始めてから、ほとんど変化させていなかつたペースをここにきて一段上げる。すると、すぐに振り払うことに対し成功して、女性の姿は

見えなくなつた。

道中、何人か私と同じように走る人とすれ違つたが、目線を合わせることもせずに駆け抜ける。前だけを見て、目を背けたい過去から逃げるようだ。

人生は選択の連続である。私は、今日という日の朝も様々な選択をした。それは、四番を一人にして家を後にしたこと。女性を振り払つたこと。すれ違つた人物に目を合わせず、よく姿を確認しなかつたことなど、挙げればきりがないが、それらの選択一つ一つが未来を形成する、重要な欠片ピースであることを私は理解していなかつた。

三十八分二十一秒。それが、今回十kmを走り終えた私が出したタイムだつた。途中、気が散るイベントがあつたり、昨日屋上で感じた疼痛がまたこないかと警戒しながら走つたせいで自己ベストよりは幾分か遅い。それでも、一般的には決して遅くはないタイムだが、同じ日本人女子高生という括りでも三十分台前半の記録は存在する。それらを更新したいとまでは強く思はないが、同じ三十分台前半を目指している私にとって、残り四分弱は余りにも遠く感じた。

『がっかり』或いは『しょんぼり』。そんな気分で帰宅した私は、今日も今日とて姉達に捕まる前に家を出ようと行動する。

「居ない……」

家を出る前に着替えや登校の準備をする為、自室に入つたときは昨日と変わらず一番が私のベッドで寝ていたはずなのだが……シャワーでも浴びているのだろうか。私もこれから浴びようと思つていたので、なんとか鉢合わせないようできなかつたし、今の気分も一緒に流してしまおうという教室に向かつたが、予想は外れて無人だつた。

「まあ……いつか」

今は、一番のことよりシャワーだ。さすがに多量の汗を搔いたまま登校したくはなかつたし、今の気分も一緒に流してしまおうという考えだつた。

滴る水の音を耳にしながら、家族のことを想う。といつても、今回

は姉達のことではなく父親のことだ。

あの人と顔を合わせる機会は、同じ家に住まう家族とは思えない程に少ない。帰宅時間は夜遅く、朝は早くに出て行く、そもそも帰宅そのものをしない日も珍しくはなかった。

現在、こうやつて綺麗な水で体を洗い流せるのも、私達姉妹が学校に通えているのも父のおかげだ。しかし、私は与えてもらうばかりで、父に何一つ恩を返すことができていない。

この生活は、当たり前だと思つてはいけない。当たり前だと思つていた日常が、ある日唐突に終わるのを私は身を持つて体験している。それでも愚かな私は、忘れそうになつてしまふ。だから戒めるのだ。己の体に刻まれた傷を見ることによつて。

『嫌つ！離して！』

『……があ』つー！あ……な……ぜ』

体が熱かつた。碌な言葉も発することができず、目を見開きながら手を伸ばすことしか出来なかつたあの日のように……？

「つて、あつつ！」

急上昇したシャワーの温度に遅れてリアクションする。浴室の外からも温度の調整ができる為、誰かが変えたのだろう。問題は誰が変えたかだ。

急いで浴室を出ようとしたが、その前に温度を変えた犯人が先に戸を開けた。

「おはようござります。五月姉」

「おはようございます。七海。ごめんなさい、中に入つていたのに気付きましたでした」

「いえ、お気になさらず」

口調こそ丁寧な挨拶をしたが、態度はあまりいいものとはいえない軽い会釈をして通り過ぎ——。

「待つてください」

——ようとしたところで腕を掴まる。

「二乃と喧嘩したそうですね」

急にシャワーの温度が上がった時は一体誰がやつたのかと少し頭

に来たが、姉達の中で最もマシな人物だった為、すんなり通してくれそうだから良かつたと思つていた。しかし、今日の五番は面倒そうだ。

「ええ、軽い言い争い程度ですが」

深刻な事態ではないと言外に込める為、即答する。

「二乃、落ち込んでいましたよ」

「何かしらの補いは考へてゐるので、ご心配なさらず。二乃姉が他のみんなに当たることにはならないよう配慮します」

努めて平静を装う。この会話において重要なのは、私の感情を表に出すことでもなければ、一番の心配をすることでもない。五番に安心してもらうことが何よりも大切なのだ。

「そうではなくて——」

「——そんなことよりも、この前上杉先輩が出したテストを拾いました。解説なども書き加えられていたので、復習に使つてみては? リビングの卓上に置いておくので、今度は無くさないでくださいね」

「そんなことつて……」

どうやら、言選を誤つたらしい。しかも、発言の頭から誤つたが故に、後続の発言に意識が向いてもいない。もし、今の発言を自己採点するとしたら零点だ。

「……ごめんなさい。家族の問題なのに、投げ遣りな発言をしたら心配になりますよね」

誤りは謝りで修正する。傷口が広がる前に、迅速な対処を行うことが私の処世術だ。

「責めているわけではないんです。ただ……」

沈黙が生まれる。

途切れた言葉の先は、大方の予想が付く。それは、ただ心配ただけなのだろう。心配だけど、具体的な案は思い付かない。心配心配と繰り返し伝えたところで、事態は一向に好転しないのだから。

「ただ——」

代わりに、私が言葉を引き継ぐ。

「——心配しすぎなんですよ。二乃姉も、五月姉も……そして、私も」

無論、他の姉や……或いは父だつて。みんな、心配するばかりで動けないのだ。良い案が思い付かない。時間が取れない。感情が邪魔をする。理由は様々だろうが、こんな心配だけで思うように動けない関係性も、家族のよくある形なのだろう。

でも、少なからず明日生存しているかどうかを不安に思う生活よりかは余程良い。

「七海も……ですか？」

「はい、私もです。何が心配か分かりますか？」

唸りシンキングの時間タイムに入つた五番には申し訳ないが、このままでは私の体が冷めてしまう。答え合わせは、また今度にさせてもらおう。

「答えが出たら教えてくださいね」

そう言い残して浴室を後にした私は、五番の腹の足しになりそうな物を調理してから登校した。

「おはようございます」

教室に入ると同時に、同じ一室で学ぶ彼ら彼女らに挨拶ラスを行う。お世辞にも交流コミュニケーション能力値メーが高いとは言えない私だが、挨拶と返事さえしつかり行えれば、なんとかやつていけると考えている。

『おはよう』

まだ教室には、総席数の半分すら生徒は集まつていなかつたが、幾人かの生徒が挨拶を返してくれる。

『七海さん』

挨拶までは、普段となんら変わりのない定形句であつたが、後に続いた私の呼称は、クラスメートの口からは聞き慣れないものだつた。内心不審に思つてはいたが、曖昧あくびにも出さずに会釈をしてから席に付く。

小さく息を吐いてから思考する内容は、当然私の呼称についてだ。

昨日までは、間違いなくクラスメートからは『中野さん』と称されていた。それがどうして今日になつて変化したのか。

「おはよう」

「おはー」

女子生徒一人が入室してきた。彼女は、特定の生徒にのみ挨拶を投

げ掛けれるが、挨拶されれば誰が相手でも返す性質だ。その習性を利用して、今回は情報収集させてもらうこととしよう。

「おはようございます」

「おはよう。七海さん」

彼女が私の席近くに来た時、こちらから挨拶を投げ掛ける。するとすぐに返事が返ってきた。ご丁寧に名<sup>ファーストネーム</sup>前<sup>ティップ</sup>付きでだ。

明らかにおかしい。私からは彼女の名を呼んではいないのに、あちらだけが名前を呼んでくる。まるで、私の名前を呼ぶ行為が決まりごとかのようだ。

彼女が入室してきて最初に行つた挨拶では、相手方の名は呼んでいなかつた。勿論、普段の挨拶でも同様だつたと記憶している。

その後、他の生徒と挨拶するたびに名前を呼ばれ続け、愈々氣味悪くなってきた。

自身の肩を抱きしめたくなる衝動を抑えながらも、更に時間は経過していく。席が生徒で大方埋まつたあたりで、教師が入ってきた。挨拶を終えてから、点呼が始まる。つまり、名前が呼ばれるということだ……まさか！

気づいた時には、呼ばれる寸前だつた。思わず生唾を飲み込む。

「中野さん」

いつも通りの苗字呼びでした。

「中野さん？……中野七海さん！」

「あっ、はい！」

返事を忘れたが故に、結局姓<sup>フルネーム</sup>と名で呼ばれることに。

クラスメート達から、小さく笑い声が漏れていた。肩を抱き締める動作こそしなかつたが、竦めることにはなつた朝だつた。

昼休み。私は、上杉先輩を探していた。正式にと表現するのかを適切かどうか疑問の余地があるが、家庭教師業務の手伝いを申し出る為了だ。

しかし、中々見つからない。数時間前に呼び出しのメールは送つて

おいたが音沙汰なし。いつそのこと、そのままメールで用件を済ましてしまおうとも考えたが、こういったことは直接伝えたほうが良い結果をもたらすだろう。それに加えて、出来うる限り早期に伝えるのがベストだ。

食堂、教室、図書室。その他様々な所を探しても成果は出ない。ならばと外に出てみたら、唐突に私の足下へとバスケットボールが転がってきた。

「放つてくんないー？」

女子生徒が一人こちらに向かって手を挙げたので、直ぐ様ボールを拾い上げ御注文通り放ることとする。

目標までの距離は、バスケットコートで言えばハーフライン数歩手前ぐらいだ。

下半身で充分に溜めを作り、地面から脚を離す。跳躍の最高到達点付近で手にしていたボールを放つた。

回転したボールは、放物線を描いてリングを通過する。それを確認した私は、目標から背を向けてその場を――。

「待つて」

――去らせてはくれないようだ。いくら何でも、無言でシユートして背を向けるのは失礼が過ぎたか。

「ちよつと相手してよ。骨のある相手を探してたんだ」

どうやら、遊び相手が欲しくて呼び止められたようだ。

「ごめんなさい。今、人を探しているので」

当然断る。私の中での優先順位は、そう簡単には揺るがない。

「誰？」

「上杉先輩という方です。頭頂部で二つの髪が跳ねているのが特徴的な方なのですが」

「あー……あの人ね。それならさつき見かけたよ。そうだな……私と一対一してくれたら教えてあげる」

「……三本勝負でいいですか？」

前言撤回。少し悩みはしたが、優先順位はすぐに入れ替わった。五番のことをちょろいと評していたが、私も大して変わりないのかもし

れない。

## 「オーケー」

「準備するので、少々お待ちを」

髪を一つに束ねながら、四番と勝負する時と同様に集中力を高める。情報提供の条件に勝敗は関係なかったが、相手は真剣勝負がお望みらしい。

軽く汗を流しながら、ウォーミングアップを対戦相手の様子を確認する。

私と身長に差が無い少年風な彼女は、クラスメートではあるが交流したことはほとんどない。

そんな彼女が、何故いきなり私に対して勝負を仕掛けてきたのか、それは深く考えずとも理解できる。

「お待たせしました。やりましょうか」

校庭と同じ砂に白線が書かれた簡易コートに足を踏み入れた。ここは、体育館が他の部活に利用される日にバスケ部が練習場所としている場所だが、昼休みは体育館と違つて事前の申請がなくても自由に利用可能だ。

「……いいね。楽しめそう」

バスケットボールというスポーツを少人数で行う際、オールコート全体でではなく、その半分——ハーフコートを使用するのが一般的である。

「アンタから先でいいよ」

彼女が言っているのは攻守のことだ。つまり、先攻を譲ってくれたことを意味する。

地面で一回弾み、ボールが私の手に渡った。開始の合図だ。

それと同時に、重心を低く構えながらも上半身はしつかりと起こしている守りに付かれた。マーク……簡単には勝たせてくれなさそうだ。

私もドリブルを開始する。足元でボールを遊ばせながら揺さぶりをかけてみると、前かがみになることも、変に力が入ることもなく自然体のままで隙はない。

状況を開ける為、一瞬だけ後ろに重心を持つていき、そこから一気に切り込む。

それに反応して、相手はお手本にしたいぐらいのステップを駆使し

て対処してくる。その後も切り返しや欺<sup>フエイント</sup>など、いくつかの方法で仕掛け<sup>アプローチ</sup>てみたが抜くことはできなかつた。

しかし、それらは失敗に終わったわけではない。抜くことはできずとも、ゴールまでの距離を詰める事には成功したからだ。

バスケットボールというスポーツは、相手を抜き去ること目的ではない。リングにボールを通過させることが目的なのだ。

「ちつ！」

舌打ちが聞こえる。勢いを付けていた私が急停止をするところまでは良かつた。しかし、その直後に再びボール持つた私が、左足を軸にして後退する動きに対しても反応が遅れたからこそ舌打ちだろう。

後退の勢いをそのままに跳躍する。体が後ろに流れたままではシュートの成功率は下がるが、先程のドリブルでゴールまでの距離を詰めることにより、それなりの確率で入る。

体勢を維持してボールを放つ。相手も跳躍のタイミングこそ私とほぼ同時だつたが、距離が空いている為、ボールに手を伸ばしても届かないだろう——そう思つていた。

「だあ！」

雄叫びをあげた彼女の指先が、僅かにではあるがボールに触れた。それによつて弾道が逸れる。

間違いなく外れると判断する前に、体がリバウンドをするためにゴール下へと向かう。

着地は私の方が早かつた。しかし、シュートの時は有利要素だった距離が不利に働く。先にゴール下へと到達した相手に妨<sup>スクリーピングアウト</sup>害をかけられ、その後のリバウンド勝負にも敗北したのだつた。

「ほい」

ボールを取られたので攻守交代。今度は私からパスをするのが開始の合図な為、一度ボールが渡される。

その時、相手と視線が交差する。随分と得意げな表情だ。これの意味することは……。

「…………

「どうしたの？もしかして、作戦でも考えてる？」

「はい、その通りです」

正直に答えると同時に、パスを出す。

「それは楽しみ……だつ！」

マークに付いたら、まずは私から見て左側に誘導するように構えた。すると、相手は私からボールを遠ざけるよう行動するので、右手中心でドリブルしてくるだろう。

学校生活での彼女は、左手を主に使用していたと記憶している。意図してそういう生活を送っていない限りは、左利きで間違いないだろう。態々、相手の得意なことをさせる道理はないのだ。

しかし、ドリブルだけでバスケットボールは成り立つてはいない。パスする相手がいなくとも、放る先は他に存在する——そう、彼女はいきなりシュートモードを放つ体勢に入ったのだ。

それを見た私は、冷静に対処する。少しだけ距離を詰めて、相手の動きをよく観察した。結果、今の動作はフェイントだったようで、すぐには始まつたドライブについていく。それは、私よりもキレのある動きだった。

ここまで動きを見るに、バスケットボールにおける技術は相手の方が上手だと結論付けていた。だからこそ、相手は得意な形プレーに持ち込み易く、行い易いと考える。

相手が急停止をした。反応こそできた私だが、バランスを崩しかける——ここまで先程した私の攻撃と似た流れだ。違つたのは、相手が垂直に跳躍したことだった。

私は、先程作戦を考えていたが、練りはしなかつたのだ。より正確に表現するなら、細かな作戦を考える必要性を感じずに放棄した。何故なら、普通にプレーしていれば相手のほうから高き勝負に持ち込んでくると踏んだからだ。

無論、先程の私の攻撃で、高さでは勝てないことを理解している。だから、勝負するのは高さではない。速度で勝負するのだ。それも、走つたりする平面によるものではなく、跳躍による上昇速度で。

「なつ!？」

驚愕の声が聞こえる。数瞬遅れて跳躍した私が、シュートを放つ前

にボールを弾き落としたからだ。

ルール上は身体の接触はないので反則にはならないが、審判がいればシユートモーション中にボールが放たれる前のブロツクはファウルをとられやすい。しかし、今ここには審判がないからこそその選択だった。

着地も先に完了した私は全力で駆ける。すると、ボールがコート外へと出る前になんとか回収することができた。これでまた攻守交代。「どうぞ」

「……さつき考えていた作戦に見事にハマつたってわけか」

『見事に』ではなく、『勝手に』が正しいかもしない。

私のシユートをブロツクした後の表情や、お互いにバスケットボールをプレーする姿が初見であることを加味すれば、得意なことで勝負していくのも読みやすかつた。

敢えて緻密な作戦を立てなかつたのは、意図した動きで誘導すれば悟られる可能性が高いと判断したからだ。

そして、跳躍速度という特技を隠し持つていたが故に、開幕のシユートモーションを用いたフェイントにも余裕を持つて対応していた、というわけである。

「…………」

「どうしたの？ 余所見なんかして、勝負はこれからでしょ。早くやろう」

最後の部分には同意するが、勝負はすぐに終わらせるつもりだ。

ボールを受け取り、私の攻撃が始まる。

何の搖さぶりもかけずにドライブを仕掛けるが、当然それでは簡単に阻まれる。

スリーポイントラインの内にすら入ることはできずに、到頭コートの隅にまで追い込まれた。だが、これでいい。ハーフコート側の隅に追い込まれたならともかく、ここはスリーポイントライン手前の隅——私の最も得意とする位置だからだ。

ゴールリングは見ない。地面を見て定位置を確認する。そして、上から俯瞰した時にゴールからちょうど零度の角度となる位置で私は

止まった。

そこからゴールに対して体を向けず、地面を見たままシュートを放つ。軽くステップでもするかのような小さな跳躍から放つたのは、片手で弧を描くシュー<sup>フック</sup>トだ。

想定外だったのか、ブロツクどころか跳躍することすらできずにボールの行方を眺めている相手を横目に、コートを出ようと歩き出す。直後、気持ちのいいネットとボールの摩擦音が聞こえてきた。

「ちよつ、ちよつと待つてよ！まだ勝負は終わってない！」

敗者が付き纏つてきた。

「終わりですよ」

返事こそしたが足は止めない。

「は？」

「私、言いましたよね。三本勝負だつて」

「……え？だから、三本勝負でしょ？」

「ええ、三本勝負です。三セット勝負ではありません」

「は……はあっ?! そんなの普通、攻守三回ずつって思うじゃん！ 私を騙したな！」

「勝手に勘違いしただけです」

「あ、わかった！あんた勝ち逃げする気でしょ！」

大正解。これ以上やつたら、私の負けは目に見えている。

「ちよ、ちよつと待つてつてば……そうだ！人探していたんでしょ？ えーっと、うえ、うえ、うえ……もど？」

「上杉先輩です」

呼称すら曖昧……まさかこの人。

「そう！その人の居場所、決着付けないと教えてあげない」

「そもそも居場所なんて知らないのに、よくそんなことが言えますね」

「え』つ……なんでわかったの」

「ふつ……」

居場所どころか、上杉先輩自体が誰なのかすら分かつてなさそ

だ。

「あつー！また騙したな！」

「騙したのはそつちだろう。それに今のは騙したわけではなく引つ掛けただけだ。

ちなみに今の通り取りで重要なのは、疑問系ではなく責めるようになんかに発言したこと。これによつて否定されにくく。

「ねえ、騙したのは謝るから勝負しようよー」

そもそも情報が欲しくて勝負したわけではない。誘つてきた時の表情が、四番の表情と似ていたから思わず承諾してしまつただけだ。そんな理由だつたが故に自身のことをちよろいのかもしれないと疑つていた。

そして、勝負を唐突に終わらせたのにも理由がある。

「この格好じや全力も出せないでしょ。今度時間を作るんで、その時にやりましょう」

今の今まで制服姿だつたのだ。上はともかく下のスカートが問題で、動き難いだけならともかく、途中で校内の窓から見物人ギャラリー人が出始めていた。私は下着を見られるぐらいなんとも思わないが、彼女の気持ちを考慮すれば早くに終わらせておくのが良いと判断した。

「ホント?! 約束だからね! いつにする? 放課後?」

表情だけでなく、私への距離感も四番と似ている。正面倒くさい。

「今日の放課後は先約があります」

「えー、誰よそいつ。私がキャンセルするように言うから教えて」

「誰かは分かりません」

「は?」

「手紙で屋上に呼び出されているんですよ」

「まさか告白?」

「さあ?」

「さあつて……。誰が出したかもわからない手紙なのに律儀に従わなくともいいんじやない? というかこのご時勢に手紙つて……」

「とにかく、他にも用事があるので時間が確保でき次第お伝えします。それまでお待ちいただけますか?」

「わかつた。絶対だよ」

「ああ、それと」

「ん? 何さ?」

片手を差し出す。どんな形であれ勝負をしたら行おうと決めてい  
る行為だ。

「握手です。対戦ありがとうございました」

「……嫌。次に決着をつけたときにしようよ」

まさか拒否されるとは思つていなかつた。私が約束を反故にする  
と怪しまれているのだろうか。

「分かりました。……昼休みが終わるまであまり時間は残されていま  
せんし、私は更衣室で汗を拭おうかと思っています。貴女はどうしま  
すか?」

「あー……私もそうしよつかな」

すぐに更衣室へと辿り着き、早速タオルを取り出す。

「にしてはさ、アンタ気持ち悪くないわけ?」

「はい?」

唐突な質問の意味が解らず首を傾げる。

「朝から色んな奴に名前で呼ばれてたじyan。それを澄ました顔でス  
ルーして、誰にも理由を聞きもしない。私があんなことされたら気味  
悪すぎてソッコ一家に帰つてたかも」

家に帰るのは度が過ぎているが、氣味が悪かつたのには同意だ。

「何か理由を存じているんですか?」

「まあね」

「ただでは教えてくれないと」

「おつ、察しがいい。出来る限り早くに再戦したいからさ、そうなるよ  
うに動いてほしいなって」

やはり疑われているか。

「……正直、今の私では数戦すれば種が尽きて貴女相手には勝負にな  
らなくなります。なので、練習する期間を経てから再戦したいという  
のが本音です」

「意外と負けず嫌いなんだ……。そういう理由ならいいよ、何とか我  
慢してみる。けど、やっぱり早い方が嬉しいな」

「『ご』理解感謝します。制汗剤、使いますか？」

「お、サンキュー」

返事と同時に制汗剤を放る。

「言葉使いは堅苦しいくせに、こういう部分はラフだね。さつきのゴールも見ないフックシユートといい」

「別に誰に対しても、『ういつた行動をするわけじやありません。しても問題ない相手だと判断したまでです』

シユートに関しては条件が揃わないといけないことは匂わせないでおく。駆け引きに使えるカードは曝すべきではない。

「ふーん……。あつ、いい匂い」

「そうですか、なら良かつた。臭いがきついと隣の人が不憫ですから……『ごめんなさい、これでは貴女が臭うかのように聞こえてしまますね。飽くまで私の話です』

「いや、私はそういうの気にしないからいいけど……というか、アンタなら汗かいたままで歓迎されると思うけど

「そんなわけないでしよう」

「……アンタってさ、自分が人気なことに気づいてる?」

「友人の一人もいない私が人気者だとしたら、全員人気者になると思うのですが」

「あー、もういいわ。この話は終わり」

要領を得ない会話だ。彼女——ではいい加減ややこしいので、バスケットボール女子を省略して『バス女<sup>じょ</sup>』とでも呼ぶとしよう。とにかく、そのバス女を見ていてふと思つた。もし私に姉妹がいなかつたらとしたら、バス女のような感じに育つていたかも知れないと。

そうバス女に話したら『なんだあ?! 私に姉妹がいれば、この無駄にでかい胸もあつたつて言うのかー!』と、意味不明な叫びと共に私の胸を揉まれることになるのだが、それはまだ先のお話。

放課後。私は二日連続で屋上に佇んでいた。  
昨日と違つて風は大人しい。スカートが捲れて下着を見られる可

能性もないなど、どうでもいいことを考えながら待っていると扉が開かれる。

「ごめん、待たせちゃったかな」

現れたのは一人。今朝、教室で最初に私の名前を呼んだ男子生徒だった。

「それほど待つていませんのでお気になさらず」

「あはは……そつか……」

現れてからここまで、彼は両の手を握つて開く動作を繰り返している。緊張によるものだろうか。しかし、私には他に予定が控えている為、相手の気持ちを汲んで悠長に時間を浪費するわけにはいかないのだ。早々に話を進めさせてもらおう。

「それで、ご用件は」

「あーっと、それは……」

また沈黙か。

「言い難いことでしたら、また後日でもよろしいですか？」

「あっ！いや、待つてくれ。今言うから」

三分間だけ待つてやる……嘘だ、實際はそんなに待たない。

「中野七海さん。あなたのことが好きです！付き合つてください！」

やはり告白か。入学して一、二ヶ月の間はされていたが、最近はなかつた。何故今なのだろうか——そう疑問に思つたが何よりも優先すべきは返事の言葉だ。

「ごめんなさい。私は、誰かと付き合う気がありませんのでお断りします」

お得意の嘘は混ぜない。何かを告白するという行為は、とても勇氣のいることだから。その勇気に少しでも見合つた言葉で返すことにしている。

「……やつぱり断られたかあー」

「分かっていながらも行動したのですね」

「あー、それは……」

「差し支えなければ教えてくださいませんか？」

渋る彼には悪いが、未来で役に立つ情報かもしれない。引き出せる

だけ引き出しておこう。

「えーっと、先週のことなんだけど——」

先週? 何かあつただろうか。

「——放課後、お姉さん達が教室に来た日があつたよね」

おう。思い出させないで欲しい。あれは恥ずかしかった。

「その時、お姉さん達との遣り取りで見せた表情が、普段のクールなものと違つて……こう、胸にきた? といいますか」

要するに普段<sup>ギヤツ</sup>との違いにときめいたわけか。なるほど、よーく分かつた。姉達には教室に来ないよう釘を刺しておこう。

「ありがとうございます。参考になりました」

「いや、例を言われるほどのことじゃ」

「思いの丈を教えてくれたんです。感謝ぐらいは受け取ってください」

「あ、ああ。……にしても恥ずかしいなあ。明日から誰かにいじられたりするかも」

こちらに顔を見られないよう、天を仰ぐような形で呟く彼を見て、私の口から自然と言葉が出た。

「堂々としていればいいんですよ」

「え?」

上を向いていた顔が私を——前を向く。

「堂々としていればいいと言つたんです。自身の想いを打ち明けるなんて簡単にできることじゃありませんから。それも色々と下準備をしたのでしよう?」

「そんなことないよ。さつきも言つたとおり、衝動的に告白しただけ——

「——嘘」

「え”つ」

「アプリのグループ会話で、クラスのみんなに私の名前を呼ぶよう誘導したんですね?」

ちなみに、そのグループに私は参加していない。学校生活が始まった最初の頃、私は忙しくてクラスメイトと碌に交流をしようとした

かつたので誘われなかつたらしい。

「な、なんで知つて」

「クラスメイトから聞きました」

バスのことだ。更衣室を出た後、約束通り事の詳細を教えてくれた。

「し、知られたくないな」

「私は、知れてよかつたと思つています。だつて、理由はどうであれ私がクラスに馴染めるような行動をしてくれたんですから」

名前で呼ばれること 자체を氣味悪く思つていたわけではない。あくまで原因が分からなかつたからだ。

「……ただ告白する時に名前で呼びやすいようにしたかつただけでも？」

「それはまあ……随分と女々しい理由ですね」

「ごふつ！」

「ああ、しまつた。急所を抉る気は無かつたのだが、つい。

「では、こういうのはいかがでしようか？」

「彼は先程嘘をついた。ならば私も一つ、思つてもいないことを言葉に混ぜるとしよう。

「貴方のした告白は、これから胸を張つて生きるに十分自信と成り得る経験だと思います。例え結果が失敗に終わつっていても、その相手は私——中野七海なんですから」

私は今どんな表情をしているだろうか、それは目の前の彼のみぞ知ることだろう。

「なんだそれ。めちやくちやな理屈だな。というか、そういうキャラだっけ？」

「そんなわけない。しかし、私に告白しててくれた人達に少しでも誇れるような自分に成らなければとは考えている。

「さあ？ どうでしようね」

「知りたいことは知れた。もうここに留まる理由もない——そう思つて歩き出したが、すぐに呼び止められる。

「七海さん！」

「……貴重品を投げないでください。落としたらどうするんですか？」

投げ渡されたのは携帯端末。

「コントロールには自信あるんでね。それに、七海さんがあの程度の軌道でキヤツチミスしないことぐらいは知ってるよ」

画面に映されていたのは、バーコード<sup>バー</sup><sub>コード</sub>の発展型。

それを自らの携帯端末を懐から取り出して読み込んだ。すると、グループ会話への招待状が届く。

「つと、落としたらどうすんの？」

渡された時の軌道を真似て投げ返すと、苦笑と共に質問が返ってきた。

「それぐらいは難なく捕つてください。正捕手、狙っているんでしょう？」

偶々耳にしていた情報を利用して返答と言い訳をした。

「では、私はこれにて失礼しますね」

屋上を後にした直後に、グループ会話へと参加する。

「よろしくお願ひします」

呟いた言葉と同様の意味を表すスタンプを投稿すれば、すぐに多数の返信がきた。

そのほとんどは挨拶だったが、一つだけ質問が混じっていたので答えることとする。

内容は、投稿したスタンプの入手手段が知りたいとのことだつたので、自作品だと返すと一気にグループ内の会話が盛り上がり行く。正直、成り行きで入つたグループだったが、上手くやつていけそうだと感じて密かに胸を撫で下ろした。

だからだろうか、普段ならすぐに気付くような熱を帯びた視線が、背後から突き刺さっていることに気付かなかつたのは。

「見つけました」

「…………」

無視。

「もしもーし、聞こえていますか？」

「…………」

帰り道にて、偶々上杉先輩を見つけたので声を掛けたのだが、話しかけても反応が無い。

「先輩?…………つ!」

唐突に私にもたれ掛かるよう倒れてきたので、驚きながらもなんとか支えた。

「はあ……はあ……」

距離が近くなつたことによつて、彼の呼吸音が聞こえてくるが随分と苦しそうだ。

「…………の今までいいです。付いてきてください」

「あ、ああ……」

大量の発汗。鈍い応答。ふらついた体。それらの症状から考えるに熱中症だろうか。とにかく、少しでも涼しい場所へと移動しなければ。

「……」に横たわつてください」

周囲に建物もなかつたので、日陰で我慢してもらうことにした。ベンチにタオルを敷いて、枕代わりにした応急ベッドに寝かせる。

「スポーツドリンクです。自分で飲めますか?」

私の飲みかけで悪いがこれしか持ち合わせていない、また我慢してもらうとしよう。

もしこれで飲めないようなら、医療機関に連れて行こうと決めていた。

「…………ふはあ!悪い、助かっ――!?!?」

無事飲んでもらえて安堵したのも束の間、すぐに動き出そうと体を起こした彼を抑えつける。

「今さつき倒れかけたばかりなんですよ。何すぐに起き上がろうとしているんですか?」

「いや、もう大丈夫――」

「――五分」

「え？」

「五分間だけ休んでください。お願ひします」

物理的に押さえつけるのは簡単だ。しかし、この後に控える本命の願い事を通すためにも、先に簡単なお願いをすることにした。

「お願ひします……」

見下ろす形で目を見つめ、繰り返しの要求を行う。すると、返事こそなかつたが大人しくなつた。

「…………」

沈黙。何か話した方がいいのだろうか。彼が元気になるトークなど思いつくはずもないが、今に至つた経緯でも聞くとするか。問診代わりにもなるだろう。

「症状から見るに、熱中症だと思います。どうしてこうなつたか原因は思い出せますか？」

「しりとり」

「は？」

「しりとりをしていたんだ」

この人、大丈夫だろうか。しりとりと熱中症のどこに関連性があるのか全く分からぬ。やつぱり医療機関に運んだほうがいいのでは？

そう検討している私を置いて、話は進んでいった。

まとめるど、走りながらしりとりをした後、水分補給を怠つたことが原因だつたらしい。しかも、しりとりをした相手には飲み物を買い渡しておいて、自身の分は買わなかつたとのこと。

「そうですか。以後、注意してくださいね」

大雑把な内容だつたが、省かれた部分も大方察することができる。なので詳細は聞かない。しりとりの相手が誰だつたのかも、結果がどうだつたのかも。

「そろそろいいだろ」

「あと一分です」

「細かいな、お前」

貴方の作ったテストほど丁寧じゃない。

「……今度こそ五分経つただろ。ありがとな、助かつた」  
チャンス到来。この感謝に故事付けて要求を通してやる。

「礼を言うなら、一つ願い事を叶えてはくれませんか？」

「願い事？」

「ええ、家庭教師の件です」

「なんだ？お前も生徒になるととかか？」

似たような台詞を過去に何度か聞いた気がする。そして、私の返答も変わりはしない。

「違います。先輩の手伝いをさせてもらいたいだけです」「は？」

「先輩は、過去に家庭教師の経験がないんですよね？」

「あ、ああ」

「いきなり五人の相手は大変でしょう。なので、少しでも力になりたいと思いまして」

「い、いや、そんなことない。俺なら余裕だから手伝いなんていらないから」

断られたか。なら、別のカードを切るまでだ。

「さつきの感謝は、所詮上辺だけのものだつたんですね」

責めるような口調で心に揺さぶりをかける。

「そういうわけじゃない」

「それなら——」

「——とにかく！」

強い語氣共に距離を詰められた。咄嗟に後退するが、すぐに近くの木にぶつかって追い詰められたような形になる。先輩もバランスを崩したのか、私の顔の真横に手をついた。……このシチュエーション、前に一番の部屋に開かれたまま落ちていた女性誌で見たことがある。なんというのだつたか。

「あ、悪い……とにかく、手伝いはいらない」

断るのに何か特別な理由があるのだろうか、意固地になつているかのような態度を見るとそう思わずにはいられない。

……仕方ないか。必要とあらば嘘をつく、それが私のスタイルだ。

手札が無ければ今ここで作るとしよう。

「断られても困ります。一応、父から監視の役割を任せているので」「監視?!」

「先輩と直接お会いしたことがない程に、父は多忙の身です。ですの  
で、私にそういうた役割が回ってくることにも不思議はないでしょ  
う？」

嘘は真実で嵩増し可能。そうすれば露呈する可能性も低くなる。  
時間が経過するほどバレやすくなるが、それまでに私の有用性を示  
せばいいだけの話だ。

「まあ、手伝いはおまけみたいなものだと考えてください」

「……わかった」

随分と渋ったうえでの了承だった。

「ご理解いただき感謝します」

「はあ……」

笑顔の私とは対照的に、疲労感を除かせる先輩。きっとまだ熱中症  
から回復しきれていないのだろう。そうに違いない。

「早速ですが前回のテスト、四葉姉だけは復習してくれました。昨夜  
のことですがね。次回に行う授業でどのぐらい記憶できているか確  
認してみてはいかがでしょうか」

「ほう、四葉がか、関心だな」

「随分と頑張っていたので、褒めてあげるとやる気モチベーションも上がるかもしれ  
ませんね」

頭を撫でてあげると尚良い。あれは気分が高揚しつつも落ち着く  
という矛盾を孕んだ効果がある。なんだつたら私が勉強する前に  
やつてほしいぐらいだ。

「これ、テストの復習に使つた物です」

「これつて……」

鞄から取り出したのは、余分に作つておいたテストのコピーだ。

「この解説、やっぱりお前が書いたんだな」

「前に否定したはずですが」

「前は、何かしたのかと聞いただけだ」

おつと、いけない。鎌をかけられていたか。やはり断言されると  
引っかかりやすいな。

「そうでしたっけ？」

「とぼけるな」

「ああ、失礼。つい悪い癖が出てしまいました」

「お前、やたらと姉達から心配されているんだな」

「そう、心配だけは一丁前なのだ。」

「私も心配しているのでお相子ですよ」

「おあいこ……ね」

「あまり遅くなるのもいけませんし、そろそろ帰りましょうか」

「露骨に逃げたな」

「逃げてはいない。だつて——。」

「おい、お前の家は逆だろ」

「——家まで送りますから」

「は？」

「ほら、行きますよ」

道は覚えていたので、引っ張るような形で先導していく。

「そう言えば、次の授業はいつですか？」

「明日の放課後に図書室でやることになつてている」

何人来るかは知らんがな。と、投げ遣り氣味に付け加えた彼の表情を盗み見れば、不安と期待が入り混じっていた。

「私からも声は掛けます。きつと来てくれますよ」

「一人か二人は。

「どうか、お前足早いぞ！俺のこと全然心配してないだろ」

「そんなことありません」

ただ貴方のことはついでなだけだ。足早になるのにも理由がある。

「本当かよ……」

背後から訝しむ視線を送られつつも、上杉家へと辿り着く。

「おい、どこまで付いていくる気だ」

「そりゃあ。

「中まで」

「は？中までつて今は——」

「——いるんでしよう？らいはさん」

そう、上杉先輩の妹。上杉らいはさんこそが本命。

「なんだ、約束していたのか」

「いいえ」

玄関の前にまで来たところで答える。

「はつ？それはまずい！」

「まずいって、何が——」

「——お、お、お、お、お兄ちゃん……？」

壊れかけのレディオような声が背後からした。

「な、なな、なななな」

振り返れば、彼女はいた。

「ま、待て！落ち着くんだ、らいは」

エコバッグを持った小さな手に力が込められるの視認した私は、数

瞬先の未来を予期して身構える。

「なんで七海さんを連れてきちゃうの!?お兄ちゃんのバカー!!」

「す、すまん！」

目を瞑りながら兄に突撃した妹は、エコバッグを振り回そうと遠心力をつけた。

とはいえ、そこまで力の籠つた攻撃ではないので大事には至らないだろう……頭部にさえ命中しなければ。

目前の兄妹には身長差がある為、立つてさえいれば頭部に命中することはなかつたはず。しかし、兄の方が謝罪して頭を垂れていたのだ。これでは綺麗に命中してしまう。

当然、その光景が訪れるのを阻止する為に上杉兄妹の間に入る。

体で受け止めれば無事に終わる——そう考えていた私の耳が、特徴的な音を拾つた。それは、プラスチックの音擦れる音だつた。

エコバッグを手にして帰ってきたということは、買い物帰りの可能性が高い。もし予想が当たつているのなら、プラスチック容器に食材が入つていたとしてもおかしくない上、そのほとんどは衝撃に対しても脆弱だ。

「えつ!」

攻撃が当たる寸前でようやく目を開けた彼女は、標的ではない私が目の前に居ることに大層驚いていた。

だが、勢いのついた動作は止まらない。

「きやつ!」

可愛らしい悲鳴が聞こえたが、私も動作を止める訳にはいかない。

「つと」

なるべく衝撃が少なく済むように、らいはさんの腕とエコバッグを受け流す形で物体との衝突を回避させる。

「お怪我はありませんか?」

「え?……は、はい」

状況が理解できていないのか、呆けた表情で返事がきた。これまた可愛らしい。

「それは良かつた。バッグの中身はどうでしょうか?」

「あつ!卵!」

どうやら、私の危惧は無駄ではなかつたようだ。

「ほつ、よかつたあー。どれも割れてない」

「んあ? 何かあつたのか?」

ようやく頭を上げた『ついでの人』は放置して会話は進行していく。

「あ、あの!ご、ごめんなさい!」

「こういつた時は『ありがとうございます』と言つてもらえると嬉しく思います」

「また思つてもない嘘を吐いた——そう思つていた。

「え、えつと、ありがとうございます!」

ただ会話を誘導する為だけに吐いた嘘は、目の前の少女によつて真へと変えられた。やはり、私の抱いた感情に間違いはなかつたか。

「礼を言うなら、一つ願い事を叶えてはくれませんか?」

「おい、それつてさつきの——」

「——心配無用です。無茶な要求をするつもりはありませんから」

とは言つたものの、声音は自分でも驚くほどに固かつた。

その理由は、私が緊張しているからだ。

屋上で告白してきた彼も、似たような気持ちだつたのだろうか。

「らいはさん」

「は、はいつ！」

「もし、私に感謝してくれているのなら」

同じ意味の言葉を、意味もなく繰り返す。これは、足りない勇気が満ちるまでの時間稼ぎでしかない。

「もし、貴女さえ良ければつ」

さつきまで感じていなかつたはずの喉の渴きは、まるで十kmを走り終えた時以上だ。

「それなら——」

最近メールで遣り取りを始めた相手、それがらいはさんだつた。そして、その過程で芽生えた想いこそが今から口にする願いだ。

「——私と友達になつてください！」

高まる鼓動とは裏腹に、緩やかに感じる時の流れがもどかしい。しかし、今は我慢の時だ。私に告白しててくれた人達同様、ちゃんと答えを待たねば。そして、少しでも誇れる自分に成れるよう——。

「ごめんなさい！」

———誇りは塵と化しました。今すぐ泣いて逃げ出したい。